札幌市文化財調査報告書51

T276遺跡

1996

札幌市教育委員会

例　言

1　本書は，丸紅株式会社北海道支社が計画した豊平区平岡6条3丁目の共同住宅建設及びこれに伴う造成工事に係る用地内に所在するT 276遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の住所は，札幌市豊平区平岡6条3丁目に所在する。

3　調査期間は，以下のとおりである。

平成6年度

発掘調査　自：平成6年4月25日
　　至：平成6年8月10日

整理業務　自：平成6年8月11日
　　至：平成7年3月31日

平成7年度

整理及び報告書作成業務
　　自：平成7年4月1日
　　至：平成8年3月31日

4　発掘調査は，札幌市市民局文化部文化財課加藤邦雄，上野秀一，羽賀憲二，仙庭伸久の4名が担当した。

5　現場での作業及び，整理・報告書作成業務は羽賀が中心となり実施した。
なお，本書の編集は羽賀の責任において行った。

6　発掘調査には，下記の人々が従事した。
鍛治川愉美子，川口美穂子，久原洋子，清野玉実，高橋雅子，田中静枝，波川和明，原口みゆき，保木本祥子，山中文雄，渡辺幸代

7　整理作業及び報告書作成作業には，以下の人々が従事した。

平成6年度

高橋雅子，西村恵子，原口みゆき，藤森真規子，波川和明，（遺物整理，土器拓本），田中静枝（図面整理，トレース，土器・石器実測），三浦進（現場写真焼き付け）

平成7年度

清野玉実，波川和明，田中静枝（挿図作成・写植），三浦進（遺物写真撮影・焼き付け），渡辺幸代（データ整理）

8　石器の石質鑑定には，北海道開拓記念館赤松守雄氏に肉眼による鑑定をお願いした。

9　発掘調査，整理作業，報告書作成業務を通し下記の機関及び人々より種々の有益なご指導，助言を賜った。
文化庁，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター，北海道教育委員会，㈶北海道埋蔵文化財センター，内山真澄，大沼忠春，岡田淳子，木村英明，高橋和樹，種市幸生，畑宏明，林謙作，山田悟郎，吉崎昌一（以上順不同，敬称略）

10　発掘調査及び整理・報告書作成業務については，丸紅株式会社北海道支社の絶えざる協力があった。記して感謝を表す次第である。

目　次

第１章　発掘調査に至る経過 …… 7

第２章　遺跡の位置と環境 …… 8

第３章　発掘調査の方法と遺跡の層序 …… 15
第１節　発掘調査の方法 …… 15
第２節　遺跡の層序 …… 16

第４章　遺構および出土遺物 …… 17
第１節　ピット …… 17

第５章　発掘区出土遺物 …… 30
第１節　土器 …… 30
第２節　石器 …… 45

第６章　まとめ …… 52

挿図目次

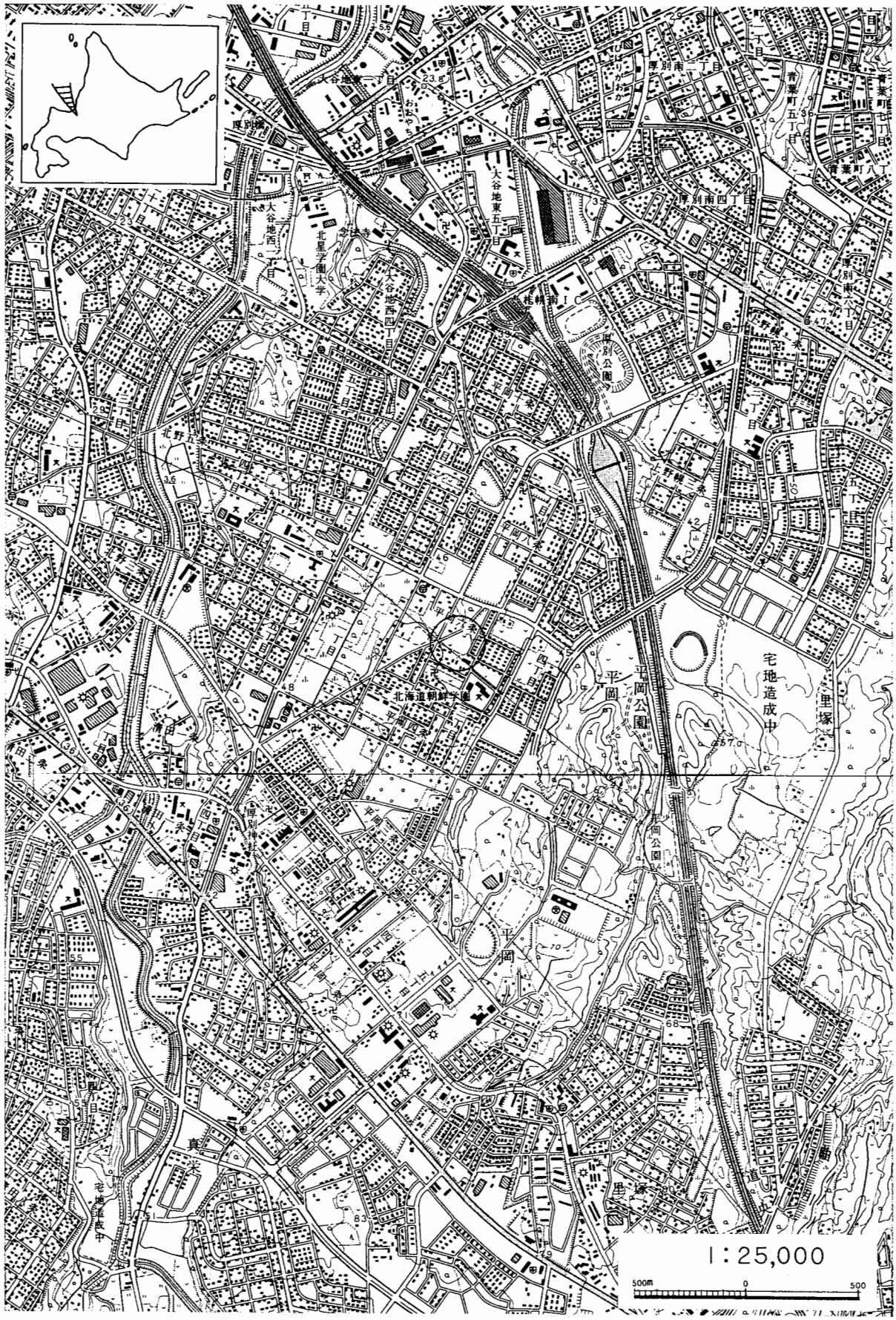
第１図　遺跡位置図 …… 5
第２図　遺跡付近地形図 …… 9
第３図　発掘区配置および遺構関連図 …… 11
第４図　発掘区微地形図 …… 13
第５図　第１号ピット …… 18
第６図　第２号ピット …… 19
第７図　第３・５・６号ピット …… 21
第８図　第４・７・８号ピット …… 23
第９図　第９～13号ピット …… 26
第10図　第14～16号ピット …… 27
第11図　発掘区出土土器拓影図 …… 31
第12図　発掘区出土土器拓影図 …… 33
第13図　発掘区出土土器拓影図 …… 38
第14図　発掘区出土土器拓影図 …… 39
第15図　発掘区出土土器拓影図 …… 40
第16図　発掘区出土土器拓影図 …… 43
第17図　発掘区出土石器実測図 …… 46
第18図　発掘区出土石器実測図 …… 47
第19図　発掘区出土石器実測図 …… 48

挿表目次

第１表　遺跡抄録 …… 6
第２表　ピット計測表 …… 54
第３表　発掘区出土土器属性表 …… 54
第４表　発掘区出土石器計測一覧表 …… 62

図版目次

図版 1　遺跡付近空中写真 …… 65
図版 2 A　遺跡発掘区全景 …… 67
B　遺跡発掘区全景 …… 67
図版 3 A　遺跡発掘区全景 …… 68
B　遺跡発掘区全景 …… 68
図版 4 A　遺跡発掘風景 …… 68
B　遺跡発掘風景 …… 68
図版 5 A　体験学習 …… 69
B　体験学習 …… 69
図版 6 A　第 1 号ピット検出状況 …… 70
B　第 1 号ピット …… 70
図版 7 A　第 2 号ピット検出状況 …… 71
B　第 2 号ピット …… 71
図版 8 A　第 3 号ピット検出状況 …… 72
B　第 3 号ピット …… 72
図版 9 A　第 4 号ピット検出状況 …… 73
B　第 4 号ピット …… 73
図版 10 A　第 5 号ピット検出状況…… 74
B　第 5 号ピット…… 74
図版 11 A　第 6 号ピット検出状況…… 75
B　第 6 号ピット…… 75
図版 12 A　第 7 号ピット検出状況…… 76
B　第 7 号ピット…… 76
図版 13 A　第 8 号ピット検出状況…… 77
B　第 8 号ピット…… 77
図版 14 A　第 9 号ピット検出状況…… 78
B　第 9 号ピット…… 78
図版 15 A　第 10 号ピット検出状況 …… 79
B　第 10 号ピット …… 79
図版 16 A　第 11 号ピット検出状況 …… 80
B　第 11 号ピット …… 80
図版 17 A　第 12 号ピット検出状況 …… 81
B　第 12 号ピット …… 81
図版 18 A　第 13 号ピット検出状況 …… 82
B　第 13 号ピット …… 82
図版 19 A　第 14 号ピット検出状況 …… 83
B　第 14 号ピット …… 83
図版 20 A　第 15 号ピット検出状況 …… 84
B　第 15 号ピット …… 84
図版 21 A　第 16 号ピット検出状況 …… 85
B　第 16 号ピット …… 85
図版 22　発掘区出土土器 …… 86
図版 23　発掘区出土土器 …… 87
図版 24　発掘区出土土器 …… 88
図版 25　発掘区出土土器 …… 89
図版 26　発掘区出土土器 …… 90
図版 27　発掘区出土土器 …… 91
図版 28　土器文様 …… 92
図版 29　発掘区出土石器 …… 93
図版 30　発掘区出土石器 …… 94
図版 31　発掘区出土石器 …… 95
図版 32　発掘区出土石器 …… 96



第１図　遺跡位置図（○印：Ｔ 276 遺跡）
本地形図は、国土地理院発行の 2,5 万分の１
地形図（札幌東部・清田）を使用したものである。

第1表

報告書抄録

ふりがな	T 276 いせき
書名	T 276 遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	札幌市文化財調査報告書
シリーズ番号	51
編著者名	羽賀　憲二
編集機関	札幌市埋蔵文化財センター
所在地	〒064 北海道札幌市中央区南22条西13丁目　TEL 011－512－5430
発行年月日	西暦　1996年3月29日

ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
T 276 いせき T 276遺跡	さっぽろしとよひらくひらおか 札幌市豊平区平岡 ろくじょうさんちょうめ 6条3丁目	01105	276	43度 00分 18秒	141度 22分 55秒	199405～ 199408	6,000	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
T 276遺跡	遺物散布地	縄文中期 ・後期	陥穴・土壙	土器・土製品 石器・各種剥片	

第1章　発掘調査に至る経過

丸紅株式会社北海道支社は，厚別区上野幌地区より豊平区平岡・里塚地区にかけて広大な地域の大規模な宅地造成工事を昭和40年代後半より継続的に実施して来ている。

平岡地区における共同住宅建設及びこれに伴う造成工事について，周知の埋蔵文化財包蔵地が2カ所その地区に含まれるということで，埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて，事前協議に入ったのは平成4年10月のことであった。

札幌市では周知の埋蔵文化財包蔵地を中心として試掘調査を実施した。結果，平岡6条3丁目に所在するT 276遺跡は表土の移動が激しく行われてはいるが比較的深い部分について遺物包含層が残っていることで面積は，約6,000 m²の広がりが確認された。

その他の地区については，幾度かにわたって行われた農地改良事業のためと，表土が薄く耕作が基盤のローム層まで完全に及んでいることから遺跡は消滅していることが確認された。

札幌市では，T 276遺跡について丸紅株式会社北海道支社と保存が可能かどうかの協議を実施した。

しかし，丸紅株式会社北海道支社が計画している平岡地区の共同住宅建設計画は周囲の造成計画がすでに進んでいること，T 276遺跡が存在する地区が建設計画の要をなすとの理由から現状保存は不可能との結論を得た。結果，記録保存を目的とした発掘調査もやむ終えないとの協議結果から，発掘調査を実施することとした。

札幌市では丸紅株式会社北海道支社から，発掘調査の依頼を受けたが平成5年度は札幌市の調査体制が整わず，丸紅株式会社北海道支社には工事計画の大幅な変更をお願いし平成6年度の事業として実施することとして合意を得た。

発掘調査は，札幌市市民局文化部文化財課埋蔵文化財係（札幌市埋蔵文化財センター）が丸紅株式会社北海道支社からの受託業務として実施することとなった。

現場での調査期間は，平成6年4月より平成6年8月までの4カ月弱の期間。整理作業は平成6年8月から平成7年3月，整理作業・報告書作成については平成7年4月から平成8年3月までの期間の実施計画で実行された。

発掘調査に際しては，発掘区に接して住宅地が存在していること，発掘対象地区のみが周囲を削り取ったかのように一段高く残っていることから，粉塵の発生が懸念された。

対策として，発掘区周囲に3.6 m高の防塵ネットを建て発掘区全体を覆うこととした。この工事については丸紅株式会社北海道支社が実施した。

第2章　遺跡の位置と環境

T 276遺跡は，札幌市豊平区平岡6条3丁目に所在する。

道道真駒内御料札幌線に接続する市道東部4号線と市道平岡1号線に挟まれた地区で周囲は大規模な宅地造成が終了しており，かっての景観は遺跡の残存している地区に一部残されているにすぎない。

本遺跡の北東側には里塚付近より端を発する二里川が北西方向に流れ厚別区大谷地付近で厚別川に合流していたが，現在は宅地造成により河川は埋め立てられ地下に埋設されたコンクリート管内を流れている。

本遺跡は，二里川の左岸段丘に立地した遺跡である。

本遺跡の周囲では二里川の流路の影響で沢地・低地となっていた部分も，現在では埋め立てられかすかに痕跡が残る程度となっている。

平岡地区は，いわゆる野幌丘陵と称される丘陵地帯上にある。

野幌丘陵は，札幌市の東部地区にあり南端には広島町竹山地区から北方へ延び，半島状に平野部へ突出している。高度は，南側が最も高く約100 mの標高を呈する。北方に向け徐々に高度を下げ，江別市街地の背後では標高60 m前後となる。

南北方向に走る稜線上の平坦面を境にして，地形は東西にゆるく傾斜し多くの小河川が解析しさらにこれに伴って小支谷が作り出され複雑な地形となっている。

平岡地区は，この野幌丘陵の西側部分のほぼ中央に当たる。厚別川によって大きく解析された台地で，標高は40～60 m程ある。周辺は南側は豊平区里塚地区，西から北側にかけては豊平区北野地区，北から東方向にかけては厚別区上野幌地区が広がる。

この台地は，厚別川支流の二里川，三里川とこれらに関連する大小の谷により細かく解析され一見複雑な地形を呈する。

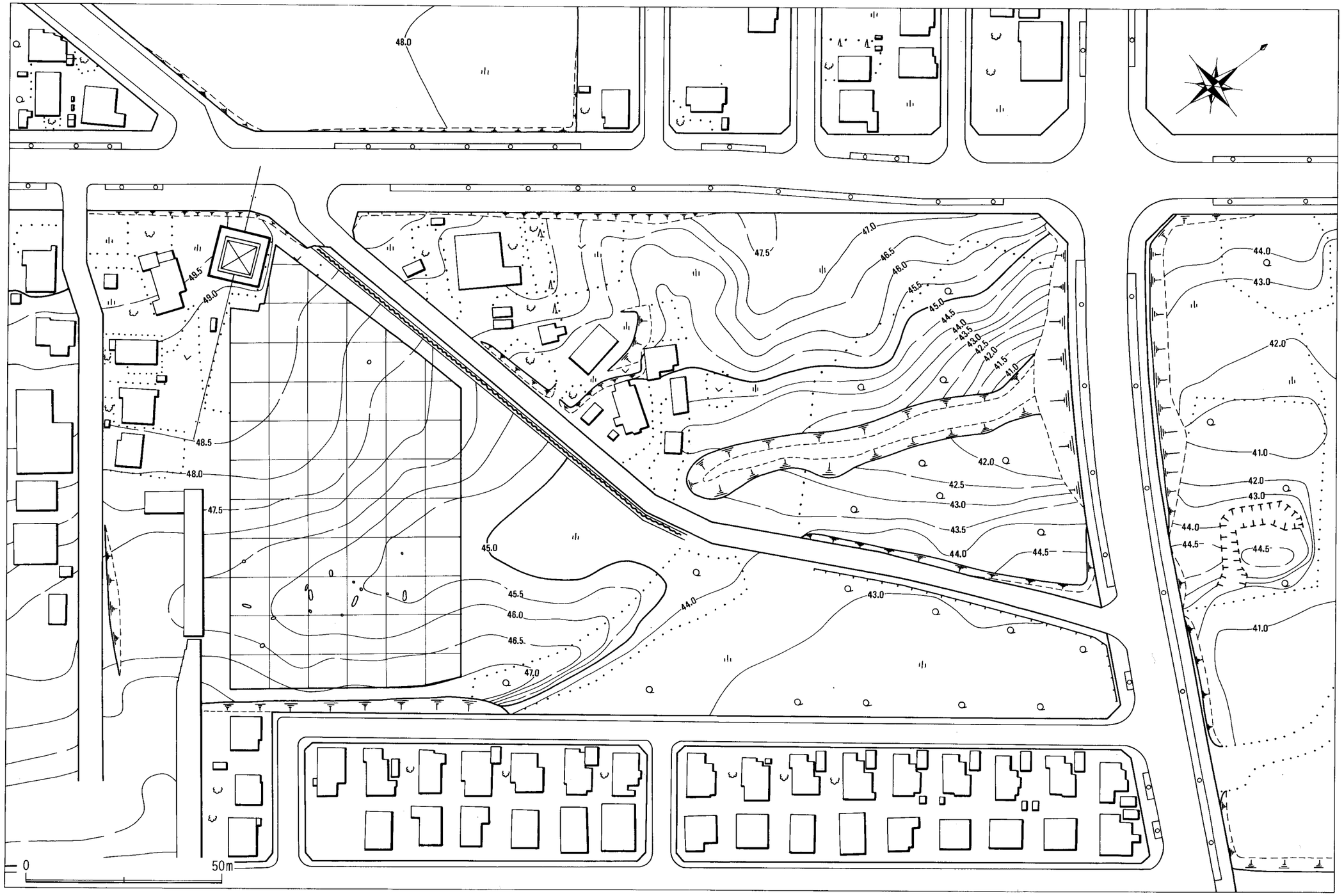
二里川に関連する遺跡は，左岸側ではT 275遺跡，本遺跡，右岸側ではS 264遺跡，S 263遺跡，S 262遺跡，S 265遺跡，S 266遺跡，S 267遺跡，S 268遺跡，S 269遺跡と比較的多くの遺跡の存在が知られている。左岸段丘上に立地する遺跡は，一般的に小規模な傾向が見られる。右岸段丘上に立地する遺跡は，S 265遺跡の一部を除いて全て発掘調査が終了しており概要も把握されている。

時期的には，縄文時代早期～縄文時代晩期，続縄文時代の土器・石器が発見されている。遺構は，縄文時代中期の竪穴住居跡がS 267･268遺跡，S 265遺跡で各3軒検出されており，土壙はS 265遺跡16基，S 267・268遺跡2基検出されている。本遺跡でも検出している狭長の溝状を呈する陥穴と考えられる特殊な形状のピットは，S 267･268遺跡60基，S 269遺跡2基，S 265遺跡10基，S 262･263遺跡12基の合計84基が検出されている。

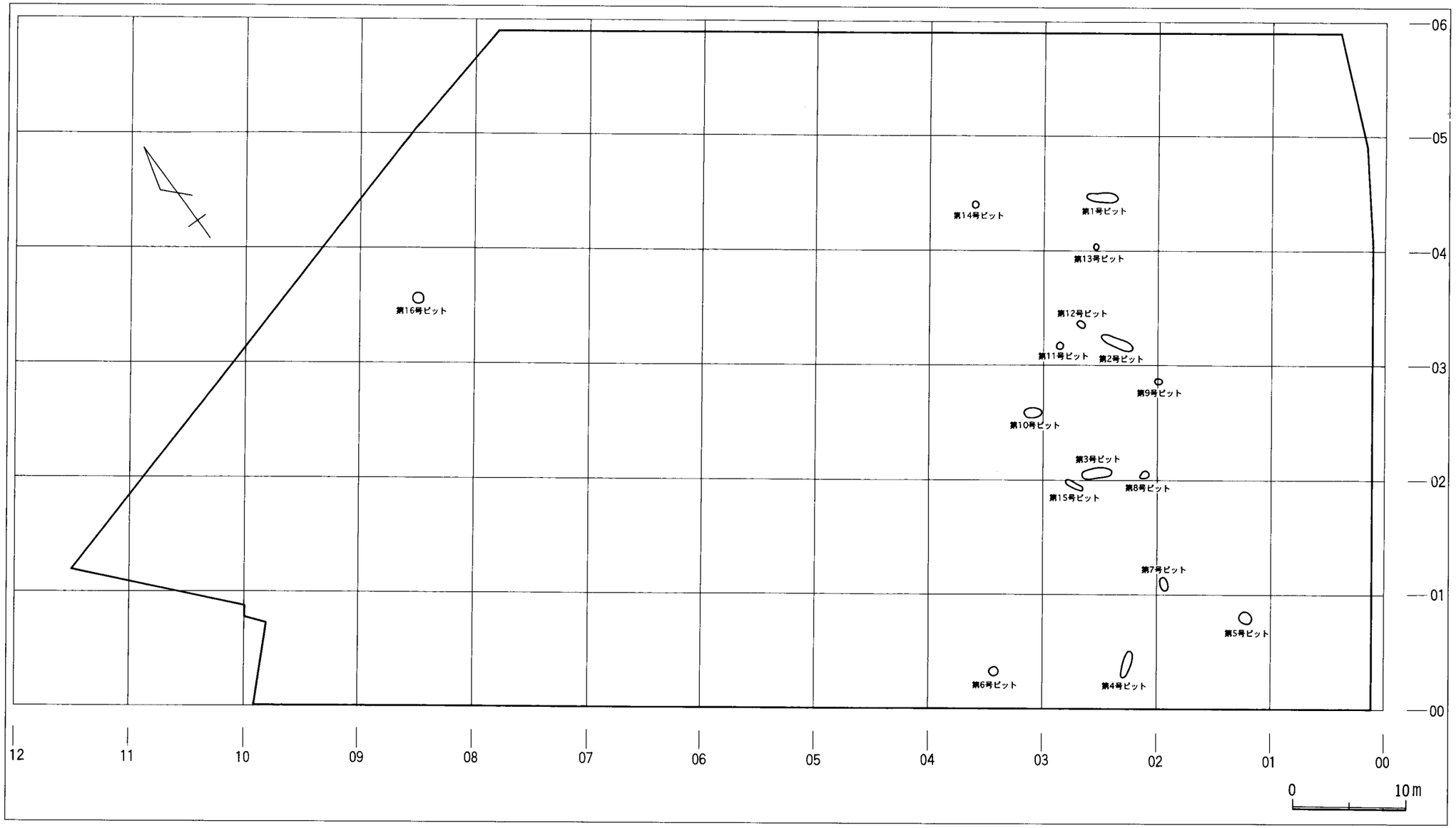
先に，傾向として二里川右岸の遺跡は小規模であると記したが，左岸に位置する遺跡の状況ではS 267・268遺跡，S 265遺跡は遺構が多数検出され遺物の出土量も多い。他の遺跡は，発見された遺構は狭長で溝状の陥穴と考えられる特殊な遺構が数基検出されたのみで遺物の出土量が非常に少ない傾向が見られる。

二里川左岸に分布する遺跡は，遺跡群とも言うべき状態で集合し総面積32,000 m²に及ぶ。各遺跡は，連続してあり遺跡ごとの境界は遺物の希薄さ，遺構の分布状態で推測したような状況である。

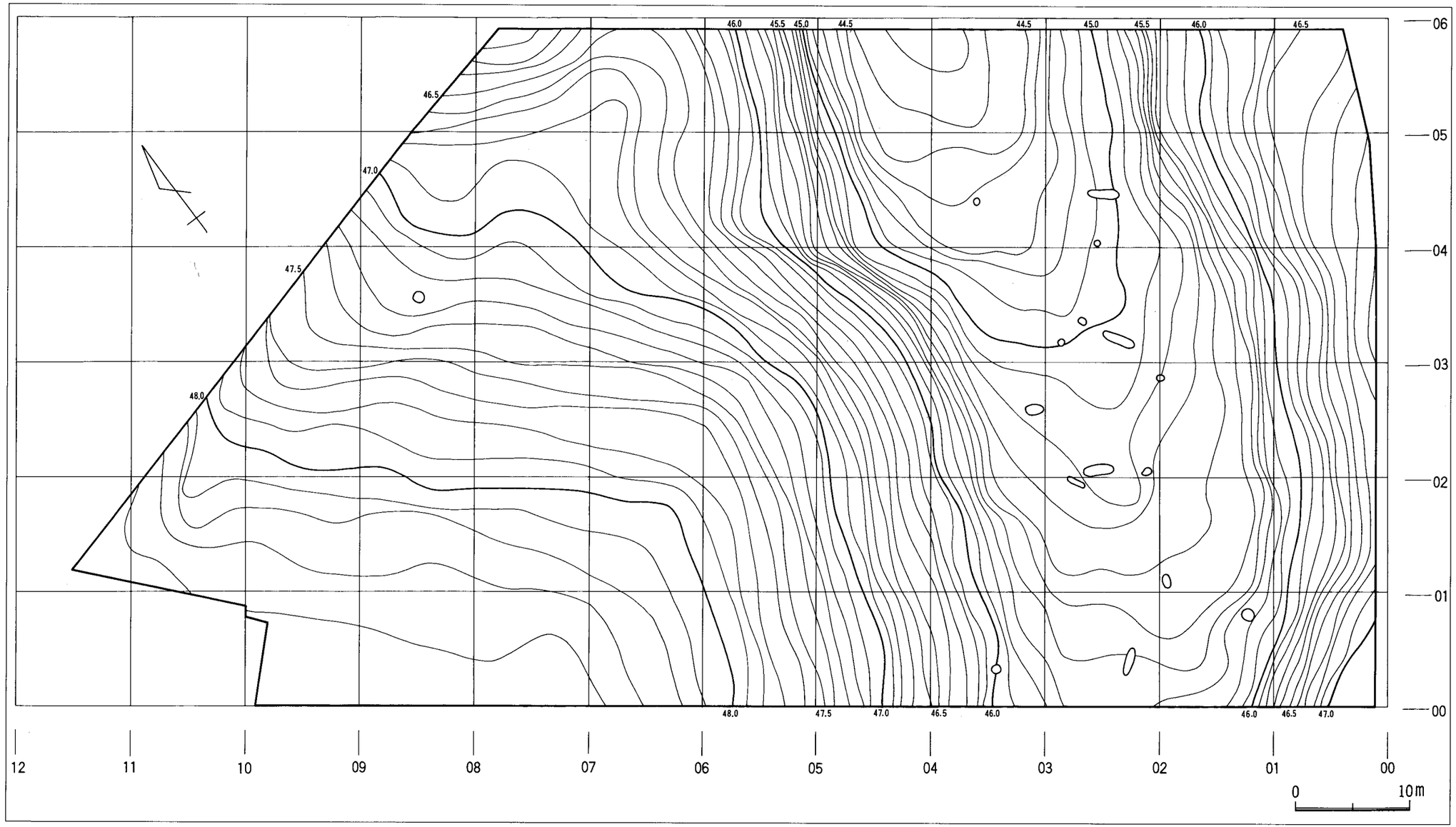
二里川右岸遺跡群は，一時期に生活領域として営まれたものでなく長い年月の中，波状的に生活空間とした状況がうかがえるであろう。


48.0
49.5
49.0
48.5
48.0
47.5
45.0
45.5
46.0
46.5
47.0
47.5
47.0
46.5
46.0
45.5
45.0
44.5
44.0
43.5
43.0
42.5
42.0
41.5
41.0
42.0
42.5
43.0
43.5
44.0
44.5
43.0
44.0
44.0
43.0
42.0
41.0
42.0
43.0
44.0
44.5
44.5
41.0
0
50m

第 2 図　遺跡付近地形図



第 3 図　発掘区配置および遺構関連図


46.0
45.5
45.0
44.5
44.5
45.0
45.5
46.0
46.5
46.5
47.0
47.5
48.0
06
05
04
03
02
01
00
48.0
47.5
47.0
46.5
46.0
46.0
46.5
47.0
12
11
10
09
08
07
06
05
04
03
02
01
00
0
10m

第 4 図　発掘区微地形図

第3章　発掘調査の方法と遺跡の層序

第1節　発掘調査の方法

今回の発掘調査は，集合住宅建設のための造成工事に伴うものである。

試掘調査の結果，周知の埋蔵文化財包蔵地として範囲が明記された範囲より面積が若干狭い約6,000 m² の範囲が発掘対象地区となった。

調査対象地区の周囲は，宅地造成工事がすでに終了し住宅が整然と建ち並んだ状況となっている。包蔵地のみが周囲を切り取られて残った状況にある（第2図)。

発掘区の設定に当たっては，南西側敷地境界の角の境界杭を基本杭とした。基線（X軸）は南西側の境界線を使用した。これを10 m ごとに区切り直交する直線を光波測距儀で設定Y軸とした（第3図)。

X軸は，基本杭を00とし10 m ごとに01～12と杭の名称を付けた。

Y軸は，基本杭を00とし10 m ごとに01～06と杭の名称を付けた。

杭の名称としては，X軸を優先し後ろにY軸名を付し01-01の様に呼称する事とした。

発掘区の名称は，北角の杭の名称を発掘区の呼称とすることとした。

発掘調査は，表土層（耕作土）を人力にて掘削排土し遺物の採集，遺構の検出に務めた。

発掘発生土については，仮置きの為の面積がとれずこれについては重機を使用し高く積み上げビニールシートを被せ防塵対策とした。

当初，出土遺物の取り上げに光波測距儀を使用，出土位置の記録を行う計画であったが遺物包含層のほとんどが撹乱を受けておりやむなく断念した。

出土遺物の処理は，発掘区ごとに土器，石器，剝片等に分類一括した。

検出した遺構については，光波測距儀で測点を記録実測した，記録データはパソコンを用い処理し図化機で図化した。

第2節　遺跡の層序

本遺跡に見られる遺物包含層の実態は，野幌丘陵上に分布する周辺遺跡と基本的に同様の状態である。

黒色を呈した腐植土が浅く薄い堆積状況を示す。このため開拓以来の耕作で基盤の黄褐色ローム質土層の面まで撹乱が及ぶ。

本来の堆積層は，沢状地形の黒色土が厚く堆積している部分に限られる。

特に，基盤とした黄褐色ローム質土，さらに下の火山灰質砂質土については，特に記録していない。検出された深い溝状遺構の壁面での観察から，大まかな層序関係は理解される。

黒色を呈する表土層は下には，30 cm の厚さで軟質の黄褐色ローム質土が存在する。その下位には，堅い軽石の混じった黄褐色ローム質土が 30～100 cm の厚さで堆積する。

さらに下層に至っては，淡い灰褐色の火山灰層が厚く堆積する。

本遺跡では，遺物包含層は黒色土に限定される。しかし，黒色土は耕作および掘削によって大部分が撹乱を受けている状況にある。部分によっては，基盤とした黄褐色ローム質土が削平され下の灰色火山灰を直接耕作している状況がある。

発掘区中央に浅い沢状の黒色土が比較的厚く堆積した部分が残るが，この部分はかって建設資材置き場として使用されたため基盤のローム質土の直上まで撹乱が及んでいた。

遺構の検出は，撹乱を受けた黒色土を削平した段階で黒色土の落ち込みとしてプランが検出された。

削平，撹乱が深くまで及んだ部分では，遺構の底のみ検出された。

削平が火山灰層にまで及んでいる地区は，遺構も特殊なものをのぞいて検出していない。

第4章　遺構および出土遺物

今回の発掘調査では，発掘調査面積に比較して発見された遺構は少ない。

発達した黒色土（腐植土）が非常に少ないことに加え，開拓以来の耕作，近年の資材置き場としての若干の造成による撹乱が著しいことが原因である。

かっては谷(沢)を形成したと考えられる発掘区中央部を南北に分断する二里川の支流の一部であったであろう低地に集中して遺構が検出されたのみである。

この部分は周囲の黒色土（腐植土）が耕作あるいは風雨によって流入し厚く堆積している。

発見された遺構は，総計16個で竪穴住居跡と考えられる大型の遺構は検出されなかった。遺構の覆土および壙底から遺物が検出されたものは非常に少ない。しかも形式的表徴の明確ではない器面が磨滅した土器小破片・黒曜石小剝片のみしか検出されていない。

第1節　ピット

第1号ピット（第5図）（図版6）

05-03区中央部にて検出した。表土層の黒色土を削平した段階で基盤層の黄褐色ローム質土層上面に輪郭が検出された。

規模は長軸272 cm，短軸85 cm，深さは遺構確認面から最深で144 cmを測る。

プランは狭長の長楕円形（溝状）を呈する。

長軸方向は，N-132°-Eである。

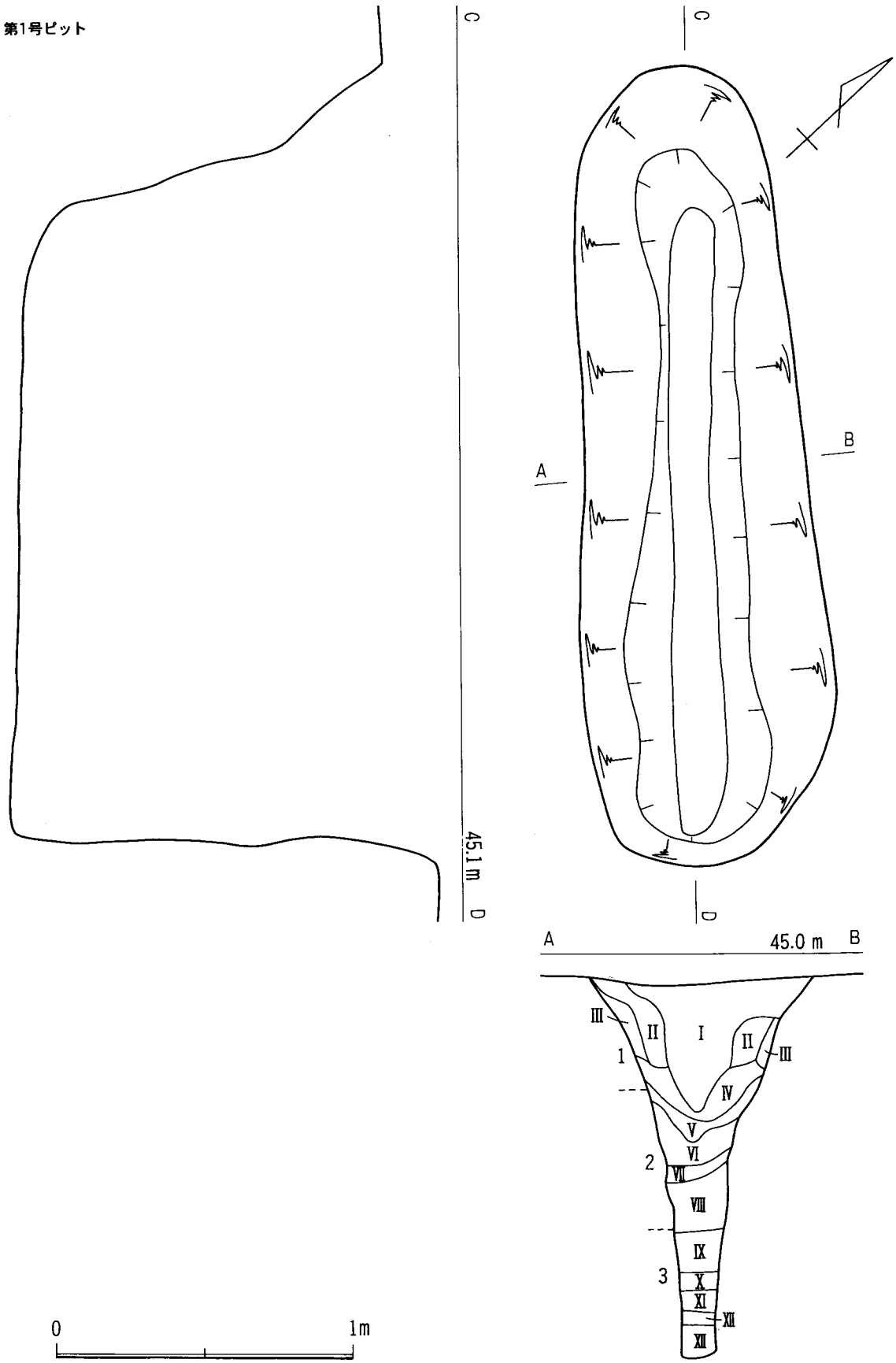
長軸断面形は，北西壁は上部の壁面がなだらかに傾斜し中段より若干上で直立する。南東壁はほぼ直立し壙底面に至る。壙底面は側が高く徐々に中央部に向け下がる。

短軸断面形は，上部の壁がなだらかに傾斜し，中段の上位にて直立する。いわゆる漏斗状を呈する。壙底面はほぼ平坦で壁に接する部分で丸味を帯びる。壁面・壙底面ともに堅くしまっており非常にしっかりしている。

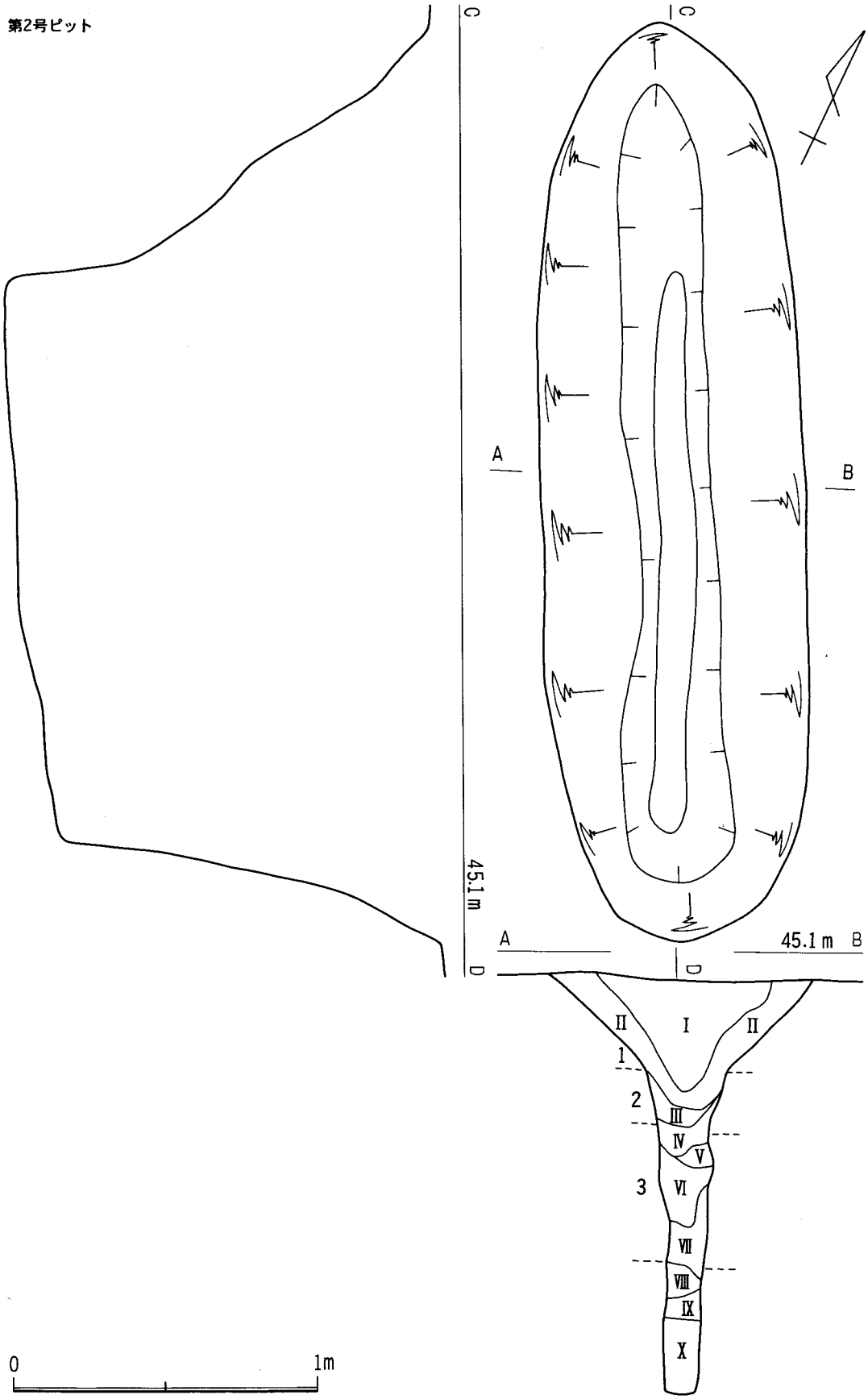
遺物は，覆土層中・壙底面ともに一切検出されなかった。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：真黒色土
第Ⅱ層：暗茶褐色土
第Ⅲ層：火山灰質黄褐色土
第Ⅳ層：褐色土
第Ⅴ層：黒色土
第Ⅵ層：黄褐色土
第Ⅶ層：暗褐色土
第Ⅷ層：黄褐色土
第Ⅸ層：明褐色土
第Ⅹ層：褐色土
第Ⅺ層：黒色土
第Ⅻ層：黄褐色土
第XIII層：真黒色土


第1号ピット
C
45.1 m
D
C
A
B
D
A
45.0 m
B
III
II
I
II
III
1
IV
V
VI
2
VII
VIII
IX
3
X
XI
XII
XIII
0
1m

第5図　第1号ピット


第2号ピット
C
C
A
B
45.1m
A
45.1m B
D
D
II
I
II
1
2
III
IV
V
3
VI
VII
VIII
IX
X
0
1m

第6図　第2号ピット

基盤層の層序は以下のとおりである。

第１層：黄褐色ローム質土

第２層：黄褐色火山灰質土

第３層：橙色火山灰質土

第２号ピット（第６図）（図版７）

04-03 区中央よりやや南西よりに検出した。表土層の黒色土を削平した段階で基盤層の黄褐色ローム質土層上面にプランが確認された。

規模は長軸 303 cm，短軸 87 cm，深さは遺構確認面から最深で 145 cm を測る。

プランは狭長の長楕円形（溝状）を呈する。

長軸方向は，N-152°-E である。

長軸断面形は，北西側の壙口が大きく外反傾斜し壁中段下部まで続く。以下の壁は直立している。南東側は傾斜の角度が強く直立に近く壙底に向け下がる。壙底面は南側が若干高く，西に向け徐々に下がる。短軸断面形は，漏斗状を呈する。壙底面はほぼ平坦で，壁に接する部分で丸味を帯びる。壁面・壙底面は堅くしまっておりしっかりしている。

遺物は，覆土層中・壙底面ともに一切検出されなかった。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：真黒色土

第Ⅱ層：暗褐色土

第Ⅲ層：黄褐色砂質土

第Ⅳ層：黒色土

第Ⅴ層：黄褐色砂質土

第Ⅵ層：茶褐色火山灰

第Ⅶ層：黄褐色火山灰

第Ⅷ層：淡黄褐色火山灰

第Ⅸ層：暗褐色火山灰

第Ⅹ層：黒褐色土

地山の層序は以下のとおりである。

第１層：黄褐色ローム質土

第２層：黄褐色火山灰質砂

第３層：黄褐色火山灰質土

第３号ピット（第７図）（図版８）

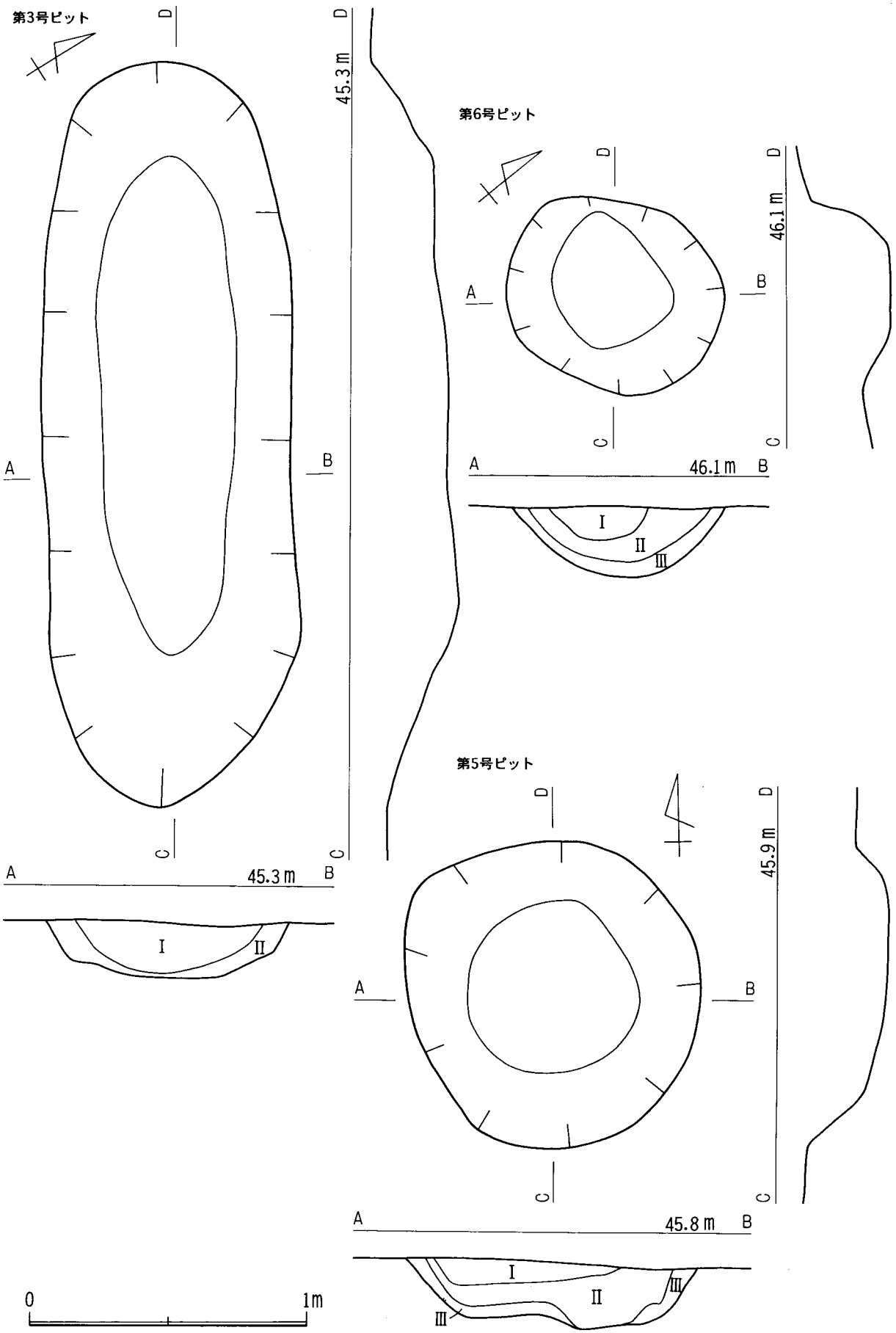
04-03 区中央より南西部で検出した。表土層の黒色土（耕作土）を削除した後，基盤の黄褐色ローム質土上面に輪郭が発見された。

規模は，長軸 270 cm，短軸 93 cm，深さは遺構確認面から最深で 33 cm を測る。

プランは狭長の長楕円形を呈するが，第１・２号ピットに比較して浅く埋没状況におおきな差違がある。

長軸方向は，N-152°-E である。

長軸断面形は，南東壁は緩やかな傾斜でほぼ平坦な壙底面につらなる。北東部壁は，若干傾斜が強



第7図　第3・5・6号ピット

く壙底面につながる。短軸断面では壁は比較的強い傾斜で壙底面につながる。壙底面は，ほぼ平坦だが中央部が若干低くなる。

遺物は，覆土層中・壙底面ともに一切検出されていない。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：真黒色土

第Ⅱ層：暗茶褐色土

第4号ピット（第8図）（図版9）

01-03区中央部より南側にて検出した。表土層の黒色土（耕作土）除去後の基盤の黄褐色ローム質土層上面に輪郭が発見された。

規模は，長軸251 cm，短軸81 cm，深さは遺構確認面から最深で56 cmを測る。

プランは，狭長の長楕円形を呈する。

長軸方向は，N-52°-Eである。

長軸断面形は，中央部が大きくくぼみ壁は緩やかな傾斜で壙底面と接する。短軸断面形は，南西・北東両壁とも直立に近く壙底面は丸味を帯び南西側壙底が一段低くなる。壁面・壙底面とも非常に軟弱である。

遺物は，覆土層中・壙底面ともに一切検出されていない。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：真黒色土

第Ⅲ層：黄褐色土ブロック混じり黒色土

第Ⅳ層：黄褐色土混じり黒色土

第Ⅴ層：黄褐色土

第5号ピット（第7図）（図版10）

01-02区中央より東側にて検出した。表土層除去後の黄褐色ローム質土層上面にプランが発見された。

プランは，ほぼ円形を呈する。

規模は，115×113 cmで，深さは遺構確認面より最深で30 cmを測る。

壁の傾斜は比較的緩く，壙底面は丸味を帯び，一部は若干低くなっている。壁面・壙底面ともに堅くしっかりしている。

覆土中より，形式表徴の明らかでない磨滅した土器破片が1点と黒曜石小剝片3点が検出された。

層序は以下のとおりである。

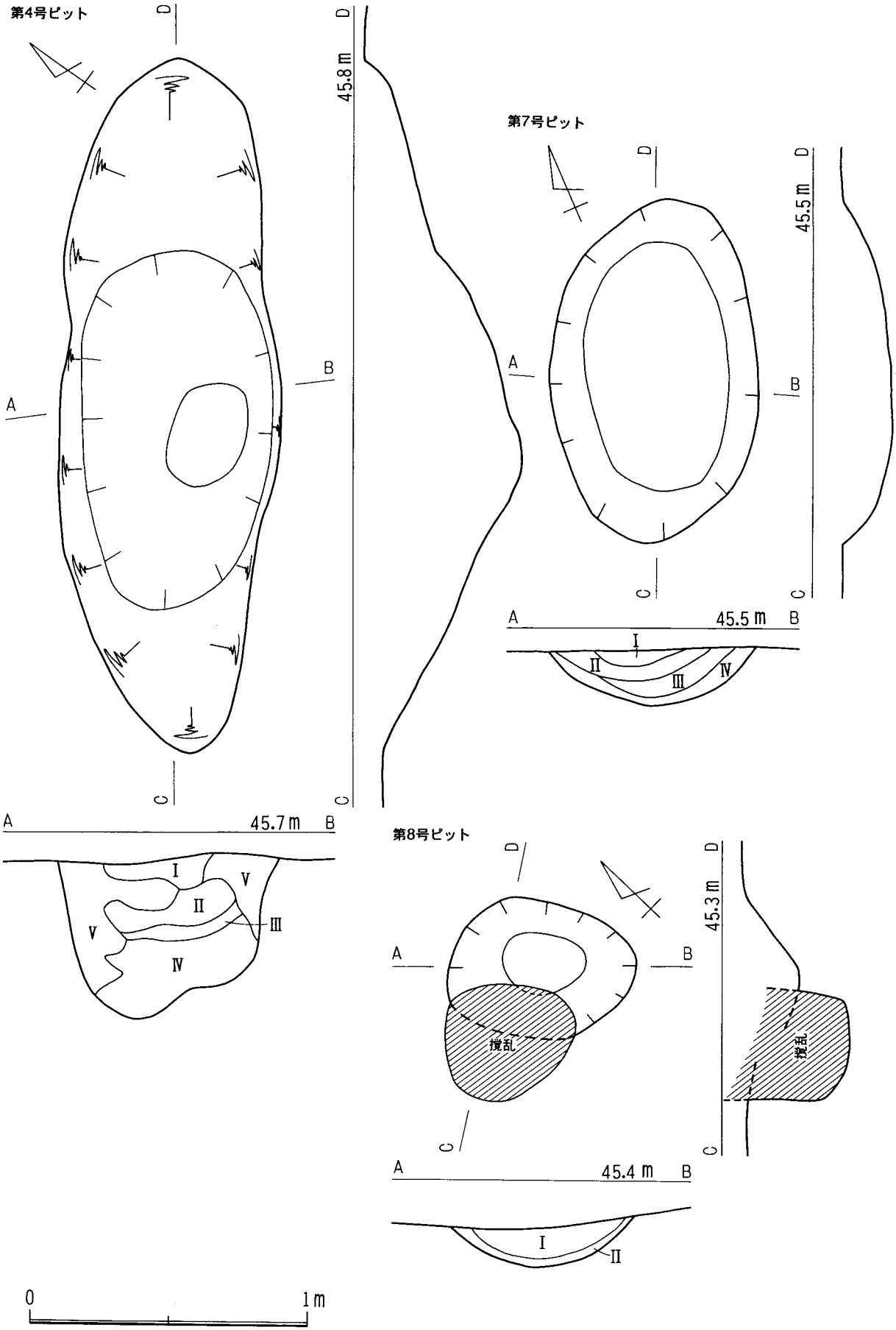
第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：暗茶褐色土

第Ⅲ層：黄褐色ローム質土

第6号ピット（第7図）（図版11）

01-04区中央部よりやや南西よりに検出した。表土層除去後，基盤層である黄褐色ローム質土層の下層である黄褐色火山灰質砂層においてプランが発見された。基盤層の黄褐色ローム質土は表土層とと



第8図　第4・7・8号ピット

もに削平された後に黒色土をさらに戻している。

本ピットは，上部を大きく削り取られているため本来の姿をとどめていない状況にある。

プランは，ほぼ円形を呈する。

規模は，79×70 cm，深さは遺構確認面より最深で 29 cm を測る。

壁は壙底面と差が無いよう丸味を帯びる。壙底面は丸味を帯びる。壁面・壙底面ともに堅くしまっておりしっかりしている。

覆土層中から形式的表徴の明らかではない磨滅した土器小破片 2 点，黒曜石小剝片 2 点が検出された。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：暗茶褐色土

第Ⅲ層：茶褐色土

第 7 号ピット（第 8 図）（図版 12）

02-02 区中央部より西に偏在した部分にて検出した。表土層除去後の基盤層である黄褐色ローム質土層上面にプランが発見された。

プランは，楕円形を呈する。

規模は長径 125 cm，短径 77 cm，深さは遺構確認面から最大 18 cm を測る。

断面形は，全体に丸味を帯びる。

遺物は，覆土層中から黒曜石剝片が 6 点検出されたのみである。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：暗茶褐色土

第Ⅲ層：茶褐色土がまじる黒色土

第Ⅳ層：暗黄褐色土

第 8 号ピット（第 8 図）（図版 13）

03-03 区中央より南に遍在して検出した。表土層（耕作土＝黒色土）除去後の基盤の黄褐色ローム質土下層の黄褐色火山灰砂層面にてプランを確認した。

プランは，楕円形を呈する。西側に木の根と考えられる撹乱穴がある。

規模は，長径 67 cm，短径 44 cm，深さは遺構確認面から最深で 20 cm を測る。

長軸方向は，N-136°-E である。

断面形は，全体が丸味を帯び壁の傾斜は緩やかである。壁面・壙底面ともに軟弱である。

遺物は，覆土層中および壙底面からも一切検出されていない。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：黄褐色土

第 9 号ピット（第 9 図）（図版 14）

03-02 区，03-03 区にまたがり検出した。

プランは，ゆがんだ楕円形を呈する。

規模は，長径 68 cm，短径 59 cm，深さは遺構確認面から最深で 26 cm を測る。

長軸方向は，N-117°-E である。

長軸は全体に丸味を帯びる。短軸は傾斜の緩やかな壁で壙底は丸味を帯びる。壁面・壙底面ともに堅くしっかりしている。

遺物は，覆土層中から形式的表徴の明らかでない器面の磨滅した土器片が 2 点，黒曜石剝片 1 点が検出された。

層序は以下のとおりである。

第 I 層：黒色土

第 II 層：暗褐色土

第 III 層：暗黄褐色土

第 10 号ピット（第 9 図）（図版 15）

03-04 区中央部より南東側によった部分で検出した。

プランは楕円形を呈する。

規模は，長径 165 cm，短径 90 cm，深さは遺構確認面から最深で 29 cm を測る。

長軸方向は，N-65°-E である。

長軸断面形では，北西側の壁は傾斜が緩やかで，南東側壁は若干傾斜が強まる。短軸断面形は壁面，壙底面ともに丸味を帯びる。壁面・壙底面ともに堅くしっかりしている。

遺物は，覆土中・壙底面いずれからも一切検出されなかった。

層序は以下のとおりである。

第 I 層：黒色土

第 II 層：暗褐色土

第 III 層：黄褐色土

第 11 号ピット（第 9 図）（図版 16）

04-03 区中央部より南西角近くに検出した。

プランは，楕円形を呈する。

規模は，長径 71 cm，短径 57 cm，深さは遺構確認面から最深で 29 cm を測る。

長軸方向は，N-160°-E である。

断面形は，比較的傾斜の強い壁面にやや丸味のある壙底面が続く。壁面・壙底面は，堅くしっかりしている。

遺物は，覆土層から黒曜石剝片 3 点を検出したのみである。

層序は以下のとおりである。

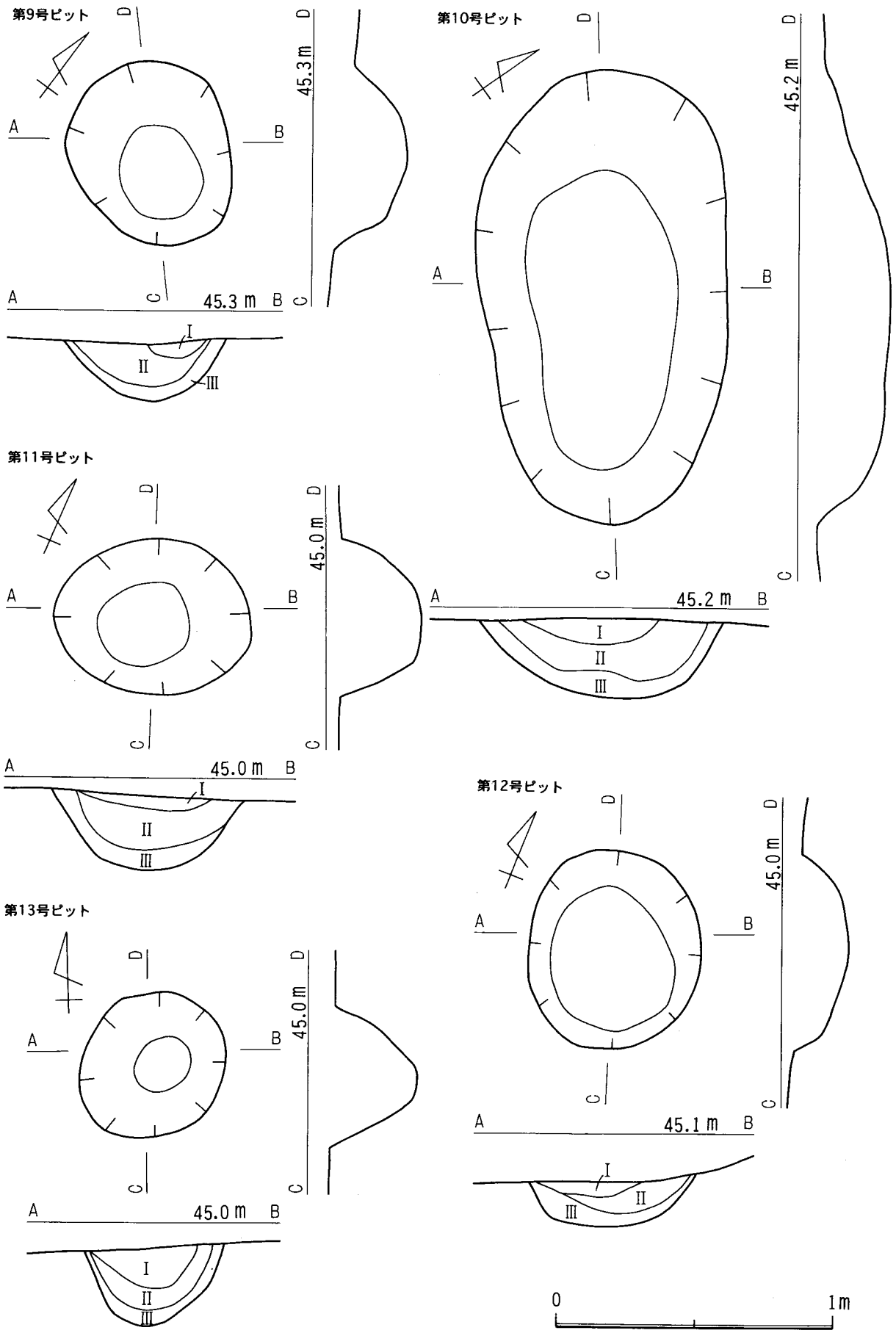
第 I 層：黒色土

第 II 層：暗茶褐色土

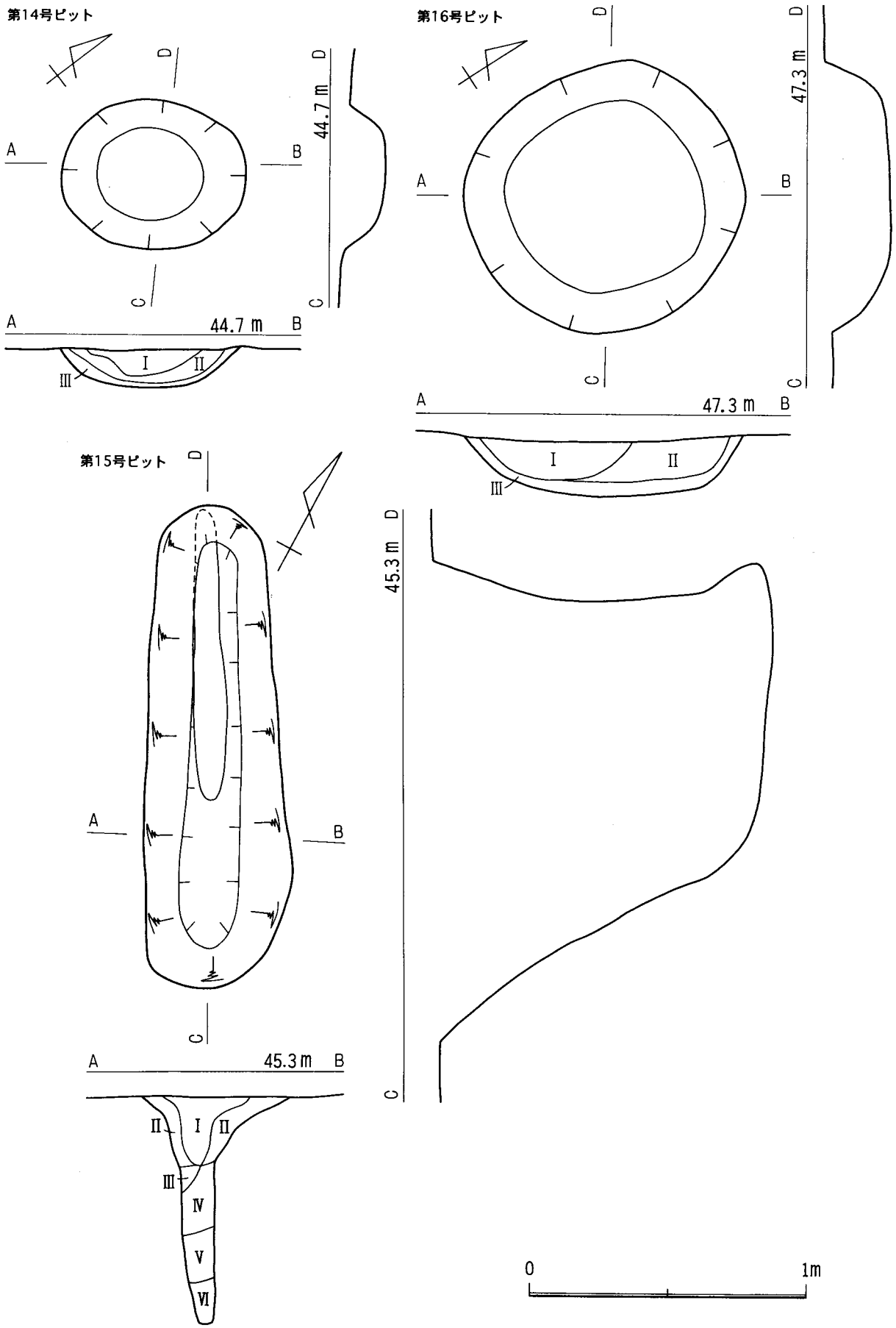
第 III 層：黄褐色土粒が混じる褐色土

第 12 号ピット（第 9 図）（図版 17）

04-03 区中央より北西よりに検出した。



第9図　第9～13号ピット



第10図　第14～16号ピット

プランは，ほぼ円形を呈する。
規模は，72×62 cm，深さは遺構確認面から最深で 20 cm を測る。
断面形は，南西の壁面が傾斜が強く他は丸味を帯びる。壁面・壙底面ともに堅くしっかりしている。
遺物は，覆土層中および壙底面からも一切検出されていない。
層序は以下のとおりである。
第Ⅰ層：黒色土
第Ⅱ層：褐色土
第Ⅲ層：黄褐色土

第 13 号ピット（第 9 図）（図版 18）
05-03 区中央よりやや南西に偏在し位置で検出した。
プランは，ほぼ円形を呈する。
規模は，57×57 cm，深さは遺構確認面から最深で 32 cm を測る。
断面形は，比較的強い傾斜を有した壁面で，壙底面は丸味を帯びる。
遺物は，覆土層中から形式的表徴の明らかでない器面が磨滅した土器小破片が 5 点検出された。
層序は以下のとおりである。
第Ⅰ層：暗褐色土
第Ⅱ層：茶褐色土
第Ⅲ層：黄褐色土

第 14 号ピット（第 10 図）（図版 19）
05-04 区ほぼ中央にて検出した。
プランは，楕円形を呈する。
規模は，長径 67 cm，短径 55 cm，深さは遺構確認面から最深で 15 cm を測る。
長軸方向は，N-37°-E である。
長軸断面形は，短軸断面形は北西壁面が強い傾斜を示し，他は弱い。壙底面はほぼ平坦で，壁面と接する部分が丸味を帯びる。壁面，壙底面ともに堅くしっかりしている。
遺物は，覆土層中から黒曜石剝片 5 点を検出した。
層序は以下のとおりである。
第Ⅰ層：黒色土
第Ⅱ層：暗褐色土
第Ⅲ層：黄褐色土

第 15 号ピット（第 10 図）（図版 20）
02-03 区の 03-03 区に接する部分で検出した。表土層を削平除去した段階で基盤層の黄褐色ローム質土層面でプランを確認した。
規模は長軸 176 cm，短軸 55 cm，深さは遺構確認面から最深で 122 cm を測る。
プランは狭長の長楕円形（溝状）を呈する。
長軸方向は，N-59°-W である。
長軸断面形は，南東壁が大きな傾斜で壙底面と接し北西壁は壙口付近は強い傾斜で途中から直立す

る。壙底部付近はオーバーハングする。壙底面は南東側が若干高く，南西部に向け徐々に低くなる。短軸断面は，漏斗状を呈する。壁面・壙底面ともに堅くしまっており非常にしっかりしている。

遺物は，覆土層中・壙底面ともに一切検出されなかった。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：黒色土

第Ⅱ層：褐色土

第Ⅲ層：黄褐色土

第Ⅳ層：茶褐色土

第Ⅴ層：暗褐色土

第Ⅵ層：黒色土

第16号ピット（第10図）（図版21）

04-05区中央より南西よりにて検出した。表土層は黒色土ではなく下層にある火山灰を直接耕作した状況となっている。本ピットの壙口付近は黒色土を削平段階に削り取られた可能性が大きく，他ピットの壙口付近に存在する黒色土の堆積が無い。

撹乱層を削平・除去後にプランが確認された。

プランは，ほぼ円形を呈する。

規模は，長軸103 cm，短軸100 cm，深さは遺構確認面より最深で23 cmを測る。

断面形は，南東側の壁面は比較的傾斜が緩く，北西側壁は直立に近い。壙底面はほぼ平坦で，壁面と接する部分は丸味を帯びる。壁面・壙底面ともに堅くしっかりしている。

遺物は，覆土層中から黒曜石剝片が4点検出された。

層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層：暗褐色土

第Ⅱ層：茶褐色土

第Ⅲ層：黄褐色土

第5章　発掘区出土遺物

本遺跡の発掘調査では，黒色土の未発達な地域に存在していることに加え耕作と最近工事関係の資材置き場として若干の造成が行われていたことから，検出した遺構は非常に少ないにもかかわらず，土器は比較的多く得られている。

時期は，ごく微量の縄文時代早期の貝殻文土器，主体を占める縄文時代中期の末期円筒式土器，北筒式土器，さらに少数であるが縄文時代後期の磨消し縄文を特徴とした土器も得られている。

石器は，黒曜石剝片を素材とした打製石器が主体を占める。これに磨製石斧，擦石等が加わる。

黒曜石剝片は非常に多く検出されているが，硬質頁岩等の他石材はほとんど無い状況にある。

石器の形状，組成は縄文時代中期の「北筒式土器」に伴出したものが主体であろう。

第1節　土器

第Ⅰ群土器（第11図1）（図版22）

縄文時代早期の貝殻文土器で，1点のみ図示した。

アナダラ属の貝殻腹縁部を土器の器面に連続して押しつけた貝殻腹縁圧痕文が，口縁に平行して施文される。

口唇部断面形は，丸味を帯びる。口縁は平縁で，やや外反する。土器内面は，器面と同種の貝殻腹縁部を横位に引いた貝殻条痕文がみられる。

色調は，にぶい赤褐色を呈し，胎土には火山灰粒・砂粒が含まれる。焼成も良好であり，堅く焼きしまっている。

第Ⅱ群土器（第11図）（図版22～27）

縄文時代中期に属する土器を一括した。

粘土紐による貼付帯，半截竹管を多用した刺突，連続刺突，沈線を特徴とした土器群をA類土器，大型の円形刺突文列を特徴とした土器群をB類土器と細分した。

A類土器は，円筒上層式土器の北海道中央部付近で地方化した「平岸天神山式土器」「柏木式土器」と称される土器群である。

B類土器は，いわゆる太い円形刺突文を特徴とした「北筒式土器」と称される土器群である。

A類土器（第11図2～31）

粘土紐による貼付帯・貼付文と大型の山形突起，器面・貼付帯には半截竹管を多用した連続刺突文，刺突文，沈線文等が施文される。

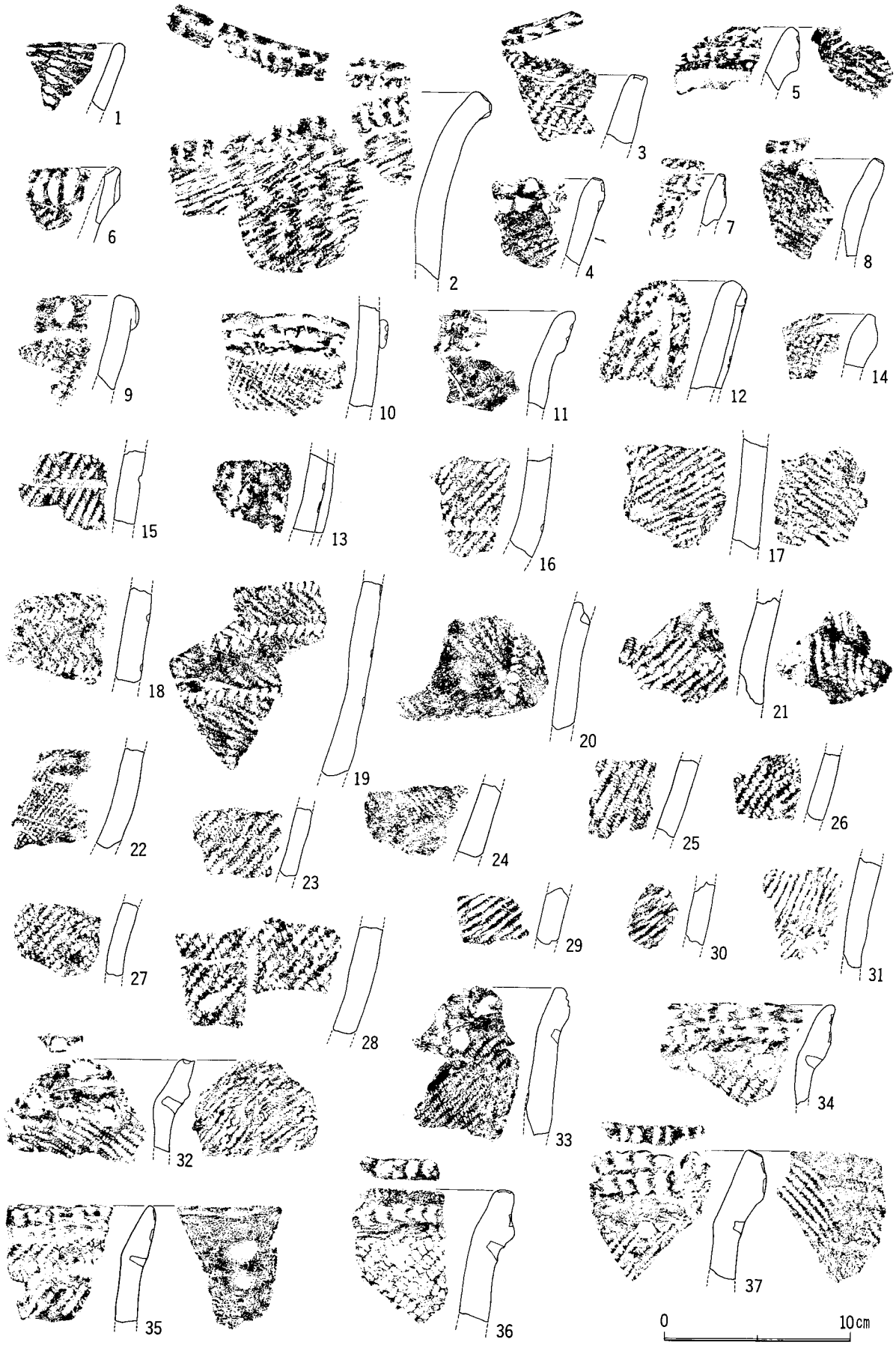
2は，大型の山形突起を有する。口唇部断面形は角形で，口唇上にはRの撚糸を網状に編んだものが押圧されている。

口縁部は山形を呈する突起を有した波状口縁で外反する。

器面には，半截竹管の内面を斜に押し引きした連続刺突文が地文の縄文上に横位に数十段施文する。

地文は，LR斜行縄文，内面はていねいなナデ成形がなされている。

3は，山形の突起を有した波状口縁で，若干外反する。口唇断面形は角形を呈する。口唇上には半截竹管の刺突が施される。



第 11 図　発掘区出土土器拓影図

主な文様としては口縁に平行して地文の縄文上に半截竹管の内面を引いた二本一単位の沈線文が二段めぐる。

地文は，LR 斜行縄文，内面はていねいなナデ成形が施される。

4 は，平縁で若干外反する。口唇断面形は，角形を呈し肥厚する。口唇上には半截竹管による刺突文が施文される。

肥厚部には，半截竹管を連続的に押し引きした連続刺突文がめぐる。

地文は，LR 斜行縄文，内面はナデ整形を施す。

5 は，平縁で若干外反する。口唇上は丸味を帯びるよう整形され，口唇上には LR 斜行縄文が施文される。肥厚帯を有し肥厚帯上には半截竹管の連続刺突文が二段めぐる。
内面には，LR 斜行縄文が施文される。

6 は，平縁でやや外反する。口唇上は丸味を帯びるよう整形される。肥厚帯を有し肥厚帯上には幅広の半截竹管を連続的に押し引きした連続刺突文が一段施文される。

7 は，平縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口唇上には半截竹管の内面を押し引きした連続刺突文が施文される。口縁には肥厚帯を有し，肥厚帯上には半截竹管の連続刺突文が二段施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

8 は，平縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。口唇上には半截竹管の連続刺突文が施文される。肥厚帯はなく，地文は RL 斜行縄文である。

内面はていねいにナデ整形が施され，一部に炭化物が付着している。

9 は，平縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。口縁と平行して幅広の粘土紐が貼付され，貼付帯上には撚糸の端部を用いた刺突文が施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

10 は，粘土紐が貼付され貼付帯を構成する。貼付帯上には半截竹管の連続刺突文が一段施文される。地文は，結節羽状縄文である。

11 は，山形突起を有した波状口縁で，若干外反する。口唇は，丸味を帯びるよう整形され，肥厚する。肥厚帯上には，棒状工具の先端部を連続して押し引きした連続刺突文が二段めぐらされる。

12 は，山形の突起を有する波状口縁で，若干外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，突起部の馬蹄形を呈する粘土紐の貼付文上には半截竹管先端を突き刺したような刺突文が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

13 は，粘土紐が縦位に貼付され，貼付文上には半截竹管の刺突文が施文される。器面には半截竹管内面を斜めに押し引きした連続刺突文が三段施文される。

14 は，山形突起を有した波状口縁で，やや外反する。口縁に平行して肥厚する。地文は，LR 斜行縄文である。

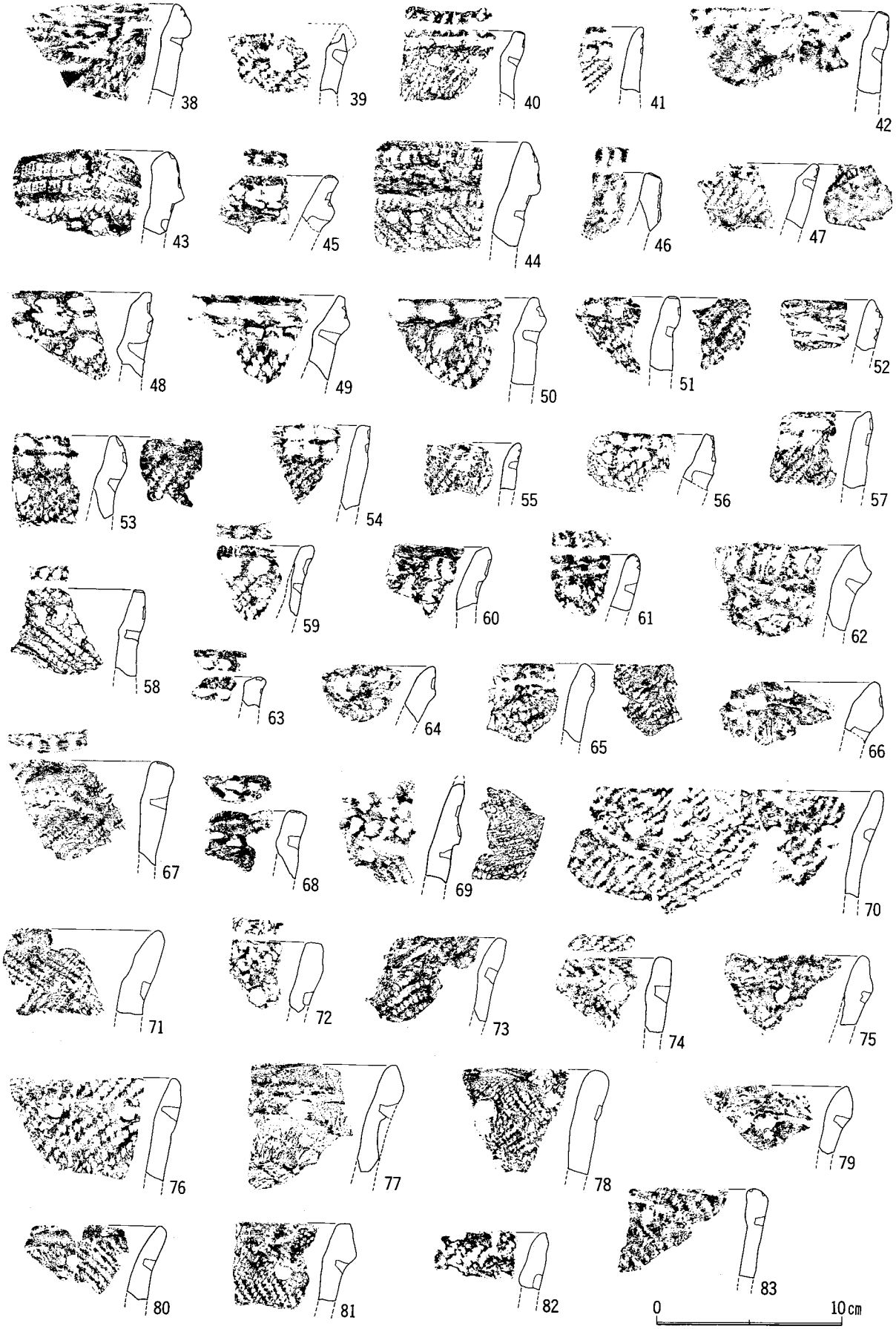
16，18～20 は L の絡条体圧痕文の施文された土器で，16 には一段，18 は二段，19 は三段の絡条体圧痕文が横位に施文される。20 は，L の絡条体圧痕文が縦位に一段みられ，円形刺突文がある。

地文は，LR 斜行縄文（16），RL 斜行縄文（20），結節羽状縄文（18・19）である。

17，21 は地文が LR 斜行縄文の胴部破片である。内面にも LR 斜行縄文を施文している。

22～31 は胴部の土器破片である。地文は，LR 斜行縄文（22，23，25～31），RL 斜行縄文（24，28）が施文される。内面は，ていねいにナデ整形がなされている。

色調は，にぶい赤褐色（9，13，15，22，23，25～27，30，31），赤褐色（2，3，29），にぶい橙



第12図　発掘区出土土器拓影図

色（7，14，17），橙色（8），にぶい黄橙色（5，6，28），にぶい褐色（11），灰褐色（4，10，12，18～21），黄灰色（16），灰黄褐色（24）を呈する。

胎土は，火山灰（11，15，16，18，21，22，30），石英・火山灰（31），砂・石英（2，9，12），砂（4，6，13，25～27），石英（7，8，10，14，24，29），小石（23，28），小石・石英（3，5，17，19，20）を含む。焼成は非常に良好で，堅く焼きしまっている。

B類土器（第11図32～第13図94）

口縁部に太い円形刺突文列が施文された土器を一括した。いわゆる「北筒式土器」「トコロ6類土器」と称された土器群の特徴を有する。

32は平縁で，やや外反する。口唇断面は角形を呈し，口唇上には刺突文が連続してめぐらされる。口縁は肥厚し，肥厚帯上には幅広のへら状工具先端を押し引きした連続刺突文が一段施文される。

肥厚帯直下には径8mmほどの貫通していない円形刺突文が1～2cmおきに施文される。

地文はRL斜行縄文で，口縁部内面には結節羽状縄文が施文される。

33は平縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。口縁部は肥厚し肥厚帯上には半截竹管の内面を斜めにして連続して押し引きした連続刺突文が一段施文される。肥厚帯直下には径6・7mmの貫通していない円形刺突文が施文される。

地文はLR斜行縄文である。

34は，平縁でやや外反する。口唇断面は三角形を呈する。口縁には肥厚帯を持ち肥厚帯上にはへら状工具の先端部を斜めにし連続的に押し引きした連続刺突文が二段めぐる。肥厚帯直下には径8mm程の貫通していない円形刺突文が2・3cm間隔でめぐらされる。

地文は，LR斜行縄文である。

35は，平縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口縁には肥厚帯がある。肥厚帯上には半截竹管の内面を斜めに連続して押し引きした連続刺突文が二段施文される。肥厚帯直下には径6mm程度の円形刺突文が3cm間隔で施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

36は，平縁でやや外反する。口唇断面は角形を呈する口唇上は半截竹管による連続刺突文が一段施文されている。口縁には肥厚帯を有し，肥厚帯上には馬蹄形を呈する半截竹管を斜めに連続して押した連続刺突文が一段施文される。

地文は，結節羽状縄文である。

37は，平縁でやや外反する。口唇断面形は角形を呈し，口唇上にへら状工具による連続刺突文が施文される。口縁部には肥厚帯を有し，へら状工具をななめにし連続して押し引きした連続刺突文が二段施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

38は，平縁でやや外反する。口唇断面形は三角形を呈する。口縁は若干肥厚し肥厚帯上には半截竹管に連続刺突文が二段施文される。肥厚帯直下には径4mm程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

39は，平縁でやや外反する。口唇部は欠損しており，径8mm程の円形刺突文が施文される。地文は，LR斜行縄文である。

40は，平縁でやや外反する。口唇断面形は角形を呈し，口唇上にLR縄線を押圧している。口縁に平行して半截竹管を縦に近く立て連続して押し引きした連続刺突文が一段施文される。連続刺突文の

直下には，径 5 mm 程の円形刺突文が 2 cm 間隔でめぐる。

地文は，LR 斜行縄文である。

41 は，平縁でやや外反する。口唇断面形は角形を呈する，口縁には半截竹管の連続刺突文が一段施文されその直下に径 5・6 mm の円形刺突文が施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

42 は，平縁でやや外反する。口唇上は丸味を帯びるよう整形される。口唇上には先の尖った棒状工具による連続刺突文が施文される。口縁部は若干肥厚し，この上にへら状工具を用い斜目に連続して押し引きした連続刺突文が一段施文される。肥厚帯直下には，径 8 mm 程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

43 は，小さな山形突起を有する波状口縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。口縁部は肥厚し肥厚帯上にはへら状工具を斜めに連続して押し引きした連続刺突文が二段施文される。肥厚帯直下には径 6・7 mm の円形刺突文が 2・3 cm 間隔で施文される。

地文は，RL 斜行縄文である。

44 は，小さな山形を呈する突起を有した波状口縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口縁は肥厚し肥厚帯上にへら状工具の先端を斜めに連続して押し引きした連続刺突文が二段施文される。肥厚帯直下に径 6 mm 程の円形刺突文が 3・4 cm 間隔で施文される。へら状工具による連続刺突文は，肥厚帯直下の部位に一段，さらに円形刺突文の間に縦位にも施文される。

地文は，RL 斜行縄文である。

45 は，平縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口唇上には半截竹管の連続刺突文が施文される。口縁部は肥厚し，肥厚帯上には棒状工具の先端を斜めに連続して押し引きした連続刺突文が一段施文される。肥厚帯直下には径 6 mm 程度の円形刺突文がある。

46 は，平縁でやや外反する。口唇断面形は角形を呈する。口唇上にはへら状工具の先端を連続して押し引きした連続刺突文が施文される。口縁部には肥厚帯があり，肥厚帯上にへら状工具の先端部を斜めに連続して押し引きした連続刺突文が三段ある。

47 は，小突起があり波状口縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。口縁には半截竹管の連続刺突文が一段施文されその直下に径 5 mm 程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

48 は，平縁で若干外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形される。口縁部には半截竹管の内面を斜めに深く連続的に押し引きした連続刺突文が二段施文される。連続刺突文直下には径 10 mm 程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

49 は，平縁で若干外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口縁は肥厚し肥厚帯上には半截竹管による連続刺突文が施文される。肥厚帯直下には径 8・9 mm の円形刺突文が 3 cm 間隔に施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

50 は，平縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。口縁は肥厚し肥厚帯上に半截竹管を斜めに深く連続して押し引きした連続刺突文が一段施文される。肥厚帯直下には径 7 mm 程の円形刺突文が 2・3 cm 間隔で施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

51 は，平縁でやや外反する。口唇部断面は角形を呈する。口唇上には半截竹管による連続刺突文が

施文される。半截竹管の連続刺突文直下には径5・6 mmの円形刺突文が施文される。

52は，平縁でやや外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形され，口縁には半截竹管をねかせて間隔をあけ連続して押し引きした連続刺突文が一段施文される。

53は，平縁でやや外反する。口唇部断面形三角形状を呈し，口唇上に半截竹管文を施文する。口縁に平行して半截竹管の連続刺突文が一段施文され，その下位に径8 mm程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR斜行縄文で，内面にもLR斜行縄文が施文されている。

54は，平縁でやや外反する。口唇断面形は角形を呈する。口縁部に平行して半截竹管による連続刺突文が二段施文される。その直下に径6 mm程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

55は，平縁でやや外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形され，口縁に平行して半截竹管の連続刺突文が一段施文される。その下位に径5 mm程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

56は，平縁でやや外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形され，口縁部にはこれと平行するよう丸棒状工具先端をやや立てて連続的に押し引きした連続刺突文が二段施文される。この直下に径9 mm程の太い円形刺突文が施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

57は，平縁でやや外反する。口唇部断面形は角形を呈する。口縁部には口縁と平行してへら状工具の先端を斜めに連続的に押し引きした連続刺突文が二段施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

58は，平縁で若干外反する。口唇部断面形は角形を呈する。口唇上にはへらによる連続した刻み目が施文される。口縁に平行してへら状工具による連続的に押し引きした連続刺突文が一段施文される。この下位に径6 mm程の円形刺突文が施文される。

地文は，RL斜行縄文である。

59は，平縁で若干外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形される。口縁には口縁と平行してへら状工具による連続刺突文が一段施文される。この下位には径6 mm程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR斜行縄文である

60は，平縁でやや外反する。口唇断面形は三角形を呈する。口縁には大型の半截竹管による連続刺突文が二段施文される。

61は，平縁で若干外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形され，口唇上には半截竹管による刺突文と同種の工具を用いた連続刺突文が施文される。口縁には口縁と平行して半截竹管の連続刺突文が一段施文され，これの直下に径6 mm程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

62は，平縁で若干外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形され，口縁は肥厚し肥厚帯上に幅広の半截竹管を用いた連続刺突文が一段施文される。肥厚帯直下に径6・7 mmの円形刺突文が2・3 cm間隔で施文される。

地文は，RL斜行縄文である。

63は，平縁で若干外反する。口唇部断面は角形を呈する。口唇上には細い竹管を用いた竹管文が施文される。口縁部には口縁に平行して竹管を斜めに連続して押し引きした連続刺突文が施文される。

地文は，LR斜行縄文である。

64は，平縁で口縁は若干外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形される。口縁部には口縁と平行

してへら状工具による連続刺突文が一段施文される。

65 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形され，口縁部には口縁と平行して半截竹管文が一段めぐらされる。

地文は，LR 斜行縄文である。

66 は，小さな山形突起をもつ波状口縁でやや外反している。口唇部は丸味を帯びるよう整形される。口縁は肥厚しており肥厚帯上に半截竹管による連続刺突文が二段施文される。

67 は，平縁で口縁はやや外反する。口唇部断面形は角形を呈する。口唇上にはへら状工具による連続刺突文が施文される。口縁部には径 5 mm 程の円形刺突文が施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

68 は，平縁で口縁は若干外反する。口唇断面形は角形を呈する。口唇上には太い半截竹管の連続刺突文が施文される。口縁に径 6 mm 程の円形刺突文が施文される。

69 は，口唇部分を欠損している。口縁に肥厚帯を有し，肥厚帯上には半截竹管による連続刺突文が二段施文される。肥厚帯直下に径 7 mm 程の円形刺突文が施文される。

地文は，RL 斜行縄文である。

70 は，平縁で口縁部は若干外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形され，口縁部には肥厚帯があり肥厚帯直下に径 6〜8 mm の円形刺突文が 2〜3 cm 間隔で施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

71 は，平縁で口縁がやや外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形され，口縁部には径 6 mm 程度の円形刺突文が施文される。

地文は，RL 斜行縄文である。

72 は，平縁で口縁部は若干外反する。口唇部断面形は角形を呈し，口唇上には LR 斜行縄文が施文される。口縁部に径 5 mm 程度の円形刺突文が施文される。

地文は，LR 斜行縄文である。

73 は，平縁で口縁は若干外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形される。口縁部には径 5 mm 程の円形刺突文が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

74 は，平縁で口縁はやや外反する。口唇部断面形は角形を呈し，口唇上に LR 斜行縄文が施文される。口縁部には径 8 mm 程度の円形刺突文が施文される。

75 は，平縁で口縁はやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口縁部に径 6 mm 程度の円形刺突文が施文される。

76 は，平縁で口縁はやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口縁部には径 6 mm 程度の円形刺突文が 3 cm 間隔で施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

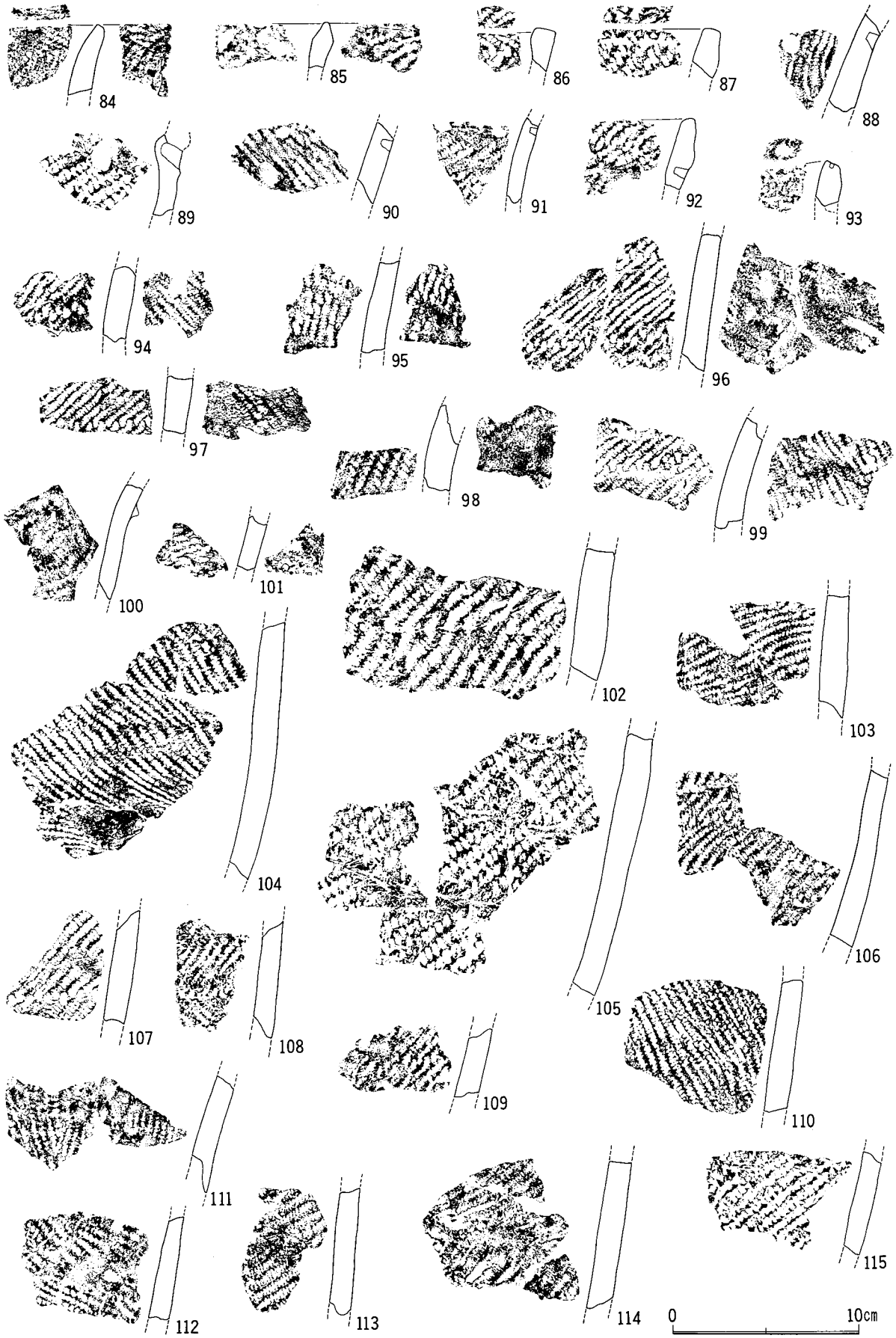
77 は，平縁で口縁はやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口縁部は肥厚する。肥厚帯直下に径 7 mm 程度の円形刺突文が施文される。

78 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部は丸味を帯びるよう整形される。口縁部に径 8 mm 程の円形刺突文が施文される。地文は，RL 斜行縄文である。

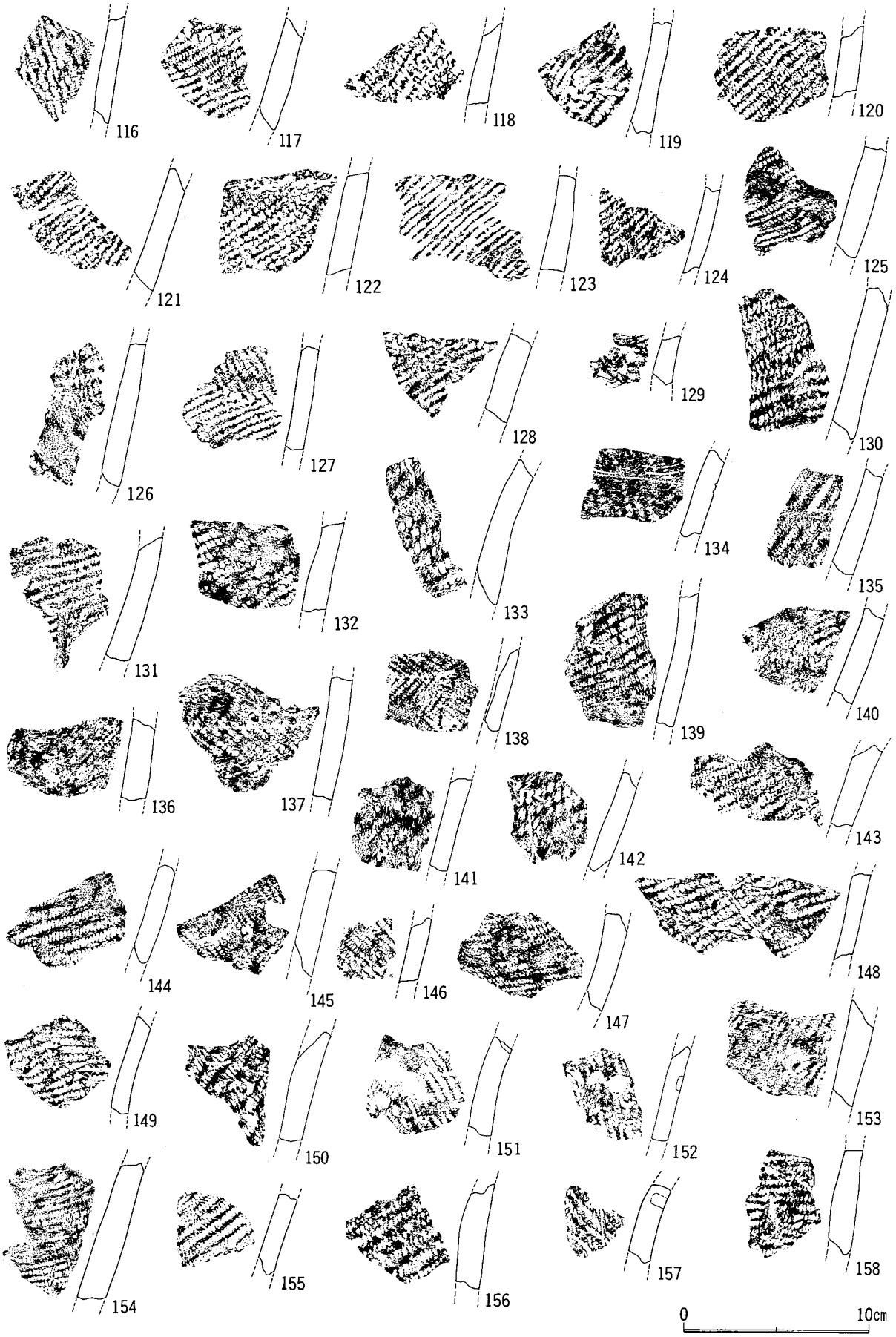
79 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部は丸味を持つよう整形され，口縁部は平縁でやや外反し，径 6 mm 程の円形刺突文が施文される。

80 は，平縁で口縁部はやや外反し，口唇部は丸味を持つよう整形される。口縁部に径 6 mm 程の円形刺突文が施文される。地文は，L 斜行縄文である。

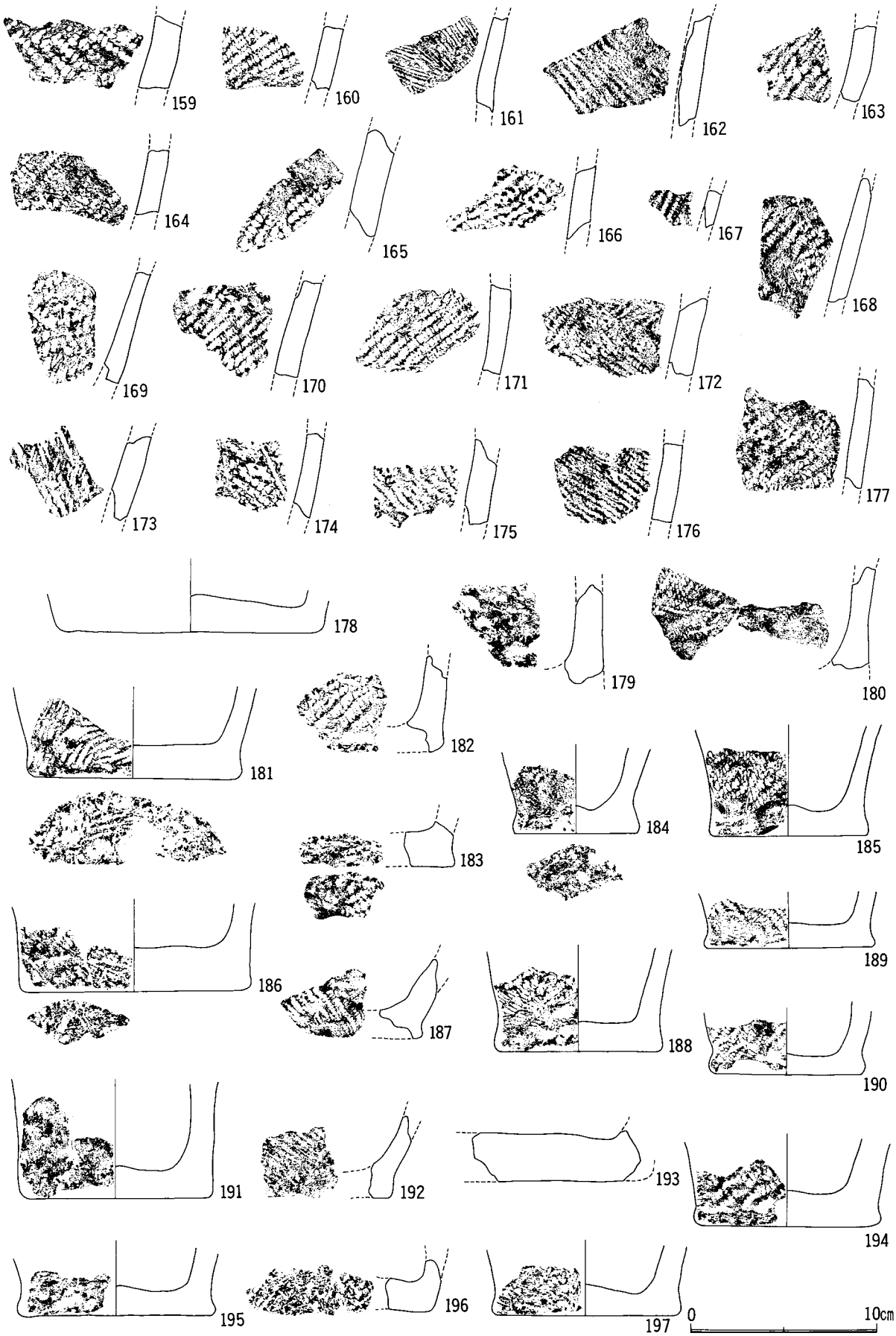
81 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部は丸味を持つよう整形される。口縁部は肥厚帯を有し，



第 13 図　発掘区出土土器拓影図



第 14 図　発掘区出土土器拓影図



第 15 図　発掘区出土土器拓影図

肥厚帯直下に径 6 mm 程度の円形刺突文が施文される。地文は，RL 斜行縄文である。

82 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部は丸味を持つよう整形され，口縁部に径 6 mm 程の円形刺突文が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

83 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部は丸味を持つよう整形され，口縁部に径 6 mm 程の円形刺突文が施文される。地文は，RL 斜行縄文である。

84 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部断面は角形を呈し，口唇上に RL 斜行縄文が施文される。地文は，結節羽状縄文である。口縁部内面にも結節羽状縄文が施文される。

85 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部は丸味を持つよう整形される。地文は，LR 斜行縄文である。口縁部内面にも LR 斜行縄文が施文される。

86 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部断面形は角形を呈し，口唇上には LR 斜行縄文が施文される。地文は，結節羽状縄文である。

87 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇部は丸味を持つよう整形され，口唇上には LR 斜行縄文が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

88～91，94 は，口縁を欠損している。径 8•9 mm 程の円形刺突文が施文される。地文は LR 斜行縄文（88，89，91），RL 斜行縄文（90），結節羽状縄文（94）である。口縁内面に RL 斜行縄文を施文する例（94）も存在する。

92 は，平縁で口縁はやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口縁は肥厚する。肥厚帯直下に径 9 mm 程の大型の円形刺突文が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

93 は，山形小突起を有した波状口縁で口縁はやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口唇上には半截竹管の刺突文が施文される。口縁部に径 6 mm 程の円形刺突文が施文される。

色調は，にぶい橙色(32，80，82)，灰褐色(33，48，51，57)，明褐灰色(34，36)，にぶい褐色(35，79)，灰黄褐色（37，38，41，45，50，54，56，58，63，66，74，75，83，85，88，92，93)，にぶい黄橙色(39，40，42，49，52，53，62，64，68～73，78，91，94)，黒褐色(43，44，47)，褐色(55)，淡黄色（66)，黒色（84，90)，灰色（86)，黄灰色（87)，褐灰色（59，61，65，76，77，89)，灰黄色（60，81）等を呈する。

胎土は，特徴的なものをあげると，小石(32，43，49，52，59，60，67，78，79，81，90，91，94)，石英（33，37，45，55，66，82)，火山灰（34，38，39，41，42，46～48，50，51，54，56～58，61，63～65，68，69，71～75，77，83～86，89，92，93)，砂粒（70，88)，火山灰・石英（35，36，76)，小石・火山灰（40，62)，小石・石英（44，53，80)，砂・火山灰（87）等が含まれる。

第II群土器胴部・底部（第 13 図 95～第 15 図 197）

95～177 は，基本的に地文の縄文のみみられる胴部破片である。

地文に LR 斜行縄文，内面にも LR 斜行縄文を施文する（95，98)。

地文に LR 結節斜行縄文，内面にも同種の縄文を施文する（99)。

地文に LR 結節斜行縄文，内面には LR 斜行縄文を施文する（96，97)。

地文に RL 斜行縄文，内面にも同種の縄文を施文する（101)。

文様として，粘土塊を貼付した(100)，半截竹管による沈線文(134)，円形刺突文が施文される(151，152，157）等がある。

地文は，LR 斜行縄文が大半を占める(100，102，103，105～107，109，113～115，117～126，128～133，135，136，139～145，147～150，153～156，158，160163～171，177)，RL 斜行縄文(110～112，116，

134，146，151，174～176)，R斜行縄文(157，161，162，173)，結節羽状縄文(108，127，137，138，152，159，172）である。

内面の整形は，全てていねいななで整形が施されている。

色調は，にぶい橙色(120，121，124，126，127，153，165)，明黄褐色(117，135，143，154)，浅黄橙色(125，130，176)，黄橙色(136，138，139，142)，橙色(128，137，140，146，157，158，161～163，172，173，175)，褐灰色(149)，にぶい黄褐色(129，131～134)，にぶい黄橙色(95，116，118，122，141，145，147，148，151，152，159，160，168～171，174，177)，にぶい赤褐色（123，155)，にぶい褐色（96，97，100，104，105，109，112，167)，灰褐色（98，106，164)，褐灰色（115)，灰黄褐色（99，101，103，108，113，114，119，144，166)，灰黄色（102，111)，浅黄色（150，156)，黒褐色（110)，暗灰黄色（107）を呈する。

胎土は，火山灰（95～98，100，101，109，115，118，124，125，127，137，140～142，150，159，160，164，165，167，171，176)，小石（99，106，108，110，111，126，143，144，152，158，162，172，173，175，177)，砂粒(103，107，120，122，123，129，130，133，139，146，149，151，156，161，163，169)，石英（121，132，136，138，145，155，166)，小石・火山灰（104，105，114，117，170)，小石・砂粒（102，174)，砂粒・石英（112，128，134，147，148，153)，火山灰・石英（113，119，135，154，157，168）を含む。

178～197は第II群土器に属する底部である。

底面が広く大型で，胴部は直立に近い，あるいはやや外反気味となる。

地文はLR斜行縄文(181，182，184，～186，188，190，194，196，197)，RL斜行縄文(187，189，192)，LR結束斜行縄文（180)，底面にLR斜行縄文を施文する例（181，183）もある。

色調は，明赤褐色(178)，橙色(179～182，184，186，192，195～197)，にぶい黄橙色(183，187)，浅黄橙色（185，194)，明黄褐色（191)，にぶい褐色（193）を呈する。

胎土には，小石（178，186，188)，火山灰（179，187)，砂粒（181，192，196)，石英（183，194)，火山灰・砂粒（184，191)，火山灰・小石（182，185)，火山灰・石英（180)，小石・石英（190，195，197)，砂粒・石英（193）が含まれる。

第III群土器（第16図198～215）（図版27）

縄文時代後期に属する土器群を一括した。厚手の粗雑な作りで器形がキャリパー形に近い器形をなすものと，中葉に属し薄手で精巧な作りの磨消し縄文を特徴とする二種の土器が存在している。

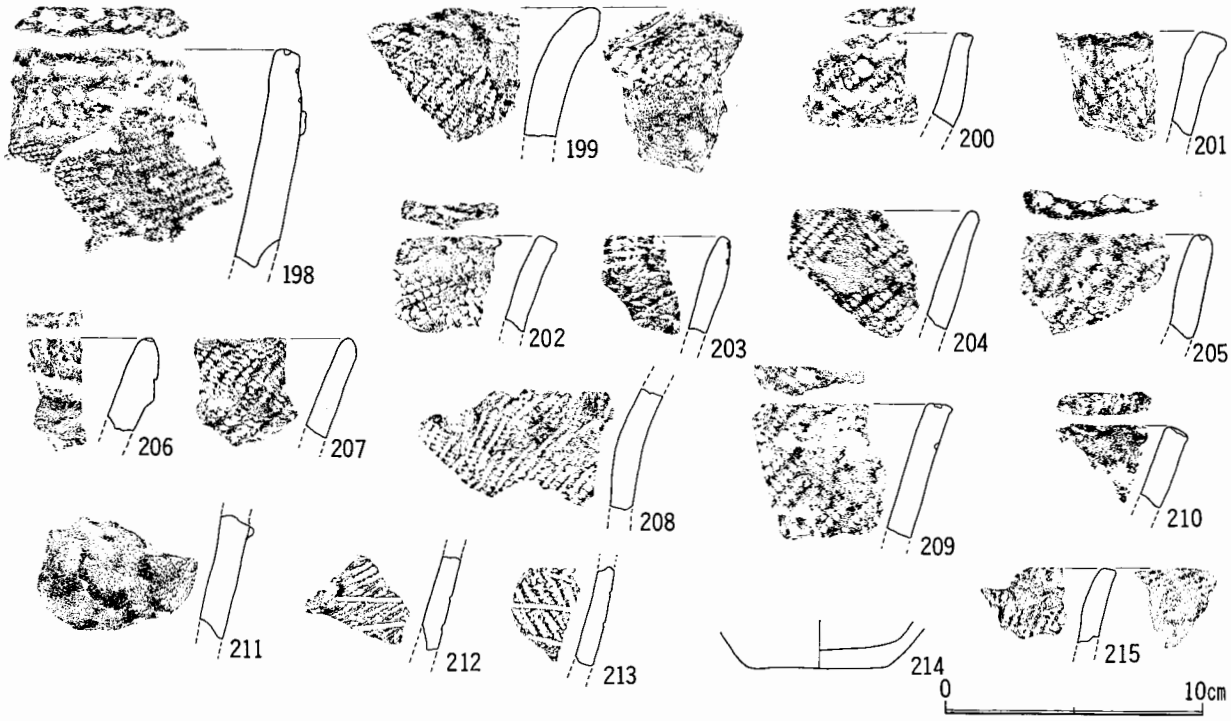
前者をA類土器，後者をB類土器と細分した。

A類土器（198～211）

198は，平縁で口縁は直立する。口唇断面形は角形を呈し，口唇上には棒状工具先端の連続刺突文が施文される。口縁部に棒状工具先端を押し引きした連続刺突文が二段めぐる。さらにこの直下に幅10mm程の粘土紐を貼付した貼付帯が平行してある。地文は，RL斜行縄文である。

199は，山形の突起を有した波状口縁で口縁部は外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。地文は，結節羽状縄文が施文される。

200は，波状口縁で口縁部は外反する。口唇断面形は角形を呈する。口唇上には棒状工具先端を刺突した刺突列が施文される。地文は，LR斜行縄文である。



第 16 図　発掘区出土土器拓影図

201 は，平縁で口縁部は外反する。口唇断面形は角形を呈する。地文は LR 斜行縄文である。

202 は，平縁で口縁部は外反する。口唇断面形は角形を呈し，口唇上には LR 斜行縄文が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

203 は，平縁で口縁部は比較的大きく外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口縁部には，半截竹管による連続刺突文が施文される。地文は，RL 斜行縄文である。

204 は，平縁で口縁部は若干外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。地文は LR 斜行縄文である。

205 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口唇上には棒状工具先端による刺突列が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

206 は，波状口縁でやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形され，口唇上には細かな刻み目が施文される。口縁に肥厚帯が付属している。

207 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇は丸味を帯びるよう整形される。地文は LR 斜行縄文である。

209 は，平縁で口縁部はやや外反する。口唇断面形は角形を呈する。口縁部に半截竹管による連続刺突文が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

210 は，山形突起を有する波状口縁で，口縁部はやや外反する。口唇断面形は角形を呈する。口唇上には半截竹管を刺突した馬蹄形の刺突列が施文される。

208，211 は，胴部で LR 斜行縄文が地文として施文されている。

色調は，浅黄橙色（198），灰オリーブ色（199），灰色（200），黄灰色（201，205），明黄褐色（202，204，207），褐灰色（203，209，211），にぶい黄橙色（206），橙色（208，210）を呈する。

胎土中には，火山灰（198，201，203，206，209），砂粒（200），砂粒と石英（199，205，207），小石（202），石英（204，208，211），火山灰と石英（210）を含む。

B類土器（212～215）

本類に属する土器は少ない。比較的薄手で，堅く緻密な土器である。

212，213 は平行沈線文によって区画された縄文帯を有する土器である。地文は LR 斜行縄文(212)，RL 斜行縄文（213）である。内面はていねいなへらによる研磨が施されている。

214 は，底部で底面のみ残っている。平底で器面は研磨により光沢を帯びる。

215 は，山形突起を有した波状口縁で口縁部は大きく外反する。口唇断面形は，角形を呈し口唇上には刻み目が施文される。地文は，LR 斜行縄文である。

色調は，橙色（212，213，215），にぶい黄橙色（214）を呈する。

胎土には，砂粒（212，215），砂粒と石英（213，214）を含む。

第2節　石器（第17～19図）（図版29～32）

本遺跡では，発掘区から50点余の石器が検出された。出土土器は，縄文時代早期の貝殻文土器，縄文時代中期の「天神山式土器」「北筒式土器」，縄文時代後期の「手稲砂山式土器」「手稲式土器」が出土している。しかし縄文時代中期をのぞいて他はほとんど無視してもよいほどの微量・少量の検出である。

今回得られた石器資料は，表土層（耕作土）からの検出であり，層位的な属性は全く無い状況にある。しかし，検出された土器群の主体は「北筒式土器」の範疇に含まれる土器であり，おおむね石器群の伴出も「北筒式土器」と限定してもよいであろう。

石器の器種は，無茎石鏃，銛先，石錐，両面加工のナイフ状石器，掻器，削器，石核，磨製石斧，砥石，擦石，敲石で縄文時代全般の石器組成は一応そろっていると考えられる。

以下，器種別に概要を説明していく。

石鏃（1）

黒曜石の幅広剝片を素材としたもので，入念な両面加工が施される無茎石鏃である。尖頭部は二等辺三角形に整形され，基底部は両端が突出し中央部が若干えぐれた器形を呈する。

全長28 mm，最大幅19 mm，厚さ4 mm，重量1.1 gを測る。

銛先（2～4）

2は，黒曜石幅広剝片を素材とし，太い柄部を作り出したもので入念な両面加工が施される。尖頭部は二等辺三角形を呈し下端部は幅広い，柄は中心より若干ずれる。柄部の基底部は丸味を帯びる。

全長50 mm，最大幅27 mm，厚さ6 mm，重量5.5 gを測る。

3は黒曜石幅広剝片を素材とし，太い柄部を作り出したもので入念な両面加工が施される。尖頭部を大きく欠損している。尖頭部の下端部は広がりが少なく徐々に柄部へ連なる。柄部の基底部は平坦に整形される。

現存部全長39 mm，最大幅20 mm，厚さ8 mm，重量4.9 gを測る。

4は，大型の黒曜石幅広剝片を素材とし入念な両面加工を施したもので，木の葉状の器形を呈する。2，3のように意図的に太い柄部を作り出してはいない。結果として図下部は柄部状の状況を呈する。

全長68 mm，最大幅38 mm，厚さ14 mm，重量27.2 gを測る。

石錐（5，6）

2点検出した。いずれも黒曜石縦長剝片を素材とし，一端に細かな剝離加工を施し使用部を作り出した石器で素材の剝片の形状を残している。

5は，厚手の縦長剝片を素材とし，原石面を一部に残す。

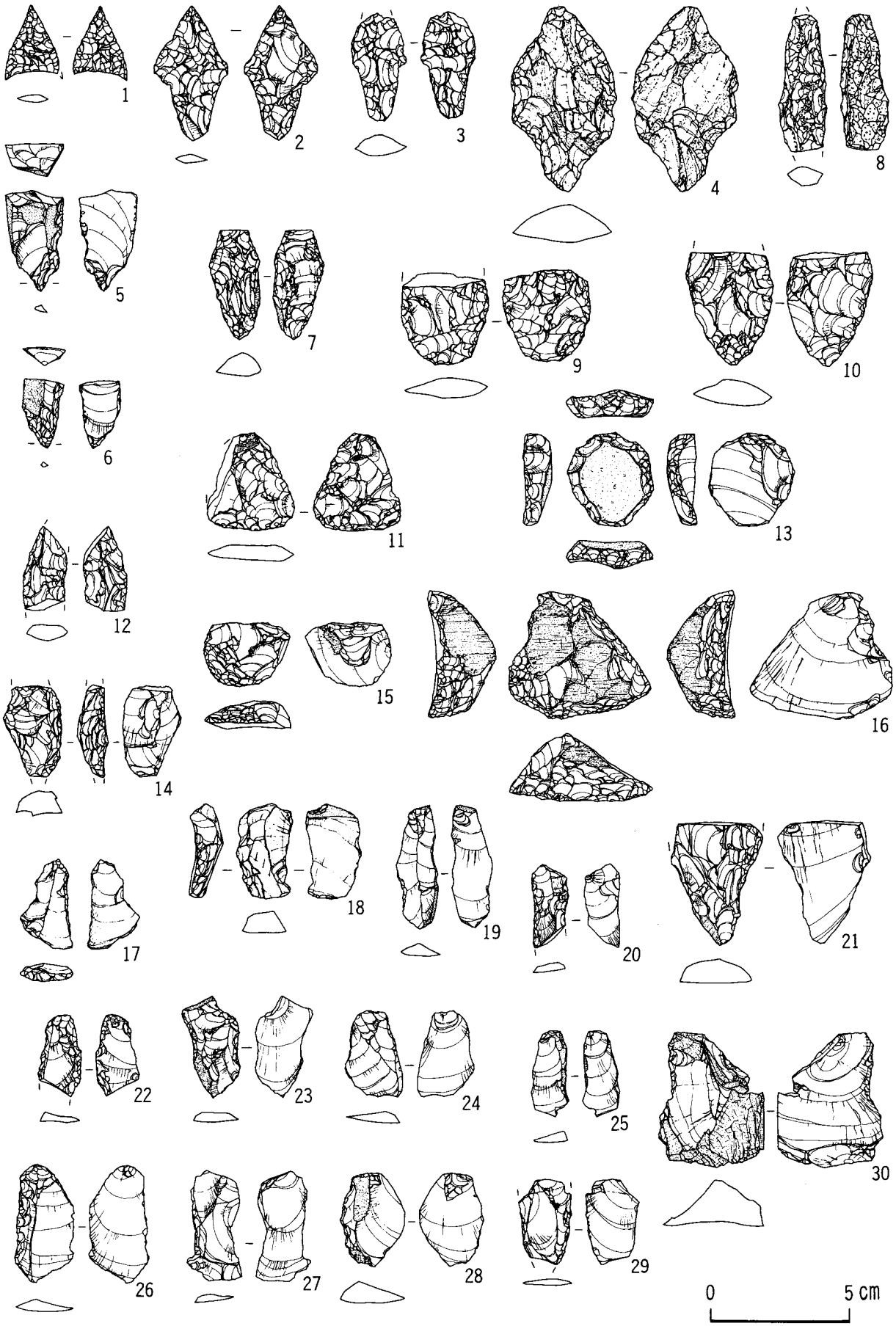
全長37 mm，最大幅21 mm，厚さ12 mm，重量6.9 gを測る。

6は，断面が三角形を呈する縦長剝片を素材とする。原石面を一部に残す。

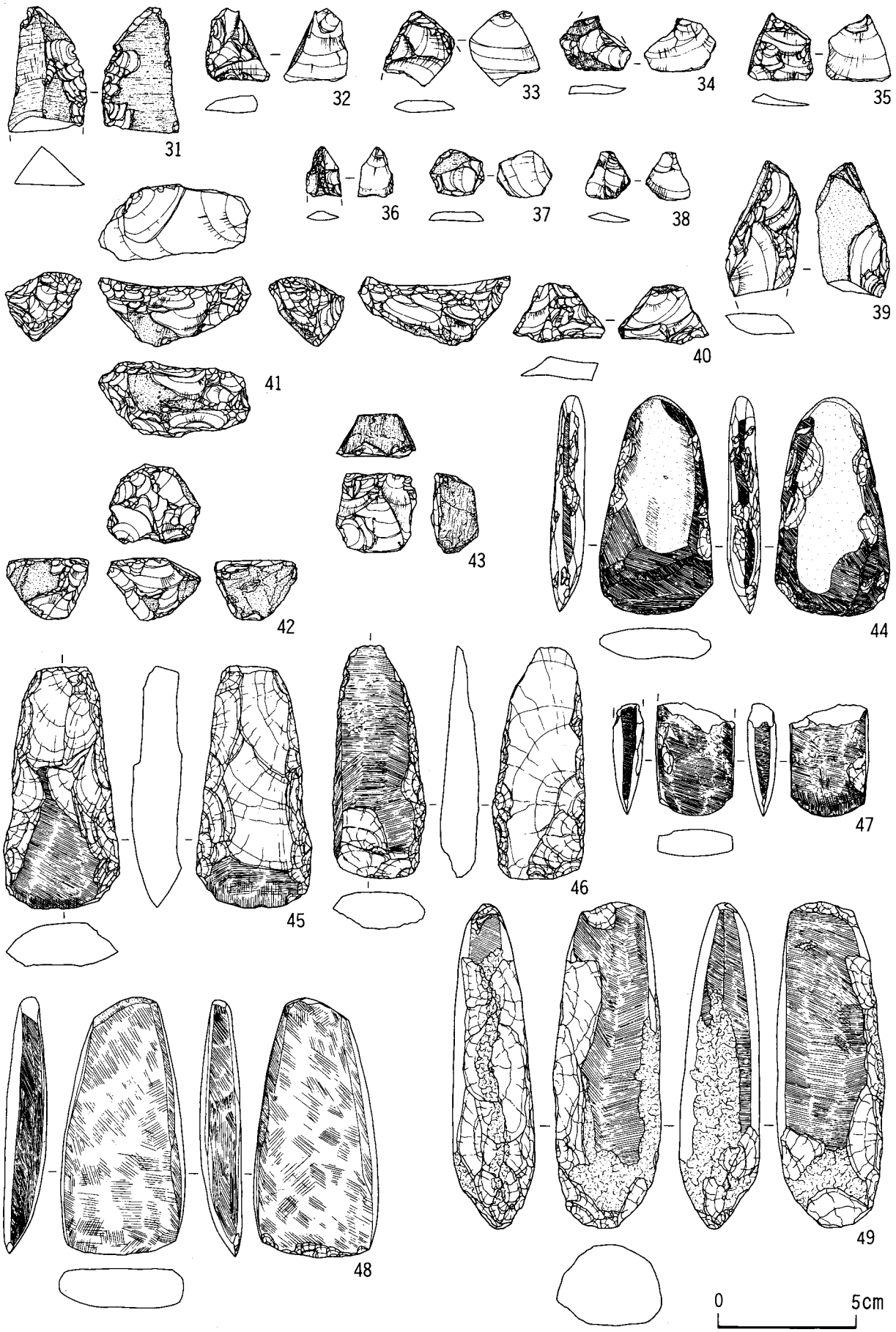
全長25 mm，最大幅15 mm，厚さ7 mm，重量2.1 gを測る。

両面加工のナイフ状石器（7～12）

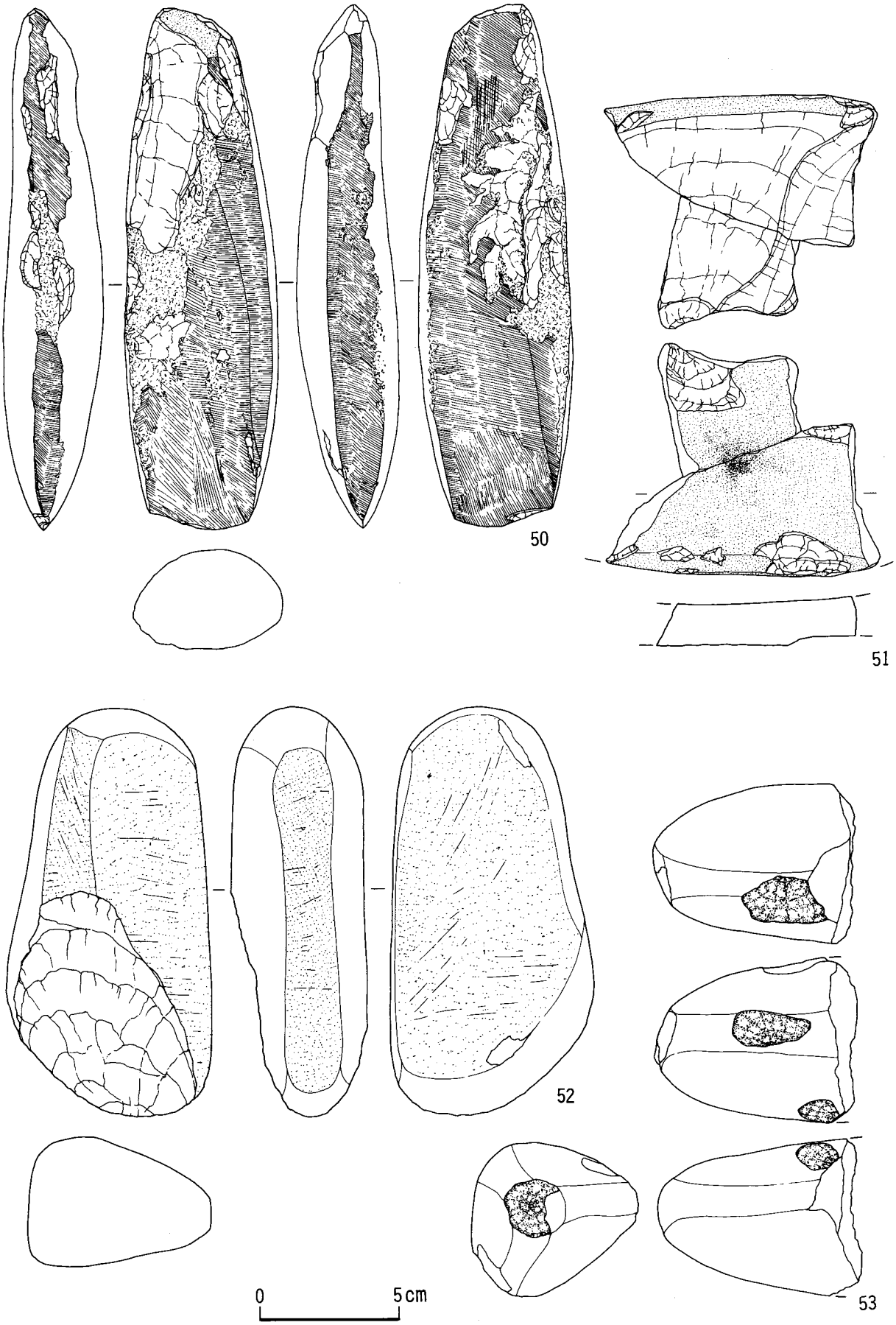
6点検出した。いずれも黒曜石を素材とした石器で入念な両面加工が施されている。



第 17 図　発掘区出土石器実測図



第18図　発掘区出土石器実測図



第19図　発掘区出土石器実測図

7，12 は，細身で断面形が厚い凸レンズ状を呈する，入念な両面加工が施される。

7 は，全長 40 mm，厚さ 18 mm，最大厚 9 mm，重量 6.5 g で，12 は，現存長 31 mm，最大幅 16 mm，最大厚 6 mm，重量 3.5 g を測る。

8 は，気泡の多く入った原石を用いている。断面形は，厚みのある凸レンズ状を呈する。現存長 50 mm，最大幅 18 mm，最大厚 10 mm，重量 8.3 g を測る。

9，10 は，刃部のみ破損品で，比較的幅広い。10 は，刃部の先端が尖っている。9 は，現存長 34 mm，最大幅 34 mm，最大厚 10 mm，重量 10.8 g，10 は，現存長 41 mm，最大幅 31 mm，最大厚 11 mm，重量 12.6 g を測る。

11 は，頂部が狭い台形状を呈する比較的薄手で主な刃部は底辺部分と考えられる。

全長 36 mm，最大幅 22 mm，最大厚 8 mm，重量 8.6 g を測る。

掻器（13～17）

5 点検出した，全て黒曜石を素材としている。

縦長剥片，幅広剥片の一端の辺に背の高い剥離加工を集中して刃部としたものである。

主剥離面は，一切加工を施さないことを基本とする。

13，15，16 は，幅広で厚手の黒曜石剥片を素材とし背の高い刃部を作り出している。いわゆるエンド・スクレーパー，ラウンド・スクレーパーと称される石器である。

13 は，全長 34 mm，最大幅 32 mm，最大厚 10 mm，重量 10.1 g，15 は，全長 24 mm，最大幅 32 mm，最大厚 11 mm，重量 8.1 g，16 は，全長 47 mm，最大幅 52 mm，最大厚 25 mm，重量 39.2 g を測る。

14，17 は，縦長形状の黒曜石剥片を素材とし一方の側縁部，下端部に背の高い刃部を作り出した石器でエンド・スクレーパー，サイド・スクレーパーと称される石器である。

14 は，側縁部に刃部を持つ石器で全長 33 mm，最大幅 22 mm，最大厚 11 mm，重量 5.9 g を測る。

17 は，剥片下端部に刃部があるエンド・スクレーパーで全長 33 mm，最大幅 19 mm，最大厚 7 mm，重量 2.6 g を測る。

削器（18～40）

23 点出土し，全て黒曜石を素材としている。

ほとんどが，縦長剥片・幅広剥片・不定形剥片の一側縁部に使用痕が観察される石器である。

18～20，23～29 は，縦長剥片を素材とし，一側縁部に使用痕と考えられる剥離がなされている。基本的に，主剥離面に剥離加工は施されていない。

全長 31～47 mm，最大幅 13～34 mm，最大厚 3～13 mm，重量 1.7～16.2 g を測るが均一ではない。

31 は側縁部に主剥離面からも加工が施され刃部が作り出された石器である。全長 46 mm，最大幅 28 mm，最大厚 15 mm，重量 15 g を測る。

21，22 は，左右両側縁部に刃部が作り出されている。主剥離面には，加工は施されていない。21 は，全長 45 mm，最大幅 34 mm，最大厚 13 mm，重量 16.2 g，22 は，全長 30 mm，最大幅 16 mm，最大厚 5 mm，重量 2.2 g を測る。

30，32～40 は，幅広剥片・不定形剥片の一部に刃部が作り出された石器で規格性に乏しい。主剥離面側には，全く加工は施されていない。

全長 17～50 mm，最大幅 13～38 mm，最大厚 4～21 mm，重量 0.9～26.7 g を測るが均一ではない。

石核（41～43）

3点検出し，全て黒曜石の礫塊で縦長剥片，幅広剥片を連続的に剥離した痕跡を有したものである。

41は，一見舟型を呈する。打面は礫を半割した主剥離面を使用している。剥離面には原石面が比較的多く残る。幅広剥片を剥離したと考えられるが，不定形な剥離痕が多い。

全長55 mm，最大幅25 mm，最大厚28 mm，重量29.5 gを測る。

42は，打面調整のための剥離加工が施されている。剥離面には幅広剥片を数点剥離した痕跡を有する，原石面も残す。

全長34 mm，最大幅23 mm，最大厚29 mm，重量20.9 gを測る。

43は，黒曜石礫塊に一面に剥離痕がみられるもので，主に縦長剥片を剥離したと考えられる。背面には大きく原石面を残し，打面も原石面からである。

全長34 mm，最大幅23 mm，最大厚29 mm，重量20.9 gを測る。

磨製石斧（44～50）

7点を検出した，すべて敲打整形された後に入念に研磨加工されている。

小型，中型，大型の三つの形態がある。

47は，刃の幅は29 mm，厚さ11 mmで小型である。頭部，胴部を欠失しており，刃部のみ残った状況で検出された。石材は黒色泥岩で，敲打痕がほとんど残らないよう入念な研磨整形がなされている。刃先は丸味を帯び両刃である。重量は20.9 gを測る。

44～46，48，49は，中型の石斧で全長80～119 mm，最大幅34～45 mm，最大厚13～30 mm，重量53.9～223.2 gを測る。49が比較的大きいが他は差が少ない。

45は，刃部のみ研磨され頭部・胴部は整形の剥離痕が大きく残る。刃部は丸味を帯び，両刃である。

44，48は，全面入念な研磨加工が施されている。刃部は平坦で，やや片刃となる。

49は，頭部から胴部にかけて研磨整形されているが刃部となる部分は，敲打痕のみで研磨はなされていない。製作途中の石斧もしくは破損した石斧を再加工している状況こ可能性が強い。

50は，全長189 mm，最大幅55 mm，最大厚36 mm，重量563.1 gを測る大型の石斧である。石材は黒色泥岩で，胴部の一部に整形のための大型の剥離痕と敲打痕を残す他は入念な研磨加工が施されている。

刃部は一部を欠失しているが，やや丸味を帯び両刃である。

砥石（51）

砂岩で，2個に割れていた。研磨痕が大きく面状に観察される石器である。

研いだ方向に直交する断面形は，中央部がくぼむ形状となる。

全長98 mm，最大幅85 mm，最大厚18 mm，重量159.7 gを測る。

擦石（52）

安山岩の自然礫で，棒状で断面形は三角形を呈する。狭い稜線部分が擦面として使用される。擦面の方向は，長軸に対して直交する短軸方向である。一部を欠損している。

本石器の類例は縄文時代早期に特に多く存在する，縄文時代中期に伴う擦石とは形状に差違がある。本遺跡では微量ではあるが縄文時代早期の貝殻文土器が出土している，これに伴った可能性が大きい。

全長148 mm，最大幅74 mm，最大厚49 mm，重量706.2 gを測る。

敲石（53）

安山岩の自然礫の数カ所に，敲打痕が集中して観察されるもので，半分ほどを欠失している。

特に加工を施した痕跡は見あたらない，河原等で採取してきた礫を用いたものであろう。

現存長 73 mm，最大幅 57 mm，最大厚 60 mm，重量 308.2 g を測る。

第6章　まとめ

今回の発掘調査では，遺構は16個のピット，遺物は縄文時代中期の土器・石器が得られた。

遺構は，発掘区の撹乱が著しく良い状態で検出したものではない。沢状の低くなっている部分で掘り込み面は撹乱によって解らなくなっているが，壙底面近くが辛うじて残った状況のものが多い。

遺構

第1・2・15号ピットは，プランが長楕円形で深く溝状を呈する特異な形状のピットである。この種のピットは，谷に沿ってあるいは谷に向かって数個から10数個が10m前後の間隔で並列して配列することでTピット（トラップピット）の総称で呼ばれることが多い。

ピットの形状が狭長の楕円形で深く，溝状を呈すること。分布・配列の状況から鹿等の獣道に沿って設けられた陥穴として設置された可能性が指摘されている遺構である。

本遺跡で発見された第1・2号ピットは，12m程離れ並列し沢状を呈する低地に一列にある。第15号ピットは，第1・2号ピットの配列とは微妙にずれがあり，方向もずれるこのため第1・2号ピットとは別の配列のピットと考えられる。

その他検出されたピットであるが，円形プランを呈し壙底面・壁面ともにしっかりしたピットを除いて楕円形を呈するピット等は性格が不明である。

円形プランの壁・壙底面が堅くしっかりしたものは土壙墓である可能性が強く感じられる。
副葬品としての，土器・石器・剝片・大型の礫が土壙内にほとんど見られなかったが，撹乱が壙底面近くまで及んだピットが多く全く無かったとは断定できない状況にある。

土器

土器は，ほとんど発掘区から検出したもので，耕作による撹乱，その他工事等の撹乱によって層位的属性は不明であった。

時期は，縄文時代早期の貝殻腹縁を連続して押圧した貝殻腹縁文土器が1点得られている。

縄文時代中期後半に位置するであろう半截竹管文を多用し，大型の山形突起が付く「平岸天神山式土器」，口縁部に大型の円形刺突文列をめぐらす「北筒式土器」が主体をなす。

ごく微量であるが，縄文時代後期初頭および中葉に属する土器も得られている。

「天神山式土器」は，半截竹管を多用し大型の山形突起を有するが，貼付帯・貼付文は見られず，比較的新しい時期の土器の可能性が強い。

「北筒式土器」は，口縁に断面が三角形状となる肥厚帯をもち半截竹管の連続刺突文を数段施文し肥厚帯直下に円形刺突文をめぐらす土器，肥厚帯の存在は同様だが半截竹管による連続刺突文が見られないグループ，肥厚帯が無く地文の縄文と口縁部の円形刺突文のみのグループの三グループがある。

道東北での「北筒式土器」は，器形的には底径と口径の差が少ない円筒形であるが，道奥部での「北筒式土器」は底部がやや小型化しいわゆる深鉢型となる傾向が強い。

三グループは，時期的な差ではなく一形式の中のバリエーションであろう。

縄文後期の土器は，初頭に属する土器と中葉の土器の二種がある。

初頭の土器は，半截竹管を使用した沈線文土器で，胎土中に多量の砂を含んだ土器である。
いわゆる「手稲砂山式土器」と称される土器群である。

後期中葉の土器は，ごく微量得られたのみである。沈線で区画された縄文，磨消し部分を特徴とする。

石器

石器は，全て発掘区から検出した。土器と同様で，層位的属性は不明であった。

検出した器種は，無茎石鏃，銛先，石錐，両面加工のナイフ状石器，掻器，削器，石核，磨製石斧，砥石，擦石，敲石である。

擦石は，やや長めの断面が三角形を呈する安山岩自然礫の狭い稜部を擦面としたもので，縄文早期に特徴的な石器である。

石槍，台石・石皿が欠落しているが，縄文時代中期の石器組成を良く表している。

特に縄文中期の「北筒式土器」の石器組成に基本的に一致する。

石鏃が少なく，銛先とした大型の鏃が多い，石匙とするつまみ付きナイフがほとんど無く，両面加工のナイフ状石器，掻器，削器が多く存在する。縦長形状の剥片が多く出土することも特徴である。縦長剥片を生産したと考えられる粗製石核の存在もある。

磨製石斧は，大・中・小の三タイプが検出されている。

剥片石器は，全て黒曜石を素材としており，硬質頁岩・チャートといった他の石材が一切見られない。

石皿・台石といった大型の石器が欠落した石器組成および剥片類の出土状況から，本遺跡は狩猟等の時期のみの比較的短期間に営まれたものであろうと推定される。

第2表　遺構計測値一覧表

ピット番号	挿図番号	図版番号	発掘区	平面形	規模 長径(cm)	規模 短径(cm)	規模 深さ(cm)	長軸方向	遺物 土器片	遺物 黒曜石剥片	備考
1	5	6	05-03	長楕円形	272	85	144	N-132°-E			Tピット
2	6	7	04-03	長楕円形	303	87	145	N-152°-E			Tピット
3	7	8	03-03	楕円形	270	93	33	N-152°-E			
4	8	9	01-03	楕円形	251	81	56	N- 52°-E			
5	7	10	01-02	円形	115	113	30		1	3	
6	7	11	01-04	円形	79	70	29		2	2	
7	8	12	02-02	楕円形	125	77	18	N- 31°-E		6	
8	8	13	03-03	楕円形	67	44	20	N-136°-E			
9	9	14	03-02,03-03	楕円形	68	59	26	N-117°-E	2	1	
10	9	15	03-04	楕円形	165	90	29	N- 65°-E			
11	9	16	04-03	楕円形	71	57	29	N-160°-E		3	
12	9	17	04-03	円形	73	62	20				
13	9	18	05-03	円形	57	52	32		5		
14	10	19	05-04	楕円形	67	55	15	N- 37°-E		5	
15	10	20	02-03	長楕円形	176	55	122	N-121°-E			Tピット
16	10	21	04-09	円形	103	100	23			4	

第3表　T 276 遺跡出土土器一覧表

挿図番号	図版	分類	口唇 断面	口唇 文様	口縁部	突起	形状	文様	地文	内面 文様	内面 整形	炭化物	色調(標準土色帳)	胎土	備考
11-1	22	I	丸		平縁・外反			貝殻復縁文		貝殻条痕文			5YR4/3 にぶい赤褐	火山灰・砂	
2	22	II-A	角	撚糸押圧	波状・外反	山形		半截竹管連続刺突	LR 斜行		ナデ		5YR4/6 赤褐	砂・石英	
3	22	II-A	角	半截竹管刺突	波状・外反	山形		半截竹管沈線	LR 斜行		ナデ		5YR4/6 赤褐	小石・石英	
4	22	II-A	角	半截竹管刺突	平縁・外反		肥厚	半截竹管連続刺突	LR 斜行		ナデ		5YR5/2 灰褐	砂	
5	22	II-A	丸		平縁・外反		肥厚	半截竹管連続刺突2段		LR 斜行	ナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	小石・石英	
6	22	II-A	丸	LR 斜行	平縁・外反		肥厚	幅広半截竹管連続刺突			ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	砂	
7	22	II-A	丸	半截竹管連続刺突	平縁・外反		肥厚	半截竹管連続刺突2段	LR 斜行		ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	石英	
8	22	II-A	丸	半截竹管連続刺突	平縁・外反				RL 斜行		ナデ	内面，口縁	7.5YR7/6 橙	石英	
9	22	II-A	丸		平縁・外反		肥厚	貼付帯・撚糸端部刺突	LR 斜行		ナデ		5YR5/3 にぶい赤褐	砂・石英	
10	22	II-A						貼付帯上に半截竹管連続刺突文	結節羽状縄文		ナデ		5YR5/2 灰褐	石英	
11	22	II-A	丸		波状・外反	山形	肥厚	棒状工具先端連続刺突2段			ナデ		7.5YR6/3 にぶい褐	火山灰	
12	22	II-A	丸		波状・外反	山形		突起上に馬蹄形の貼付文，貼付文上に半截竹管の刺突	LR 斜行		ナデ		7.5YR5/2 灰褐	砂・石英	
13	22	II-A						縦の貼付文上に半截竹管による連続刺突，半截竹管沈線3段			ナデ	内面一部	5YR5/3 にぶい赤褐	砂	
14	22	II-A	丸		波状・外反	山形	肥厚		LR 斜行		ナデ		5YR7/4 にぶい橙	石英	

挿図番号	図版	分類	口唇		口縁部	突起	形状	文様	地文	内面		炭化物	色調(標準土色帳)	胎土	備考
			断面	文様						文様	整形				
15	22	II-A						半截竹管の内面による沈線文1段	LR 斜行		ナデ		5YR4/3 にぶい赤褐	火山灰	
16	22	II-A						L 絡条体圧痕文1段	LR 斜行		ナデ		2.5Y4/1 黄灰	火山灰	
17	22	II-A							LR 斜行	LR 斜行			7.5YR6/4 にぶい橙	小石・石英	
18	22	II-A						L 絡条体圧痕文2段	結節羽状縄文		ナデ		7.5YR4/2 灰褐	火山灰	
19	22	II-A						L 絡条体圧痕文3段	結節羽状縄文		ナデ		7.5YR4/2 灰褐	小石・石英	
20	22	II-A						円形刺突文・L 絡条体圧痕文縁1段	RL 斜行		ナデ		7.5YR4/2 灰褐	小石・石英	
21	22	II-A							LR 斜行	LR 斜行	ナデ		7.5YR6/2 灰褐	火山灰	
22	22	II-A							LR 斜行		ナデ	内面全体	5YR5/2 にぶい赤褐	火山灰	
23	22	II-A							LR 斜行		ナデ		5YR5/2 にぶい赤褐	小石	
24	22	II-A							RL 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	石英	
25	22	II-A							LR 斜行		ナデ		5YR4/4 にぶい赤褐	砂	
26	22	II-A							LR 斜行		ナデ		5YR4/4 にぶい赤褐	砂	
27	22	II-A							LR 斜行		ナデ		5YR4/4 にぶい赤褐	砂	
28	22	II-A							RL 斜行		ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	小石	
29	22	II-A							LR 斜行		ナデ		5YR4/6 赤褐	石英	
30	22	II-A							LR 斜行		ナデ		5YR5/3 にぶい赤褐	火山灰	
31	22	II-A							LR 斜行		ナデ		5YR5/4 にぶい赤褐	石英・火山灰	
32	22	II-B	角	刺突文	平縁・外反		肥厚	幅広ヘラの連続刺突・円形刺突文	RL 斜行	結節羽状縄文			7.5YR7/3 にぶい橙	小石	
33	22	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	半截竹管連続刺突・円形刺突文	LR 斜行				7.5YR4/2 灰褐	石英	
34	22	II-B	三角		平縁・外反		肥厚	ヘラの連続刺突2段・円形刺突文	LR 斜行		ナデ		7.5YR7/2 明褐灰	火山灰	
35	22	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	半截竹管連続刺突2段・円形刺突文	LR 斜行		ナデ		7.5YR5/3 にぶい褐	火山灰・石英	
36	22	II-B	角	半截竹管連続刺突	平縁・外反		肥厚	半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	結節羽状縄文		ナデ		7.5YR7/2 明褐灰	火山灰・石英	
37	22	II-B	角	ヘラ連続刺突	平縁・外反		肥厚	ヘラ連続刺突2段・円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	石英	
12-38	23	II-B	三角		平縁・外反			半截竹管連続刺突2段・円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	火山灰	
39	23	II-B						円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	火山灰	
12-40	23	II-B	角	LR 縄線押圧	平縁・外反			半截竹管連続刺突・円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR5/3 にぶい黄橙	小石・火山灰	
41	23	II-B	角		平縁・外反			半截竹管連続刺突2段	LR 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	火山灰	
42	23	II-B	丸	棒状工具連続刺突	平縁・外反			ヘラ連続刺突1段・円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	火山灰	

挿図番号	図版	分類	口唇 断面	口唇 文様	口縁部	突起	形状	文様	地文	内面 文様	内面 整形	炭化物	色調(標準土色帳)	胎土	備考
43	23	II-B	丸		波状・外反	山形	肥厚	ヘラ連続刺突2段・円形刺突文	RL斜行		ナデ		10YR3/2 黒褐	小石	
44	23	II-B	丸		波状・外反	山形	肥厚	ヘラ連続刺突3段・同縦位1段・円形刺突文	RL斜行		ナデ		10YR3/2 黒褐	小石・石英	
45	23	II-B	丸	半截竹管連続刺突	平縁・外反		肥厚	棒状工具連続刺突2段・円形刺突文			ナデ		10YR6/2 灰黄褐	石英	
46	23	II-B	角	ヘラ連続刺突	平縁・外反		肥厚	ヘラ連続刺突3段			ナデ		10YR4/2 灰黄褐	火山灰	
47	23	II-B	丸		波状・外反			半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		10YR3/2 黒褐	火山灰	
48	23	II-B	丸		平縁・外反			半截竹管連続刺突2段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		10YR5/1 褐灰	火山灰	
49	23	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	小石	
50	23	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	火山灰	
51	23	II-B	角	半截竹管連続刺突	平縁・外反			半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	LR斜行	LR斜行			10YR5/1 褐灰	火山灰	
52	23	II-B	丸		平縁・外反			半截竹管連続刺突2段			ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	小石	
53	23	II-B	三角	半截竹管連続刺突	平縁・外反			半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	LR斜行	LR斜行	ナデ		10YR5/3 にぶい黄橙	小石・石英	
54	23	II-B	角		平縁・外反			半截竹管連続刺突2段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		10YR4/2 灰黄褐	火山灰	
55	23	II-B	丸		平縁・外反			半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		7.5YR4/3 褐	石英	
56	23	II-B	丸		平縁・外反			棒状工具連続刺突2段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	火山灰	
57	23	II-B	角		平縁・外反			ヘラ連続刺突2段	LR斜行		ナデ		7.5YR5/2 灰褐	火山灰	
58	23	II-B	角	ヘラ刻み目	平縁・外反			ヘラ連続刺突1段・円形刺突文	RL斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	火山灰	
59	23	II-B	丸		平縁・外反			ヘラ連続刺突1段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		7.5YR6/1 褐灰	小石	
60	23	II-B	三角		平縁・外反			太い半截竹管連続刺突2段			ナデ		2.5Y6/2 灰黄	小石	
61	23	II-B	丸	半截竹管刺突・半截竹管連続刺突	平縁・外反			半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	LR斜行		ナデ		10YR5/1 褐灰	火山灰	
62	23	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	太い半截竹管連続刺突1段・円形刺突文	RL斜行		ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	小石・火山灰	
63	23	II-B	角	竹管文刺突列	平縁・外反			竹管連続刺突	LR斜行		ナデ		10YR4/2 灰黄褐	火山灰	
64	23	II-B	丸		平縁・外反			ヘラ連続刺突			ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	火山灰	
65	23	II-B	丸		平縁・外反			半截竹管連続刺突	LR斜行	LR斜行			10YR4/1 褐灰	火山灰	
66	23	II-B	丸		波状・外反	山形	肥厚	半截竹管連続刺突2段			ナデ		2.5Y8/4 淡黄	石英	
67	23	II-B	角	ヘラ連続刺突	平縁・外反			円形刺突文	LR斜行		ナデ		10YR5/2 灰黄褐	小石	

挿図番号	図版	分類	口唇 断面	口唇 文様	口縁部	突起	形状	文様	地文	内面 文様	内面 整形	炭化物	色調(標準土色帳)	胎土	備考
68	23	II-B	角	太い半截竹管連続刺	平縁・外反			円形刺突文			ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	火山灰	
69	23	II-B					肥厚	半截竹管連続刺突2段・円形刺突文	RL 斜行	RL 横走			10YR6/3 にぶい黄橙	火山灰	
70	23	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	砂	
71	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文	RL 斜行		ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	火山灰	
72	23	II-B	角	LR 斜行	平縁・外反			円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	火山灰	
12-73	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	火山灰	
74	23	II-B	角	LR 斜行	平縁・外反			円形刺突文	RL 斜行		ナデ		10YR4/2 灰黄褐	火山灰	
75	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文			ナデ		10YR4/2 灰黄褐	火山灰	
76	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR4/1 褐灰	火山灰・石英	
77	23	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	円形刺突文			ナデ		10YR4/1 褐灰	火山灰	
78	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文	RL 斜行		ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	小石	
79	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文			ナデ		7.5YR5/3 にぶい褐	小石	
80	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文	L 斜行		ナデ		5YR6/4 にぶい橙	小石・石英	
81	23	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	円形刺突文	RL 斜行		ナデ		2.5Y7/2 灰黄	小石	
82	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文	LR 斜行		ナデ		5YR6/4 にぶい橙	石英	
83	23	II-B	丸		平縁・外反			円形刺突文	RL 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	火山灰	
13-84	24	II-B	角	RL 斜行	平縁・外反				結節羽状縄文	結節羽状縄文			10YR2/1 黒	火山灰	
85	24	II-B	丸		平縁・外反				LR 斜行	LR 斜行			10YR5/2 灰黄褐	火山灰	
86	24	II-B	角	LR 斜行	平縁・外反				結節羽状縄文		ナデ		5Y4/1 灰	火山灰	
87	24	II-B	丸	LR 斜行	平縁・外反				LR 斜行		ナデ		2.5Y4/1 黄灰	砂・火山灰	
88	24	II-B						円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	砂	
89	24	II-B						円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR4/1 褐灰	火山灰	
90	24	II-B						円形刺突文	RL 斜行		ナデ		10YR2/1 黒	小石	
91	24	II-B						円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR7/2 にぶい黄橙	小石	
92	24	II-B	丸		平縁・外反		肥厚	円形刺突文	LR 斜行		ナデ		10YR5/2 灰黄褐	火山灰	
93	24	II-B	丸	半截竹管刺突	波状・外反	山形					ナデ		10YR6/2 灰黄褐	火山灰	
94	24	II-B						円形刺突文	結節羽状縄文	RL 斜行			10YR6/3 にぶい黄橙	小石	
95	24	II							LR 斜行	LR 斜行			10YR6/4 にぶい黄橙	火山灰	
96	24	II							結節 LR 斜行	LR 斜行			7.5YR6/3 にぶい褐	火山灰	
97	24	II							結節 LR 斜行	LR 斜行			7.5YR6/3 にぶい褐	火山灰	
98	24	II							LR 斜行	LR 斜行			7.5YR6/2 灰褐	火山灰	
99	24	II							結節 LR 斜行	結節 LR 斜行			10YR6/2 灰黄褐	小石	

挿図番号	図版	分類	口唇		口縁部	突起	形状	文様	地文	内面		炭化物	色調(標準土色帳)	胎土	備考
			断面	文様						文様	整形				
100	24	II						貼付文	LR 斜行		ナデ		10YR6/3 にぶい褐	火山灰	
101	24	II							RL 斜行	RL 斜行			10YR6/2 灰黄褐	火山灰	
102	24	II							LR 斜行		ナデ		2.5Y7/2 灰黄	小石・砂	
103	24	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	砂	
104	24	II							RL 斜行		ナデ		7.5YR6/3 にぶい褐	小石・火山灰	
105	24	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR5/2 にぶい褐	小石・火山灰	
106	24	II							LR 斜行		ナデ		5YR5/2 灰褐	小石	
107	24	II							LR 斜行		ナデ		2.5Y4/2 暗灰黄	砂	
108	24	II							結節羽状縄文		ナデ		10YR4/2 灰黄褐	小石	
109	24	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/3 にぶい褐	火山灰	
110	24	II							RL 斜行		ナデ		10YR3/1 黒褐	小石	
111	24	II							RL 斜行		ナデ		2.5Y7/2 灰黄	小石	
112	24	II							RL 斜行		ナデ		7.5YR5/3 にぶい褐	石英・砂	
113	24	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	火山灰・石英	
114	24	II							LR 斜行		ナデ		10YR5/2 灰黄褐	小石・火山灰	
115	24	II							LR 斜行		ナデ		10YR4/1 褐灰	火山灰	
14-116	25	II							RL 斜行		ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	小石・石英	
117	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/6 明黄褐	火山灰・小石	
118	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	火山灰	
119	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR5/2 灰黄褐	火山灰・石英	
120	25	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	砂	
14-121	25	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	石英	
122	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	砂	
123	25	II							LR 斜行		ナデ		5YR4/3 にぶい赤褐	砂	
124	25	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	火山灰	
125	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR8/4 浅黄橙	火山灰	
126	25	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	小石	
127	25	II							結節羽状縄文		ナデ		7.5YR5/3 にぶい褐	火山灰	
128	25	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR7/6 橙	石英・砂	
129	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR5/3 にぶい黄褐	砂	
130	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR8/3 浅黄橙	砂	
131	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR5/4 にぶい黄褐	砂	

挿図番号	図版	分類	口唇 断面	口唇 文様	口縁部	突起	形状	文様	地文	内面 文様	内面 整形	炭化物	色調(標準土色帳)	胎土	備考
132	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄褐	石英	
133	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	砂	
134	25	II						半截竹管沈線	RL 斜行		ナデ		10YR5/3 にぶい黄褐	石英・砂	
135	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/6 明黄褐	火山灰・石英	
136	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR8/6 黄橙	石英	
137	25	II							結節羽状縄文		ナデ		7.5YR6/6 橙	火山灰	
138	25	II							結節羽状縄文		ナデ		10YR7/4 黄橙	石英	
139	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 黄橙	砂	
140	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/6 橙	火山灰	
141	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	火山灰	
142	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR8/6 黄橙	火山灰	
143	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/6 明黄褐	小石	
144	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR5/2 灰黄褐	小石	
145	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	石英	
146	25	II							RL 斜行		ナデ		10YR7/6 橙	砂	
147	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	砂・石英	
148	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	砂・石英	
149	25	II							LR 斜行		ナデ		10YR4/1 褐灰	砂	
150	26	II							LR 斜行		ナデ		2.5Y7/4 浅黄	火山灰	
151	26	II						円形刺突文	RL 斜行		ナデ		10YR6/3 にぶい黄橙	砂	
152	26	II						円形刺突文	結節羽状縄文		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	小石	
153	26	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR7/4 にぶい橙	石英・砂	
154	26	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/6 明黄褐	火山灰・石英	
155	26	II							LR 斜行		ナデ		5YR5/4 にぶい赤褐	石英	
156	26	II							LR 斜行		ナデ		2.5Y7/4 浅黄	砂	
157	26	II						円形刺突文	R斜行		ナデ		7.5YR6/6 橙	火山灰・石英	
158	26	II							LR 斜行		ナデ		5YR6/6 橙	小石	
15-159	26	II							結節羽状縄文		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	火山灰	
160	26	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	火山灰	
161	26	II							R斜行		ナデ		2.5YR6/6 橙	砂	
162	26	II							R斜行				5YR6/6 橙	小石	
163	26	II							LR 斜行		ナデ		5YR6/6 橙	砂	

挿図番号	図版	分類	口唇 断面	口唇 文様	口縁部	突起	形状	文様	地文	内面 文様	内面 整形	炭化物	色調 (標準土色帳)	胎土	備考
164	26	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR5/2 灰褐	火山灰	
165	26	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/4 にぶい橙	火山灰	
166	26	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/2 灰黄褐	石英	
167	26	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR5/4 にぶい褐	火山灰	
168	26	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	石英・火山灰	
15-169	26	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	砂	
170	26	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	小石・火山灰	
171	26	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	火山灰	
172	26	II							結節羽状縄文		ナデ		5YR6/6 橙	小石	
173	26	II							R斜行		ナデ		7.5YR6/6 橙	小石	
174	26	II							RL 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	小石・砂	
175	26	II							RL 斜行		ナデ		5YR6/6 橙	小石	
176	26	II							RL 斜行		ナデ		10YR8/4 浅黄橙	火山灰	
177	26	II							LR 斜行		ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙	小石	
178	26	II											5YR5/6 明赤褐	小石	底部
179	26	II									ナデ		7.5YR7/6 橙	火山灰	底部
180	26	II							LR 結束		ナデ		7.5YR7/6 橙	火山灰・石英	底部
181	26	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR7/6 橙	砂	底部・底面 LR 斜行
182	27	II							LR 斜行		ナデ		2.5YR6/8 橙	火山灰・小石	底部
183	27	II											10YR7/4 にぶい黄橙	石英	底部・底面 LR 斜行
184	27	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR7/6 橙	砂・火山灰	底部
185	27	II							LR 斜行		ナデ		10YR8/4 浅黄橙	小石・火山灰	底部
186	27	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR7/6 橙	小石	底部
187	27	II							RL 斜行		ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙	火山灰	底部
188	27	II							LR 斜行		ナデ		10YR8/4 浅黄橙	小石	底部
189	27	II							RL 斜行				10YR8/4 浅黄橙	火山灰	底部
190	27	II							LR 斜行		ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	小石・石英	底部
191	27	II											10YR7/6 明黄褐	火山灰・砂	底部
192	27	II							RL 斜行		ナデ		7.5YR6/6 橙	砂	底部
193	27	II									ナデ		7.5YR6/3 にぶい褐	石英・砂	底部
194	27	II							LR 斜行		ナデ		10YR8/4 浅黄橙	石英	底部
195	27	II									ナデ		7.5YR7/6 橙	石英・小石	底部

挿図番号	図版	分類	口唇		口縁部	突起	形状	文様	地文	内面		炭化物	色調(標準土色帳)	胎土	備考
			断面	文様						文様	整形				
196	27	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/6 橙	砂	底部
197	27	II							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/6 橙	石英・小石	底部
16-198	27	III-A	角	棒の連続刺突	平縁・直立			棒の連続刺突 2段・貼付帯	RL 斜行		ナデ		10YR8/4 浅黄橙	火山灰	
199	27	III-A	丸		波状・外反	山形			結節羽状縄文		ナデ	口唇	5Y6/2 灰オリーブ	砂・石英	
200	27	III-A	角	棒の刺突列	波状・外反				LR 斜行		ナデ		5Y6/1 灰	砂	
201	27	III-A	角		平縁・外反			刺突	RL 斜行		ナデ		2.5Y6/1 黄灰	少量の火山灰	
202	27	III-A	角	LR 斜行	平縁・外反				LR 斜行		ナデ		10YR7/6 明黄褐	小石	
203	27	III-A	丸		平縁・外反			半截竹管連続刺突	RL 斜行		ナデ		10YR5/1 褐灰	砂	
204	27	III-A	丸		平縁・外反				LR 斜行		ナデ	内面一部	10YR7/6 明黄褐	石英	
205	27	III-A	丸	刺突列	平縁・外反				LR 斜行		ナデ		2.5Y4/1 黄灰	砂・石英	
206	27	III-A	丸	刻み目	波状・外反		肥厚				ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	火山灰	
207	27	III-A	丸		平縁・外反				LR 斜行		ナデ		10YR7/6 明黄褐	石英・砂	
208	27	III-A							LR 斜行		ナデ		7.5YR6/6 橙	石英	
209	27	III-A	角		平縁・外反			半截竹管連続刺突	LR 斜行		ナデ		7.5YR4/1 褐灰	火山灰	
210	27	III-A	角	半截竹管刺突	波状・外反	山形					ナデ		7.5YR7/6 橙	火山灰・石英	
211	27	III-A						円形刺突文			ナデ		10YR4/1 褐灰	石英	
212	27	III-B						区画沈線	LR 斜行		ヘラミガキ		7.5YR6/6 橙	砂	
213	27	III-B						区画沈線	RL 斜行		ヘラミガキ		7.5YR6/6 橙	砂・石英	
214	27	III-B											10YR7/4 にぶい黄橙	石英・砂	底部
215	27	III-B	角	刻み目	波状・外反	山形			LR 斜行		ナデ		7.5YR6/6 橙	砂	

第4表　T 276 遺跡発掘区出土石器計測値一覧表

挿図番号	図版番号	出土地区	器　種　名	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石　　質	備　　考
17- 1	29	08-04	石鏃	28.0	19.0	4.0	1.1	Obs.	
2	29	07-08	銛先	50.0	27.0	6.0	5.5	Obs.	
3	29	07-09	銛先	(39.0)	30.0	8.0	(4.9)	Obs.	
4	29	02-03	銛先	68.0	38.0	14.0	27.2	Obs.	
5	29	05-08	石錐	37.0	21.0	12.0	6.9	Obs.	
6	29	07-08	石錐	25.0	15.0	7.0	2.1	Obs.	
7	29		ナイフ状石器	40.0	18.0	9.0	6.5	Obs.	表採
8	29	02-02	ナイフ状石器	(50.0)	18.0	10.0	(8.3)	Obs.	
9	29	04-04	ナイフ状石器	(34.0)	34.0	10.0	(10.8)	Obs.	
10	29	04-09	ナイフ状石器	(41.0)	31.0	11.0	(12.6)	Obs.	
11	29	06-08	ナイフ状石器	36.0	(22.0)	8.0	(8.6)	Obs.	
12	29	02-03	ナイフ状石器	(31.0)	16.0	6.0	(3.5)	Obs.	
13	29	04-03	掻器	34.0	32.0	10.0	10.1	Obs.	
14	29	02-03	掻器	(33.0)	22.0	11.0	(5.9)	Obs.	
15	29	02-03	掻器	24.0	32.0	11.0	8.1	Obs.	
16	29	07-08	掻器	47.0	52.0	25.0	39.2	Obs.	
17	29	02-03	掻器	33.0	19.0	7.0	2.6	Obs.	
18	29	02-02	削器	35.0	21.0	11.0	7.2	Obs.	
19	29	03-03	削器	45.0	15.0	5.0	3.0	Obs.	
20	29	07-09	削器	(30.0)	13.0	5.0	1.9	Obs.	
21	29	07-08	削器	(45.0)	34.0	13.0	(16.2)	Obs.	
22	29	03-03	削器	(30.0)	16.0	5.0	(2.2)	Obs.	
23	29	05-08	削器	37.0	22.0	3.0	2.5	Obs.	
24	29	05-05	削器	31.0	21.0	4.0	2.1	Obs.	
25	29	02-02	削器	31.0	18.0	5.0	1.7	Obs.	
26	29	07-03	削器	43.0	22.0	6.0	3.6	Obs.	
27	29	07-08	削器	40.0	20.0	3.0	2.2	Obs.	
28	29	03-02	削器	34.0	23.0	8.0	4.8	Obs.	
29	30	06-08	削器	(31.0)	19.0	3.0	(1.9)	Obs.	
30	30	02-04	削器	49.0	38.0	21.0	26.7	Obs.	
18-31	30	03-02	削器	46.0	28.0	15.0	(15.0)	Obs.	
32	30	02-02	削器	23.0	27.0	8.0	3.2	Obs.	
33	30	03-02	削器	(27.0)	(26.0)	4.0	(2.5)	Obs.	
34	30	06-08	削器	(20.0)	(26.0)	4.0	(2.1)	Obs.	
35	30	07-09	削器	25.0	23.0	5.0	2.4	Obs.	
36	30	02-02	削器	(19.0)	13.0	4.0	(0.8)	Obs.	
37	30	06-08	削器	17.0	20.0	4.0	1.8	Obs.	
38	30	07-09	削器	17.0	16.0	4.0	0.9	Obs.	
39	30	02-04	削器	(50.0)	27.0	12.0	(15.0)	Obs.	
40	30	07-10	削器	22.0	33.0	12.0	6.2	Obs.	
41	30	07-08	石核	55.0	25.0	28.0	29.5	Obs.	
42	30	07-09	石核	34.0	23.0	29.0	20.9	Obs.	
43	30	03-08	石核	29.0	29.0	16.0	16.6	Obs.	
44	30	05-09	石斧	80.0	41.0	13.0	58.4	Gre.mud.	
45	30	06-08	石斧	88.0	42.0	19.0	88.4	Gre.mud.	
46	31	02-04	石斧	84.0	34.0	15.0	53.9	Gre.mud.	
47	31	02-06	石斧	(41.0)	29.0	11.0	(20.9)	Bl.mud.	
48	31	03-03	石斧	94.0	45.0	16.0	105.5	Gre.mud.	
49	31	04-09	石斧	119.0	39.0	30.0	223.2	Bl.mud.	
19-50	31	07-05	石斧	189.0	55.0	36.0	563.1	Bl.mud.	
51	32	02-02	砥石	(98.0)	(85.0)	18.0	(159.7)	Sa.	
52	32	05-05	擦石	148.0	74.0	49.0	706.2	And.	
53	32	02-03	敲石	(73.0)	57.0	60.0	(308.2)	And.	

計測値の内，カッコ内の数字は現存値である。
石質の略記号は，以下のとおりである。
And.：安山岩（Andesite）　Sand.：砂岩（Sandstone）
Bl.-mud.：黒色泥岩（Black mudstone）　Obs.：黒曜石（Obsidian）
Gre.-mud.：緑色泥岩（Greenn mudstone）

図　　版

遺　物	縮尺	
	土器	約３分の１
	石器	約２分の１

遺跡付近空中写真

図版 2

A　遺跡発掘区全景

B　遺跡発掘区全景

A　遺跡発掘区全景

B　遺跡発掘区全景

図版 4

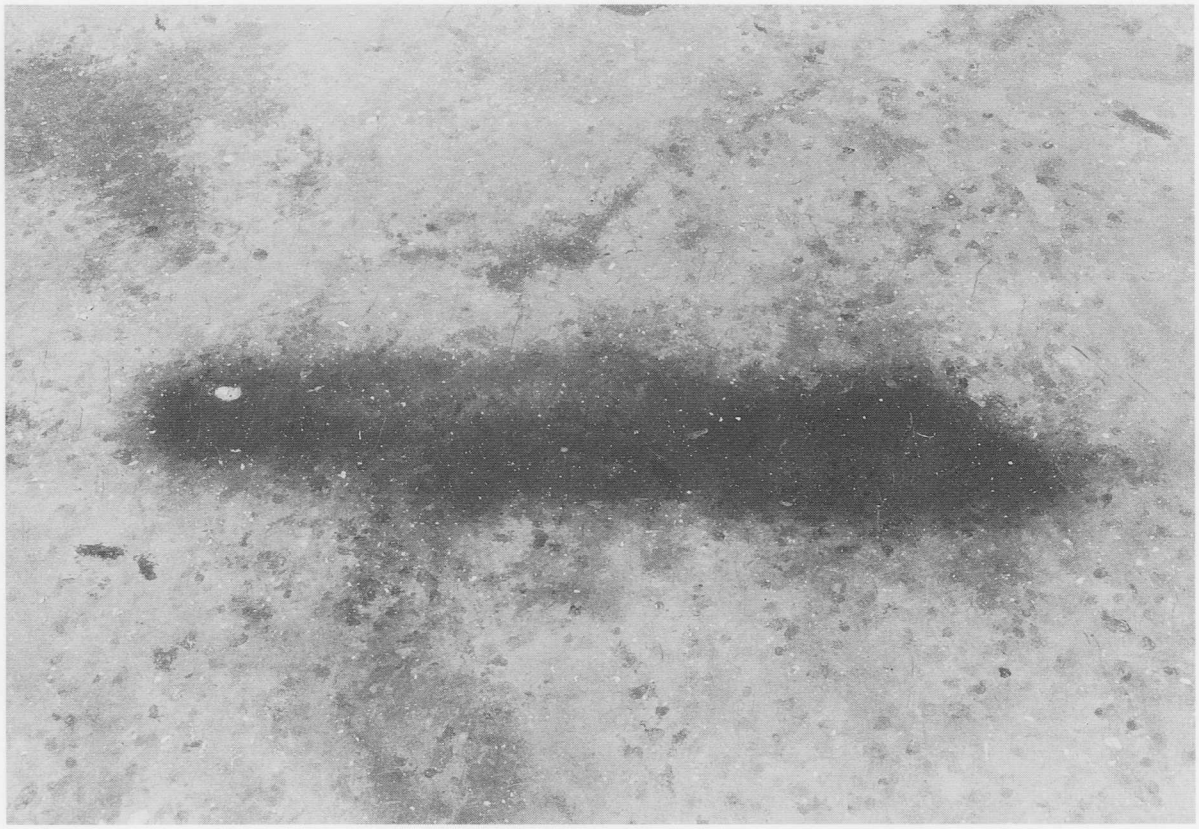
A　遺跡発掘風景

B　遺跡発掘風景

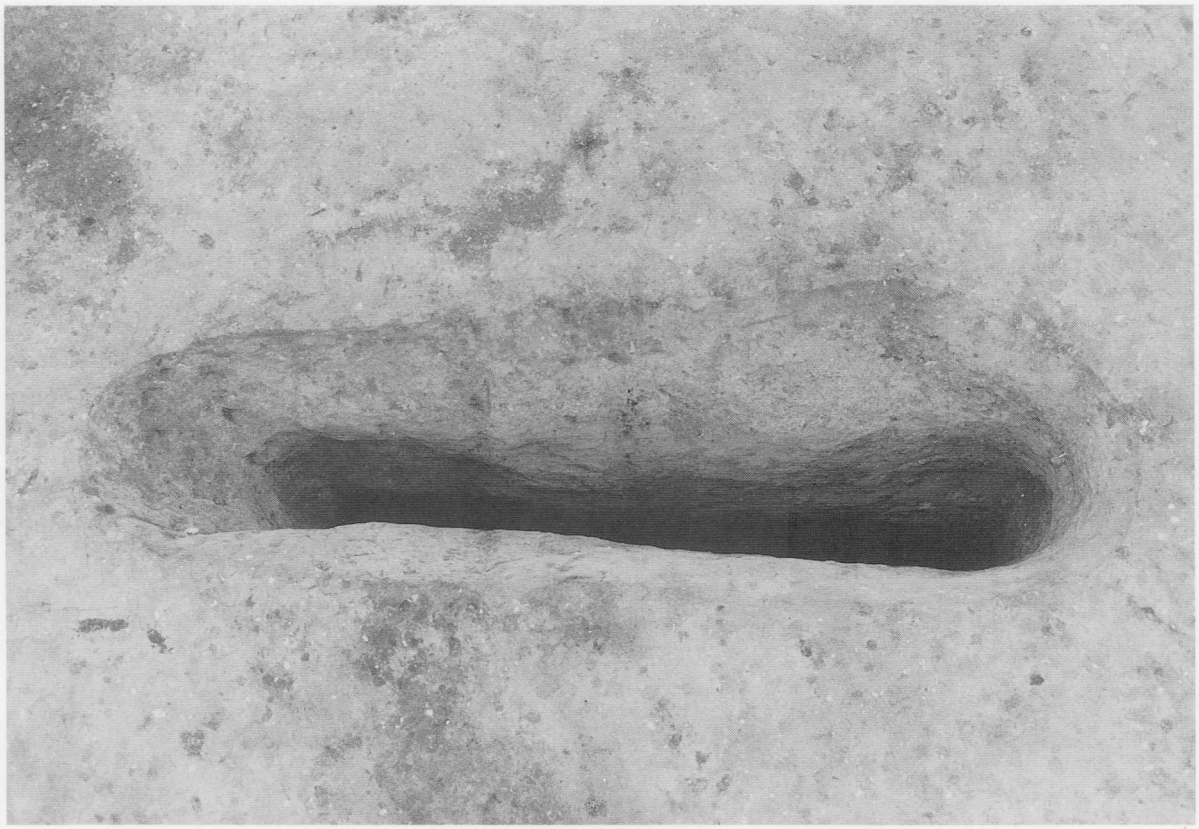
A　体験学習

B　体験学習

図版 6



A　第１号ピット検出状況



B　第１号ピット

A　第 2 号ピット検出状況

B　第 2 号ピット

図版 8

A　第 3 号ピット検出状況

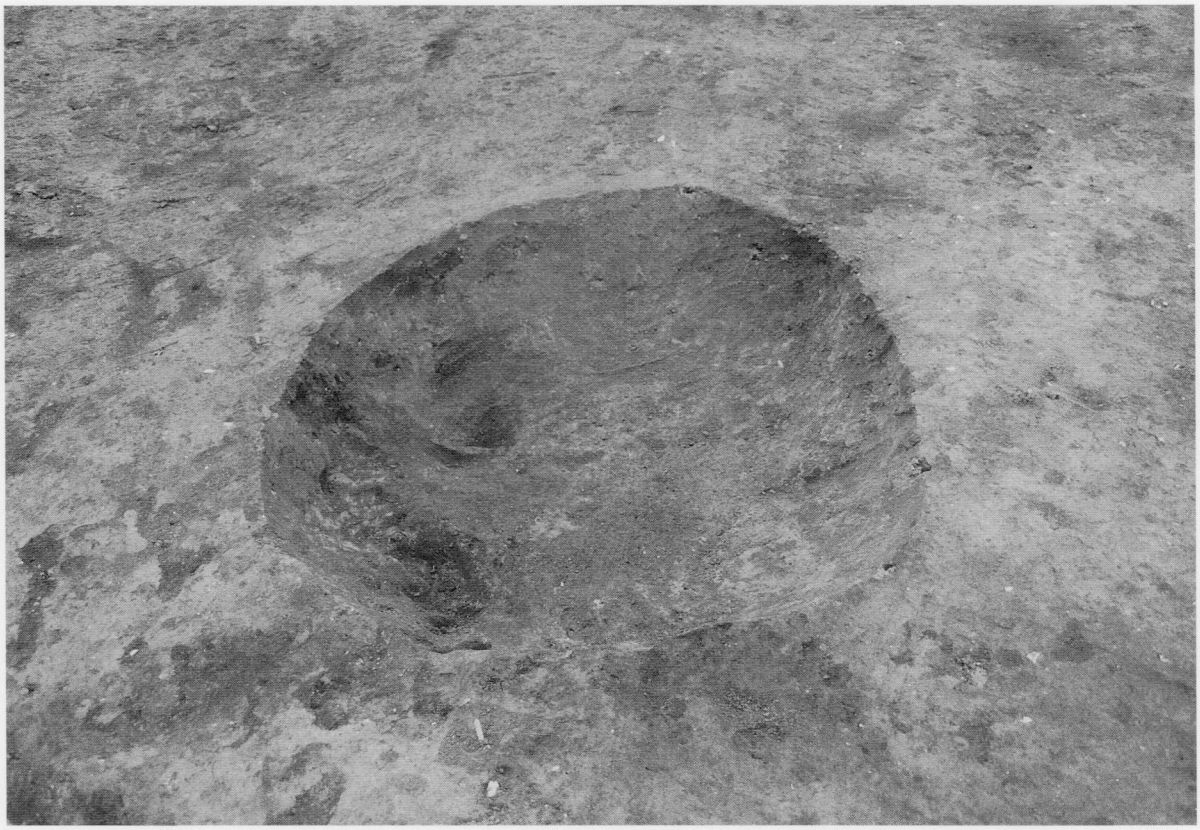
B　第 3 号ピット

A　第 4 号ピット検出状況

B　第 4 号ピット

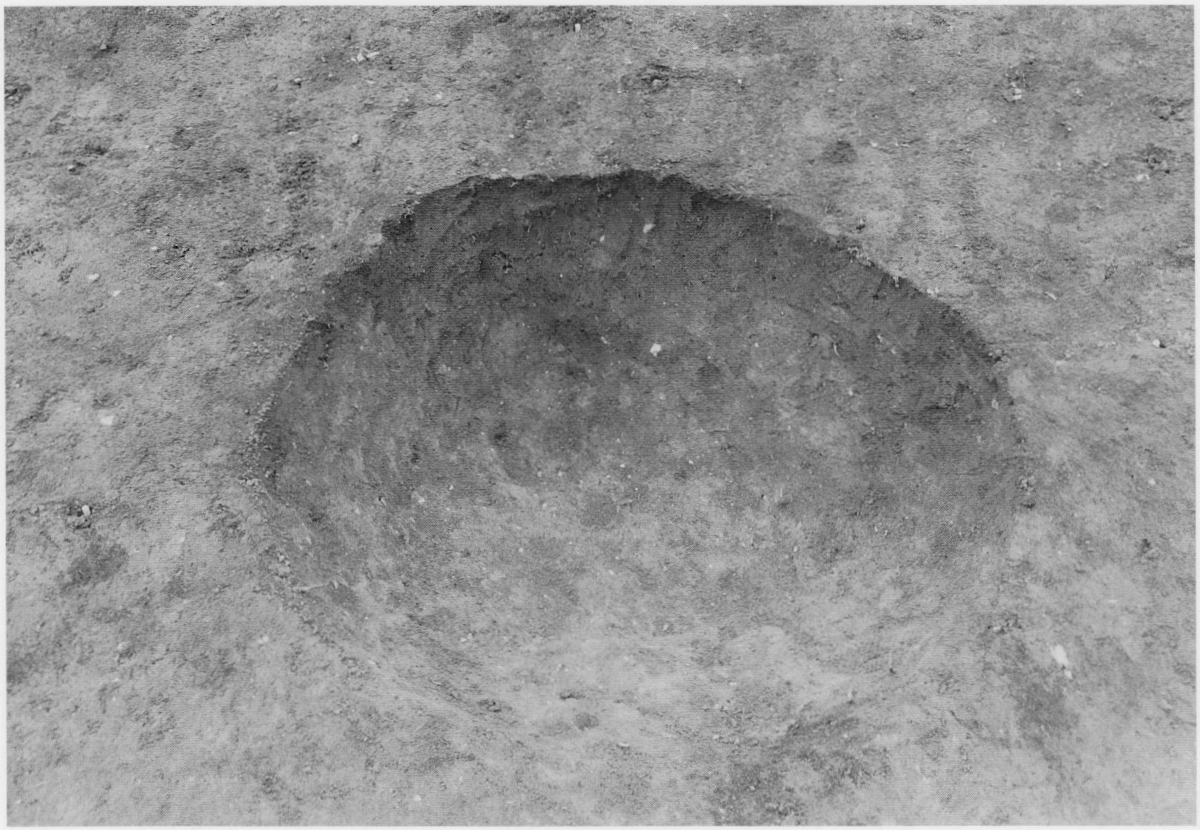
図版 10

A　第 5 号ピット検出状況



B　第 5 号ピット

A　第 6 号ピット断面検出状況



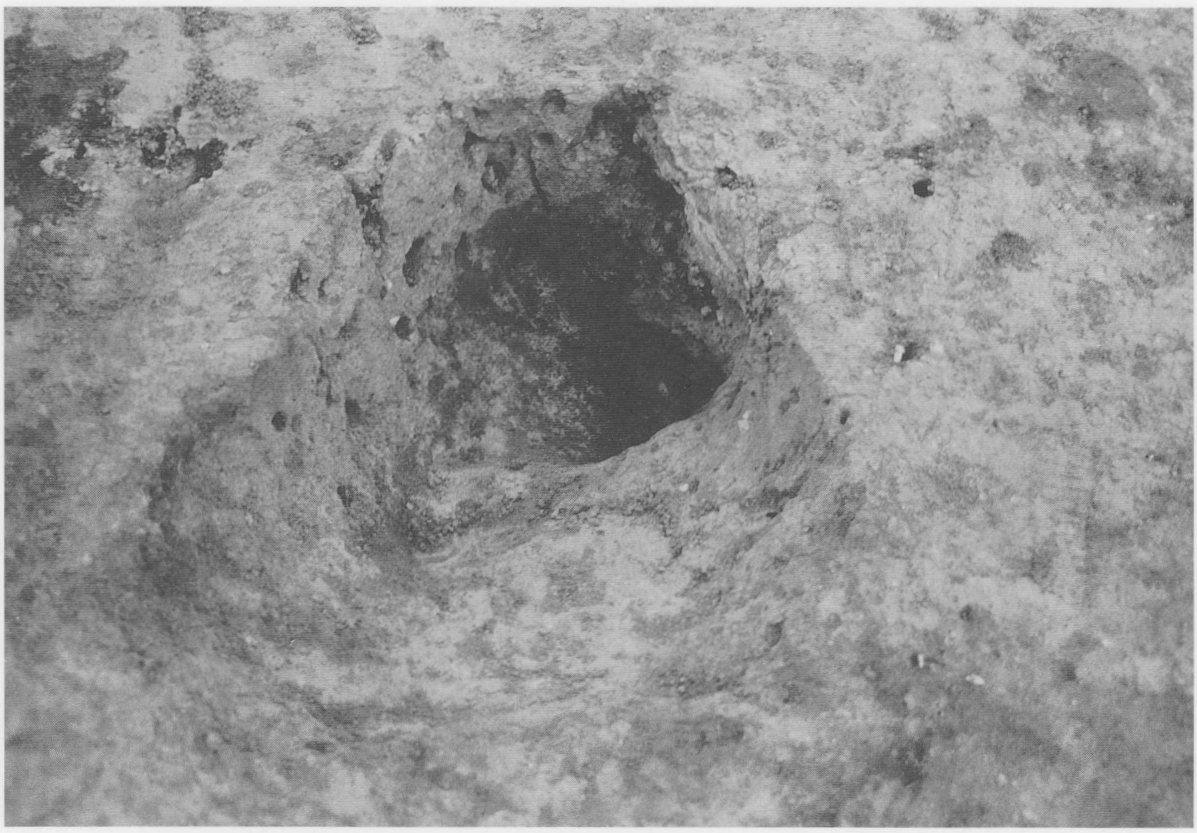
B　第 6 号ピット

図版 12

A　第 7 号ピット断面検出状況

B　第 7 号ピット

A　第 8 号ピット断面検出状況



B　第 8 号ピット

図版 14

A　第 9 号ピット断面検出状況

B　第 9 号ピット

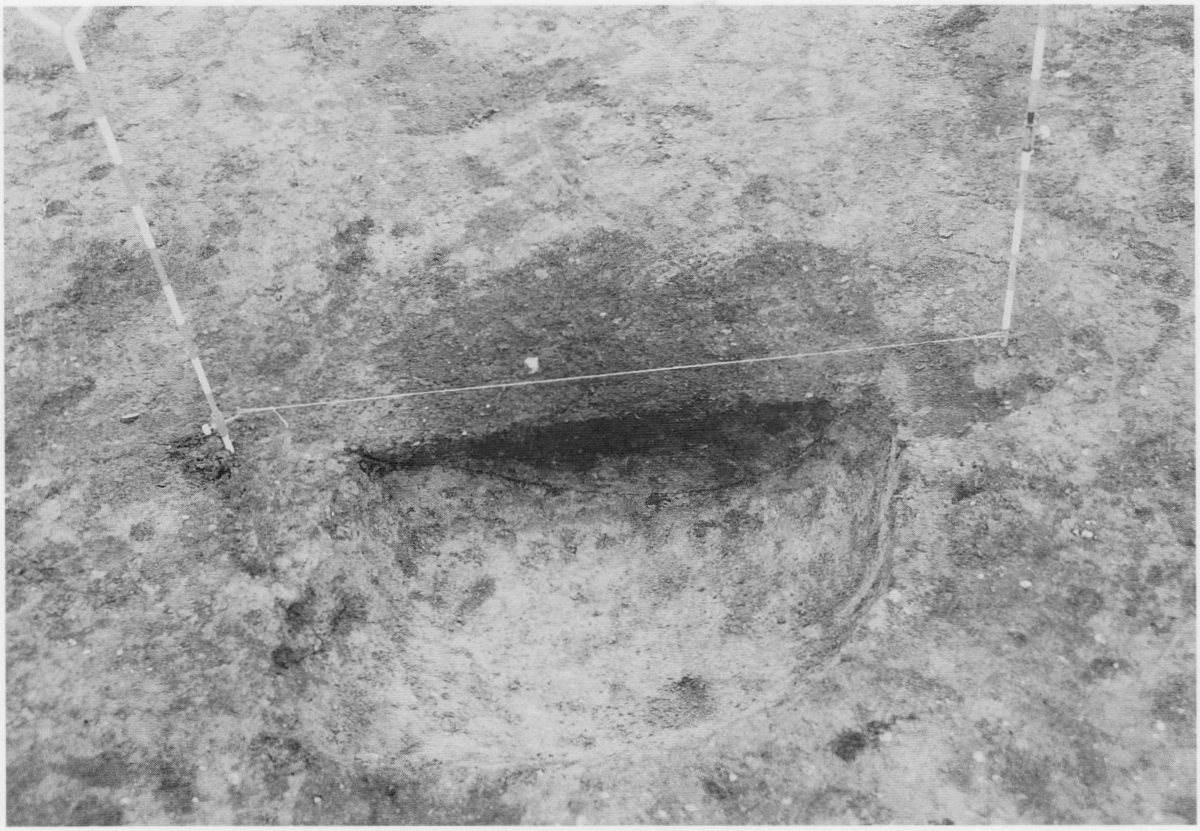
A　第 10 号ピット断面検出状況

B　第 10 号ピット

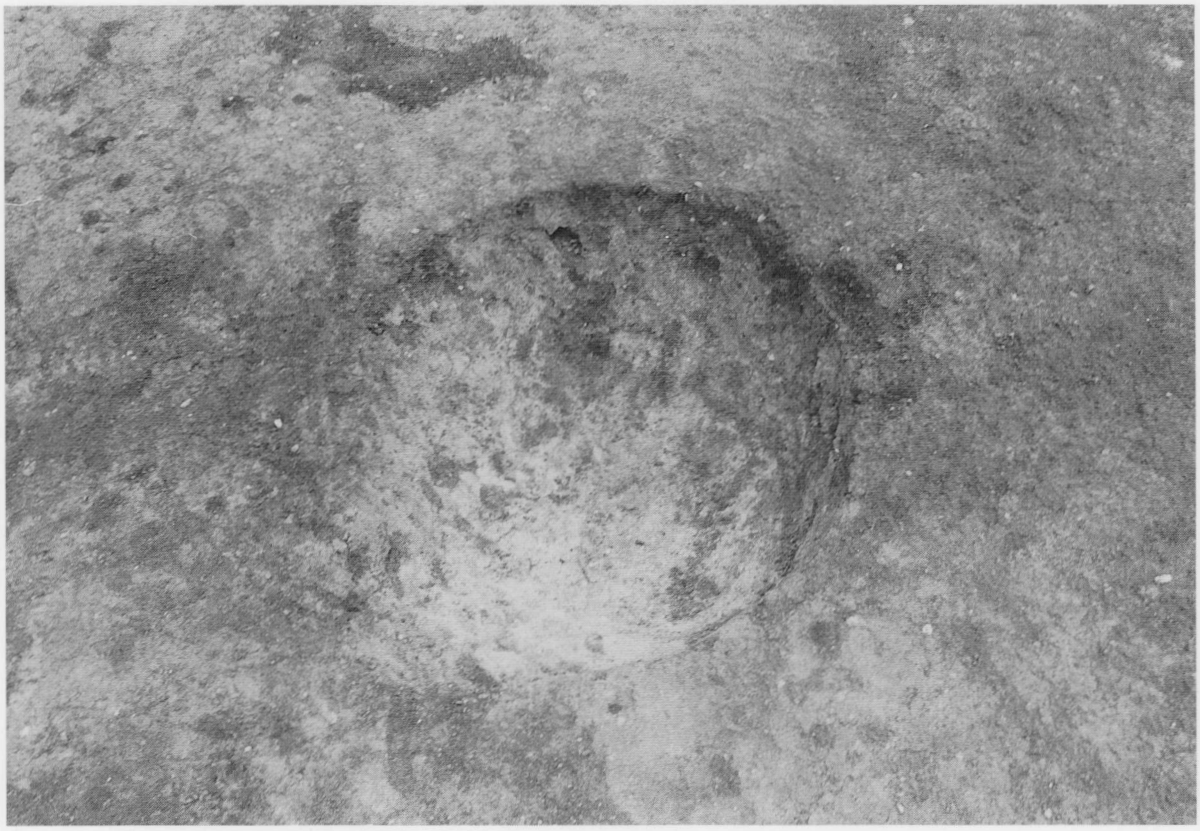
図版 16

A　第 11 号ピット断面検出状況

B　第 11 号ピット



A　第 12 号ピット断面検出状況

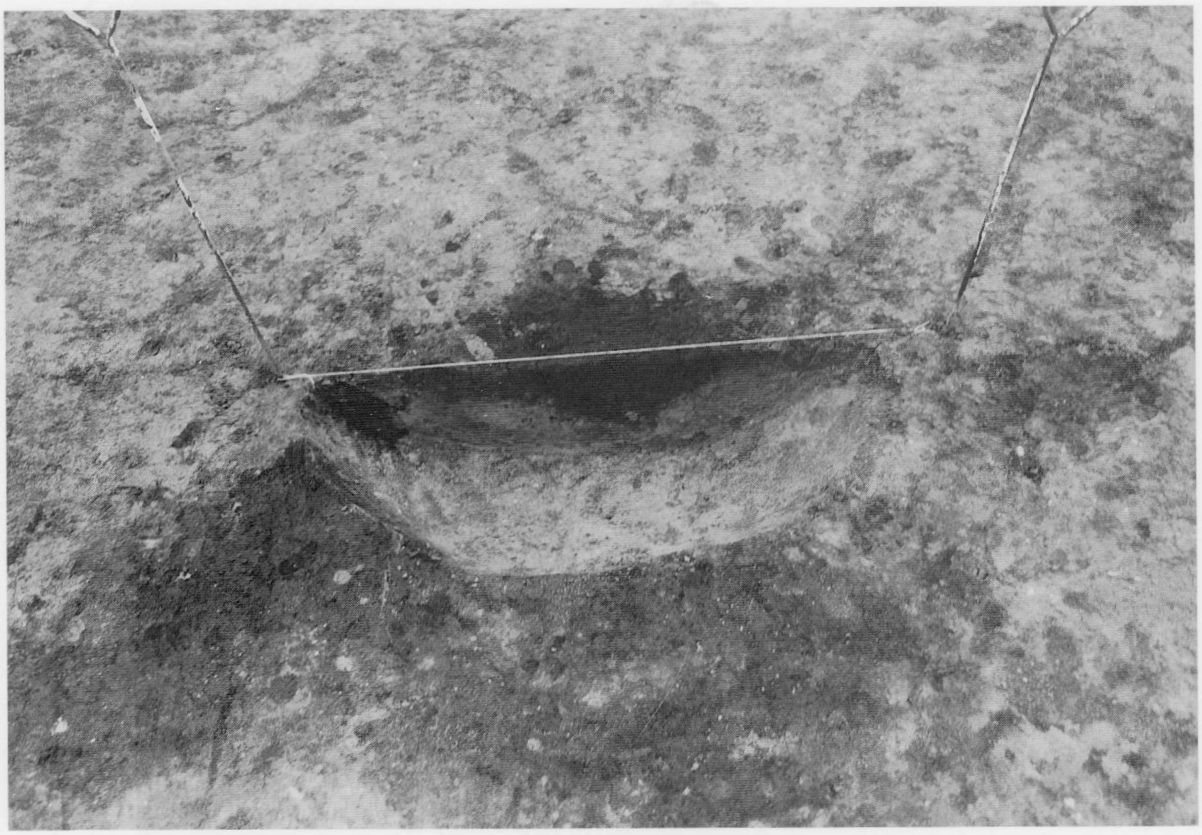


B　第 12 号ピット

図版 18

A　第 13 号ピット断面検出状況

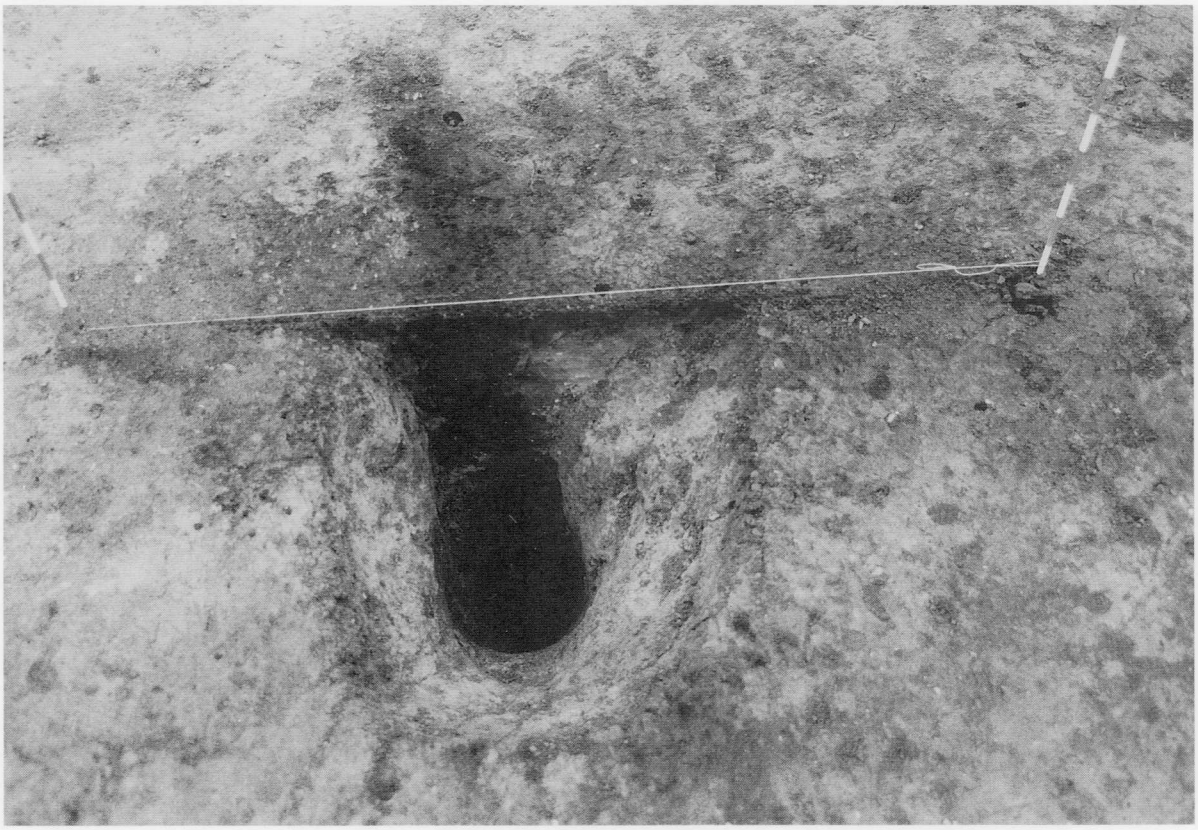
B　第 13 号ピット



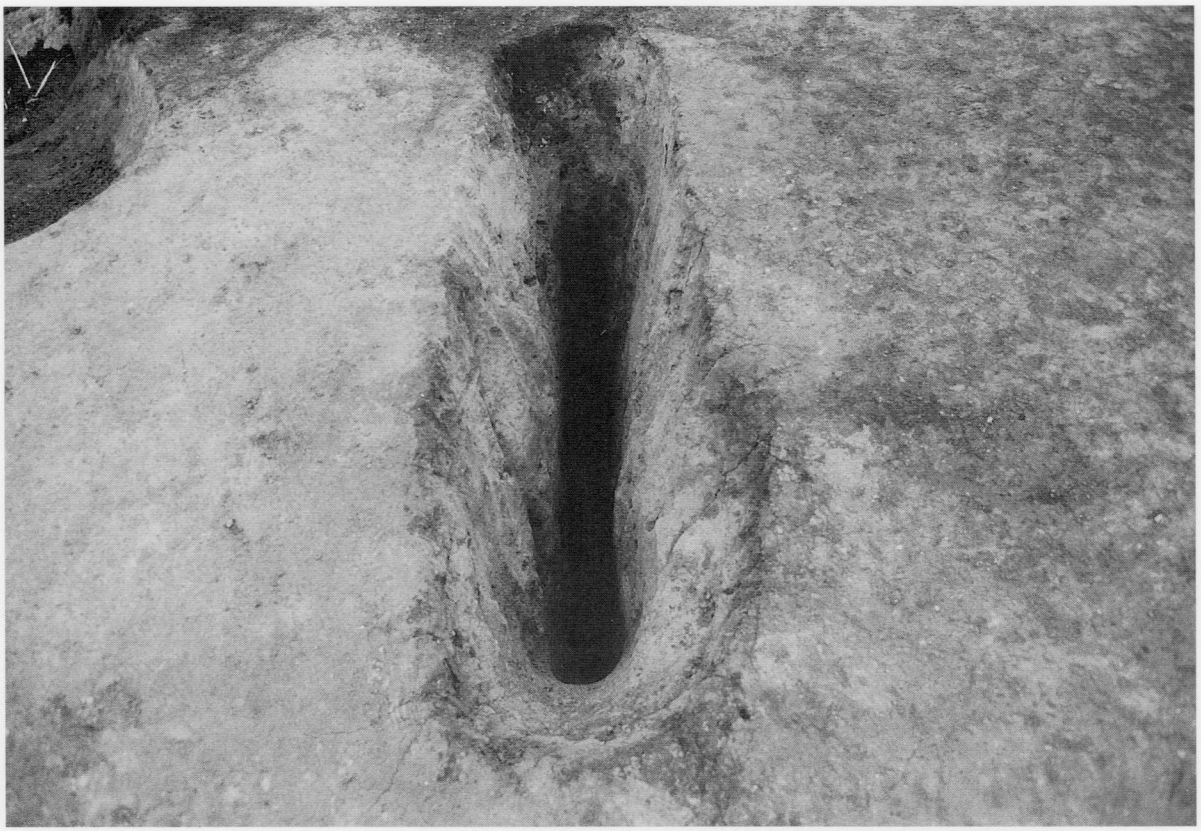
A　第 14 号ピット断面検出状況

B　第 14 号ピット

図版 20



A　第 15 号ピット断面検出状況



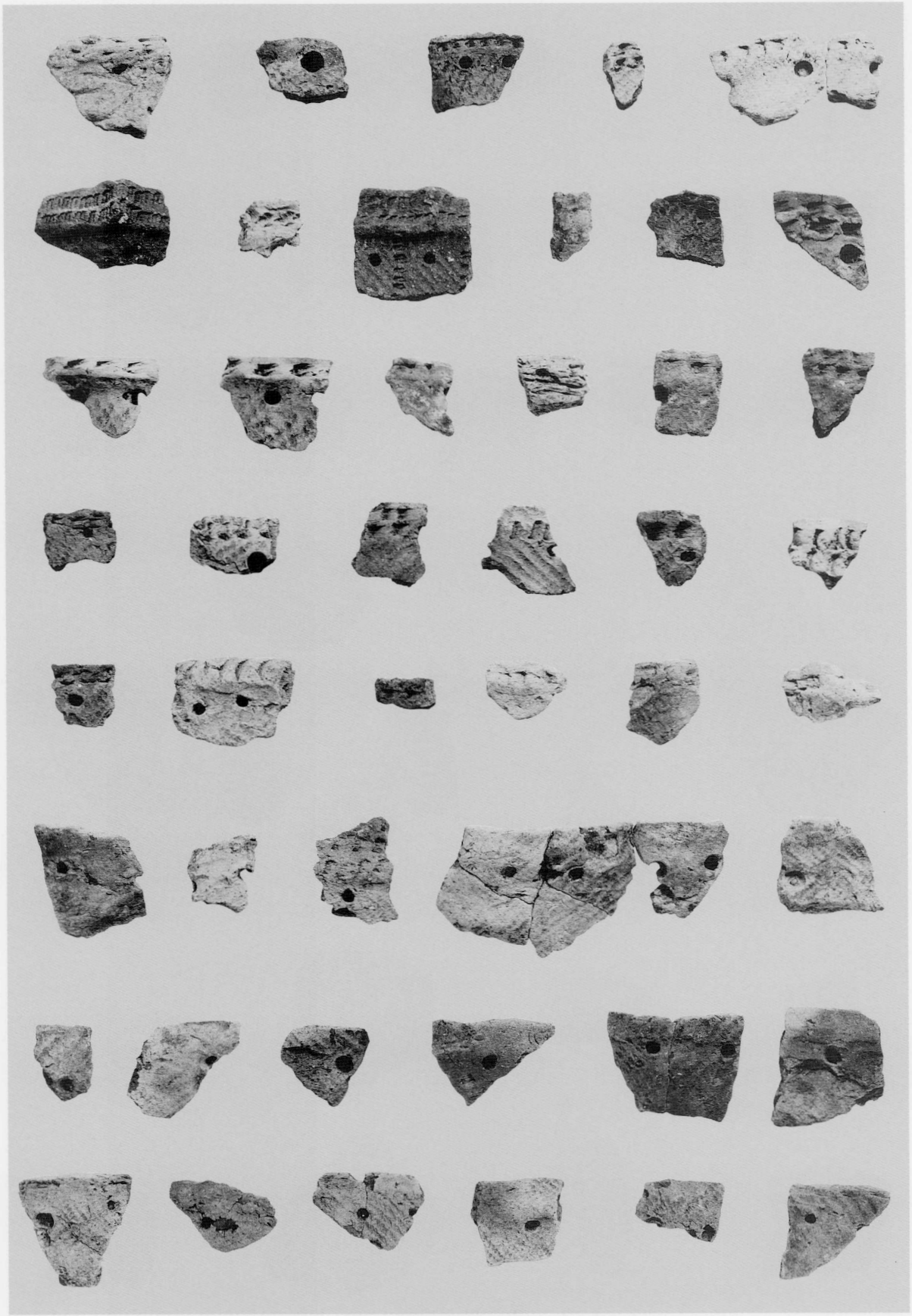
B　第 15 号ピット

A　第 16 号ピット断面検出状況

B　第 16 号ピット

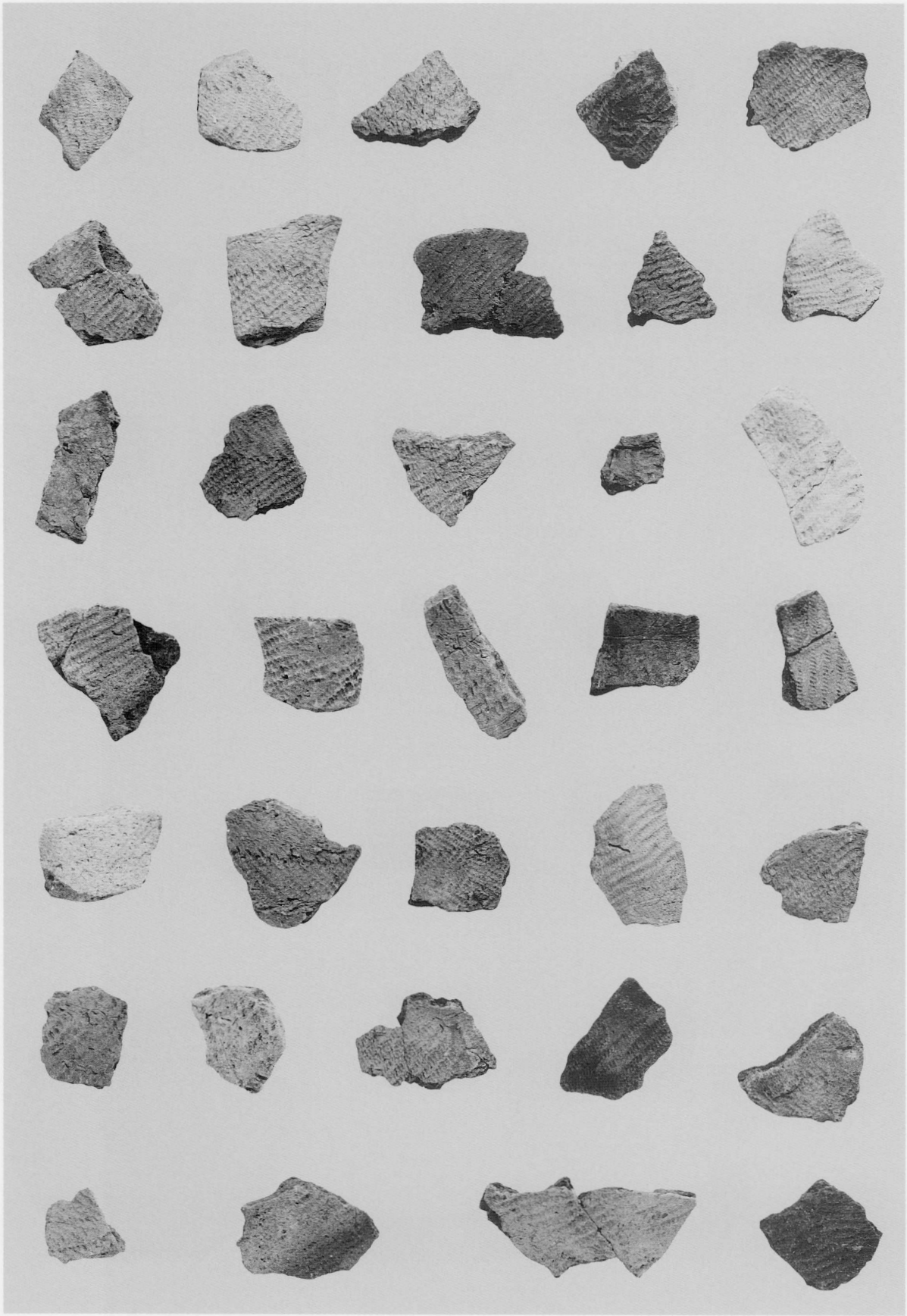
図版 22

発掘区出土土器

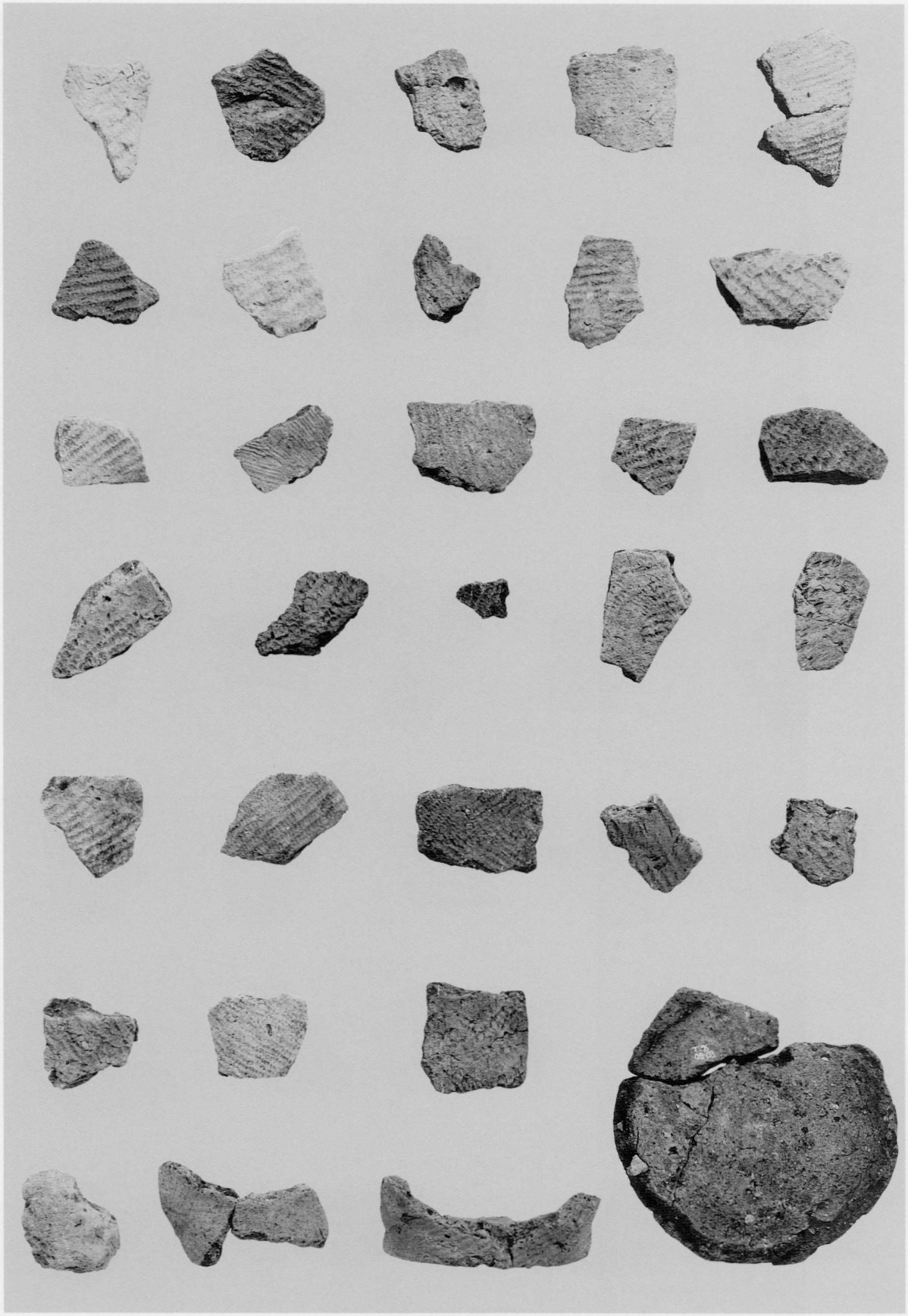


発掘区出土土器

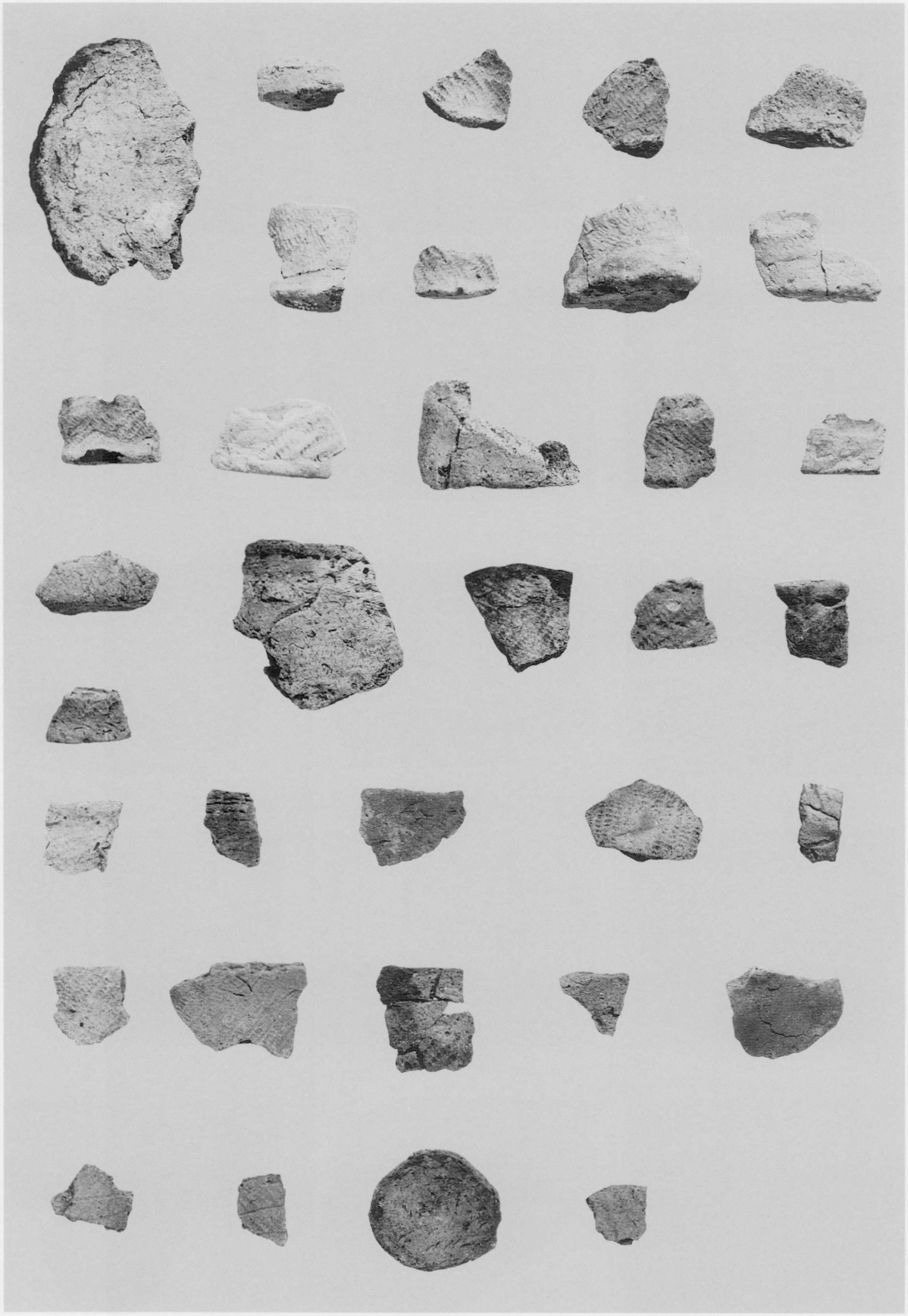
発掘区出土土器



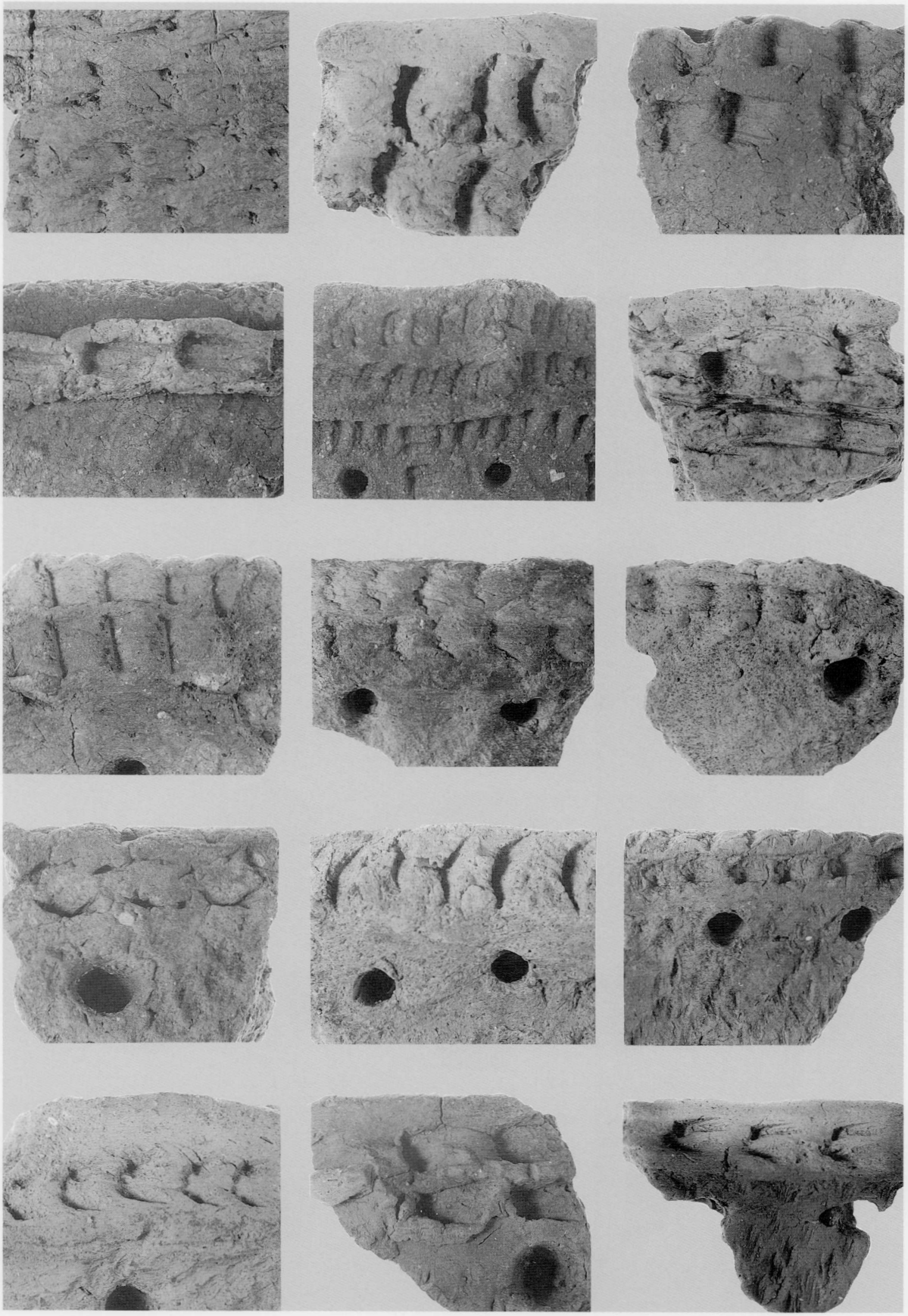
発掘区出土土器



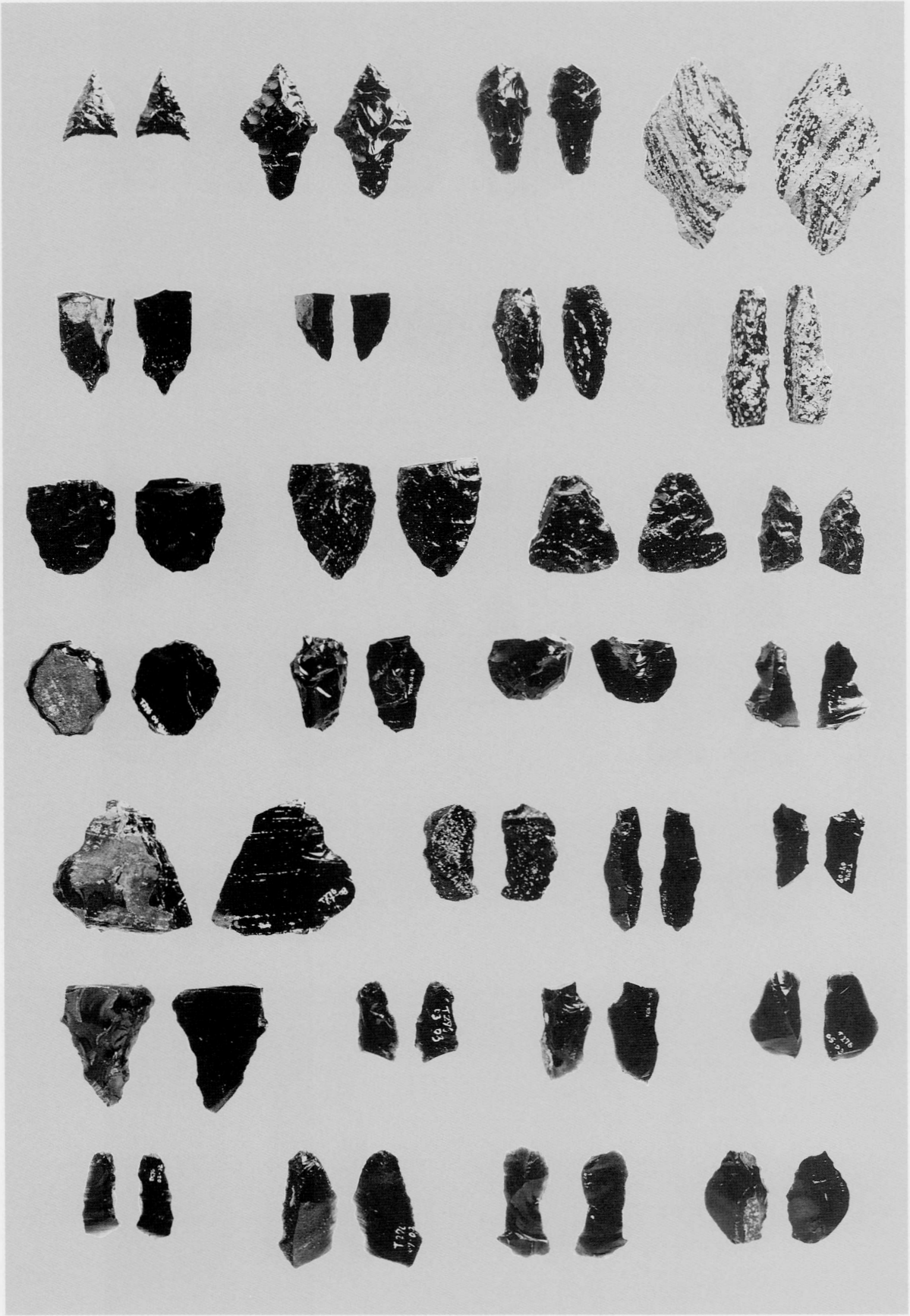
発掘区出土土器



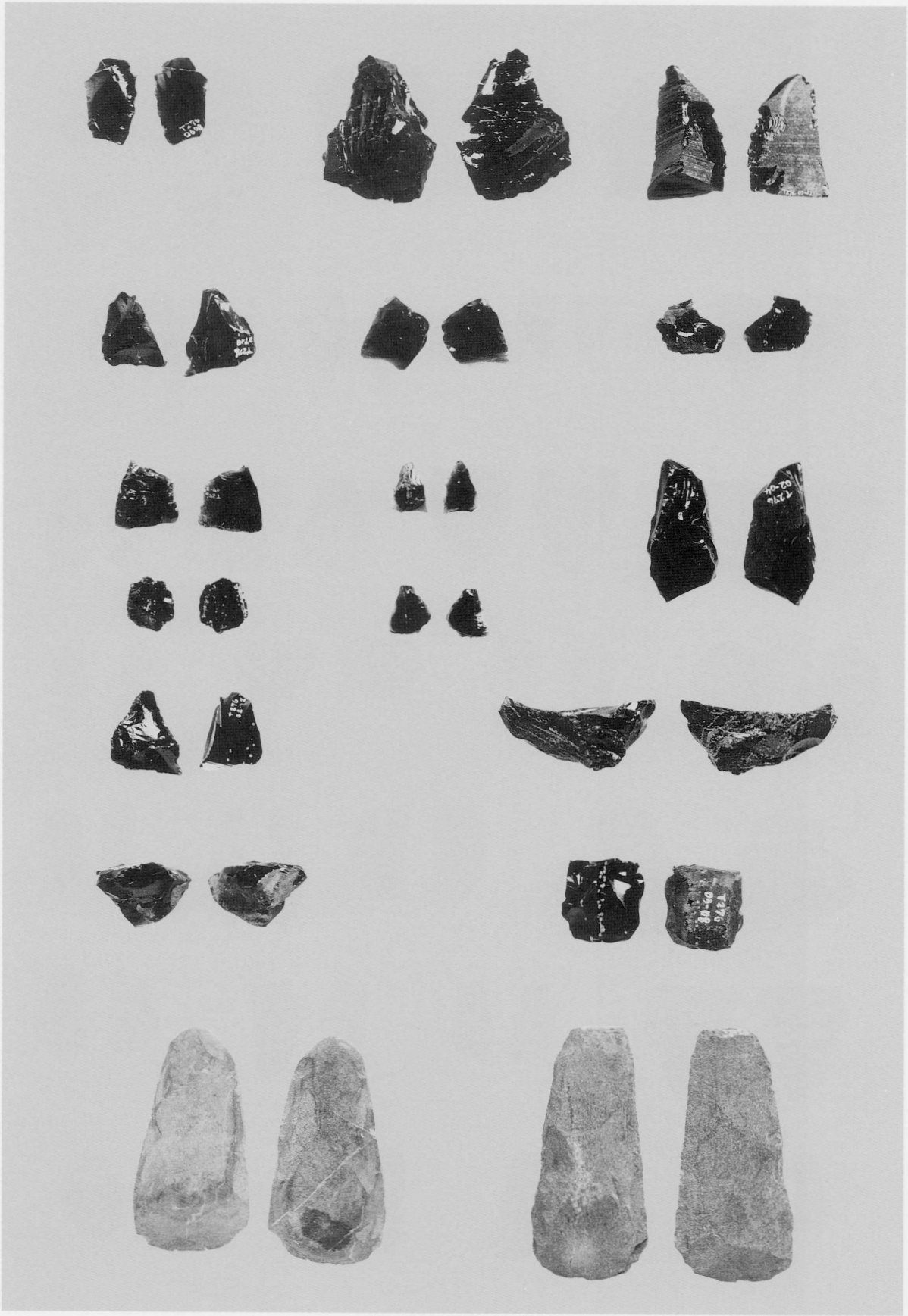
発掘区出土土器



土器文様

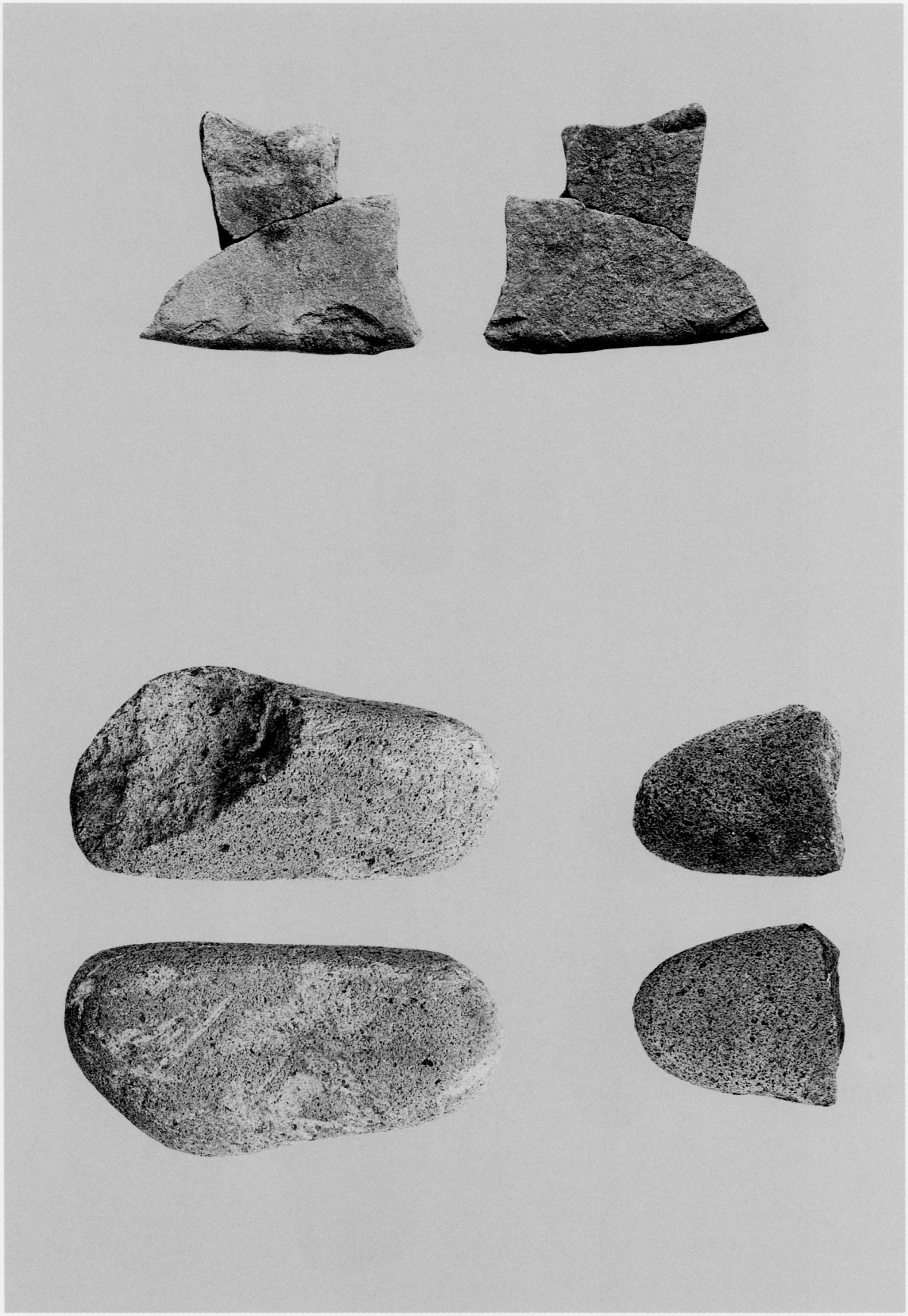


発掘区出土石器



発掘区出土石器

発掘区出土石器



発掘区出土石器

札幌市文化財調査報告書 51

T 276 遺跡

平成 8 年 3 月 27 日　印刷
平成 8 年 3 月 29 日　発行

発行者　札 幌 市 教 育 委 員 会
060 札幌市中央区南 1 条西 14 丁目
編　集　札幌市埋蔵文化財センター
064 札幌市中央区南 22 条西 13 丁目
電話　011(512)5430
印　刷　㈱アイワード